

2026 年 3 月

食料安全保障月報 (第 57 号)



令和 8 年 3 月 31 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報(生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等)について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2026年3月食料安全保障月報(第57号)

目次

概要編

I 2026年3月の主な動き	1
II 2026年3月の穀物等の国際価格の動向	4
III 2025/26年度の穀物需給(予測)のポイント	4
IV 2025/26年度の油糧種子需給(予測)のポイント	4
V 今月の注目情報「米国の小麦、とうもろこし及び大豆の生産・輸出動向等」	5

(資料)

1-1~3 穀物等の主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較)	9
1-4 穀物等の国際価格の動向	12
1-5 サプライチェーン等に関する状況	13
2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	14
3 穀物等の期末在庫率の推移(穀物全体、品目別)	15
4 加工食品の主な輸入原材料(穀物等を除く)の状況	17
5 食品小売価格の動向	21
6 海外の畜産物の需給動向(ALIC提供)	22
7 FAO食料価格指数	23

今月のコラム

「我が国の食料政策において最も重要な国の一つ、カナダについて(その2)」	24
--------------------------------------	----

品目別需給編

I 穀物	
1 小麦	1
<米国> 2026/27年度の生産量は前年度から6.3%減少する見込み	
<カナダ> 2025/26年度の輸出量は前年度から1.8%減となるも史上2番目の見込み(AAFC)	
<豪州> 2025/26年度の前年度から5.5%増加する見込み(ABARES)	
<EU27> 2025/26年度の前年度から20.1%増加する見込み(EC)	
<ロシア> 2025/26年度の前年度から1.2%増加する見込み	
<ウクライナ> 2025/26年度の前年度から2.6%増加する見込み	
<中国> 2025/26年度の前年度から43.9%増加する見込み	
2 とうもろこし	9
<米国> 2025/26年度の前年度から14.3%増加する見込み	
<ブラジル> 2025/26年度の前年度から2.9%減少する見込み	
<アルゼンチン> 2025/26年度の前年度から4.0%増加する見込み	
<ウクライナ> 2025/26年度の前年度から14.6%増加する見込み	
<中国> 2025/26年度の前年度から2.1%増加する見込み	

3 コメ	1 5
<タイ>	2025/26 年度の輸出量は、前年度から 10.9%減少する見込み
<米国>	2025/26 年度の輸出量は、前年度から 5.9%減少する見込み
<中国>	2025/26 年度の輸出量は、前年度から 65.2%増加する見込み
<インド>	2025/26 年度の輸出量は、前年度から 5.1%増加する見込み
<ベトナム>	2025/26 年度の輸出量は、前年度から 2.0%減少する見込み
II 油糧種子	
大豆	2 1
<米国>	2025/26 年度の生産量は前年度から 2.6%減少する見込み
<ブラジル>	2025/26 年度の生産量は前年度から 5.0%増加する見込み
<カナダ>	2025/26 年度の生産量は前年度から 10.7%減少する見込み(AAFC)
<中国>	2025/26 年度の生産量は前年度から 1.2%増加する見込み
<アルゼンチン>	2025/26 年度の生産量は前年度から 6.1%減少する見込み
(参考1)本レポートに使用されている各国の市場年度について(2025/26 年度)	2 7
(参考2)単位換算表	2 7
(参考3)各国のクロープカレンダー一覧(主要品目毎)	2 8

【利用上の注意】

表紙写真:ロシアのクラスノーダル地方の小麦。スノーカバー不足により1月末の寒波の影響を受け、葉の一部が黄化している。(撮影日:2026年2月18日)

(概要編)

I 2026年3月の主な動き

主要穀物等の生産量等について

3月の米国農務省(USDA)の需給報告によれば、2025/26年度の各品目の生産量等の状況は以下のとおり。

小麦の生産量は、豪州等で下方修正されたものの、ウクライナ及びカザフスタンで上方修正され、前月から0.3百万トン上方修正された。前年度からは、イラン、パキスタン、シリア、イラク、トルコ等で減少するものの、EU、アルゼンチン、ロシア、インド、カナダ、豪州等で増加し、世界全体の生産量は842.1百万トンと史上最高となる見通し。

とうもろこしの生産量は、アルゼンチン等で下方修正されたものの、ウクライナ、ブラジル等で上方修正され、前月から1.5百万トン上方修正された。前年度からは、ブラジル、EU、セルビア、タンザニア等で減少するものの、米国、中国、ウクライナ、メキシコ、ザンビア、アルゼンチン、パキスタン等で増加し、世界全体の生産量は1,297.4百万トンと史上最高となる見通し。

大豆の生産量は、アルゼンチン、ウクライナ等で下方修正され、前月から1.0百万トン下方修正された。前年度からは、ブラジル、ロシア、パラグアイ等で増加するものの、アルゼンチン、米国、インド、ウクライナ等で減少し、世界全体の生産量は427.2百万トンと史上最高の前年度からわずかに減少する見通し。

期末在庫量は、とうもろこしは前年度から減少、小麦及び大豆は前年度から増加となっている。消費需要は引き続き旺盛であり、注視が必要。

FAO(国連食糧農業機関)が公表している食料価格指数については、主に穀物、肉、植物油の価格指数の上昇が、乳製品と砂糖の価格指数の下落を上回ったこと等により、1月の124.2から、2月(最新値)は125.3と上昇(参考:2025年2月126.6、2024年2月117.4、2023年2月130.7、2022年2月141.7、2021年2月116.5)。海上運賃については、バルチック海運指数(穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数)が、直近5カ年の平均値より約1割高い水準で推移。



写真:ベトナム・カントー市のコメの圃場。

登熟期を迎えている。

撮影日:2026年3月8日



写真:ブラジル・マット・グロソ州のとうもろこしの圃場。3葉期を迎えている。

撮影日:2026年3月2日

ウクライナの生産・輸出動向

3月のUSDAの需給報告によれば、2025/26年度のウクライナの小麦の生産量は、前月予測から100万トン上方修正され、単収が減少するものの、収穫面積が増加することを受け、前年度から3%増加し2,400万トンとなる見込み。また、輸出量は、前月予測から50万トン下方修正され、前年度から14%減少し1,350万トンとなる見込み。

2025/26年度のとうもろこしの生産量は、前月予測から170万トン上方修正され、収穫面積及び単収が増加することを受け、前年度から15%増加し3,070万トンとなる見込み。また、輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度から10%増加し2,200万トンとなる見込み。

ウクライナ国家統計局の2月25日の発表によれば、2025/26年度の小麦の生産量は、前年度から3.3%増の2,327万トン。2025/26年度のとうもろこしの生産量は、前年度から13.9%増の3,068万トン。

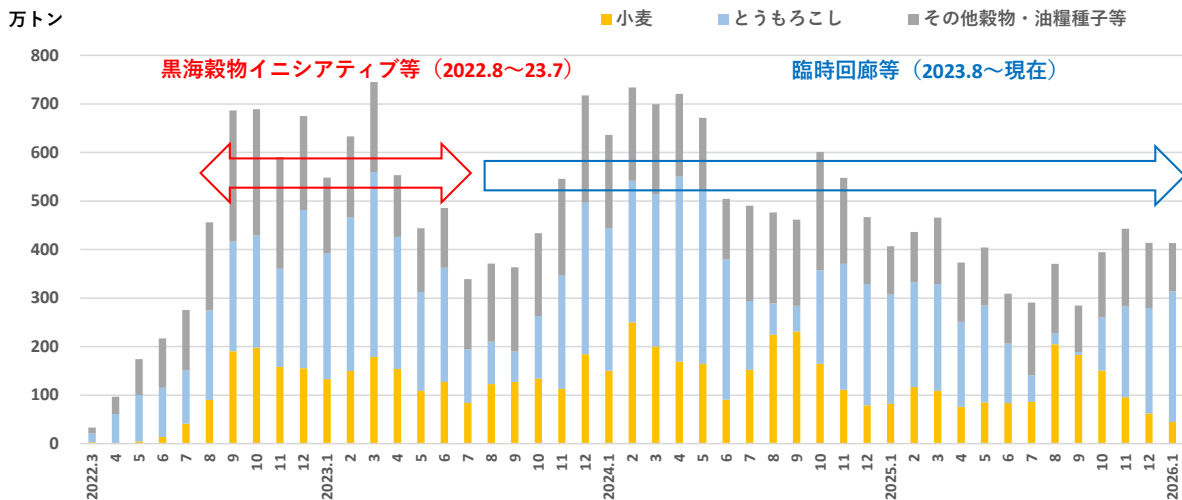
現地情報会社によれば、冬小麦を含む秋播き作物は概ね無事に越冬を終え、枯死や再播種はほとんどの地域で10%未満に抑えられる見込み。

臨時回廊からの輸出状況

2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア及びトルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意(黒海穀物イニシアティブ)により、同年8月以降、オデーサ港等3港からの輸出が再開したが、2023年7月17日にロシアが同イニシアティブからの離脱を表明し、輸出が停止した。

黒海穀物イニシアティブの停止後、ウクライナは、ルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通過する新ルート「臨時回廊」を国際海事機関(IMO)に通報し、2023年8月以降、運用が開始された。現在、臨時回廊のほか、運河等を利用し、ルーマニアのコンスタンツァ港などを経由した輸出等が行われているものの、ロシアによるウクライナの港湾インフラ等に対する攻撃が続いており、引き続き輸出動向について注視が必要。

(参考) ウクライナの輸出量の推移(月毎)(2022年3月～2026年1月)



出典:ウクライナ経済・環境・農業省、ウクライナ穀物協会のデータをもとに農林水産省で作成
注:データは港湾、鉄道、陸路などすべての輸出の計

1 アルゼンチン:2025/26 年度の大豆及びとうもろこしの生産量は前月から下方修正

USDA によれば、2025/26 年度のアグゼンチンの大豆生産量は、前月予測から1%下方修正され、前年度から6%減の4,800 万トンとなる見込み(図1)。これは、収穫面積が前月予測から2%上方修正されるものの、前年度から4%減少し、1,680 万ヘクタールとなるとともに、単収も前月予測から3%下方修正され、前年度から2%減少の2.86 トン/ヘクタールとなることによる。

アルゼンチンでは、早植え大豆(75%)と遅植え大豆(25%)が作付けされている。収穫面積は、アルゼンチン農牧漁業庁(SAGyP)のデータに基づき上方修正されたものの、単収は、土壌水分量の不足により下方修正された。1~2月の降雨量は、地域差が大きく、主要大豆生産地の総降雨量は平年並みかそれ以下に留まった(図2)。SAGyP によれば、早植え大豆の作柄は良好であるものの、遅植え大豆は水分不足により、被害が生じている。

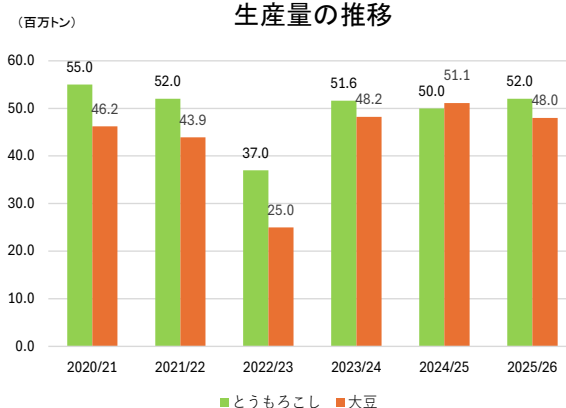
USDA によれば、2025/26 年度のアグゼンチンのとうもろこし生産量は、前月から2%下方修正されたものの、前年度から4%増の5,200 万トンとなる見込み(図1)。これは、単収が前年度から2%減少し6.93 トン/ヘクタールとなるものの、収穫面積が前年度から9%増加し750 万ヘクタールとなることによる。

アルゼンチンでは、早植えとうもろこし(12月1日より前に植えるとうもろこし)と遅植えとうもろこし(12月1日以降に植えるとうもろこし)が作付けされている。ここ数週間、主にアルゼンチン中部及び北部の農業地域で降雨が記録されたものの、2月の降雨量は、1月から既に低下していた土壌水分量を補充するには不十分であった(図2)。現在、早植えとうもろこしの収穫が進行している。

2 豪州:2025/26 年度の小麦生産量は史上3番目となる見込み

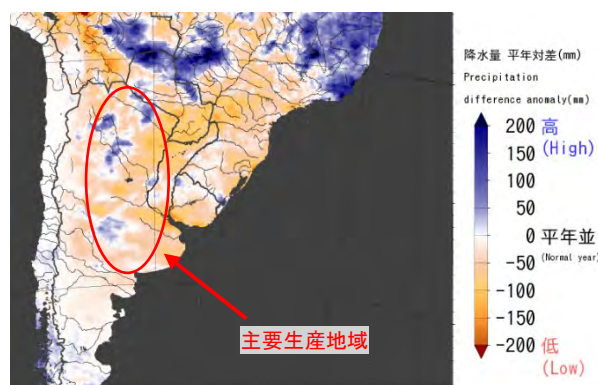
USDA によれば、2025/26 年度のアグ州の小麦生産量は、豪州農業資源経済科学局(ABARES)の3月の報告書に基づき、前月予測から3%下方修正されたものの、前年度から6%増、過去5年平均から7%増の3,600 万トンと史上3番目の生産量となる見込み。特にウエスタンオーストラリア州では、好天に恵まれ、史上最高の生産量を記録した。

図1:アルゼンチン大豆及びとうもろこしの生産量の推移



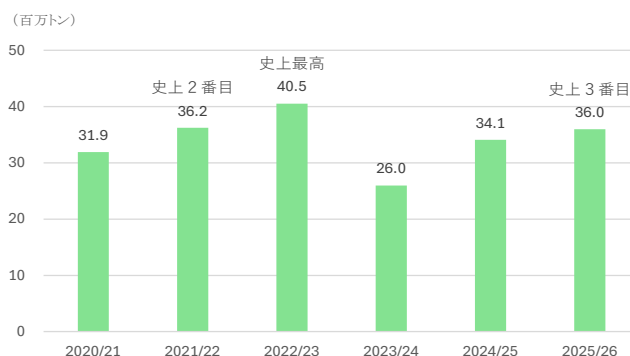
出典:USDA「PS&D」(2026.3.10)をもとに農林水産省で作成

図2:アルゼンチンの降水量平年対差(2026年2月)



資料:農業情報気象衛星モニタリングシステム(JASMAI)

図3:豪州の小麦の生産量の推移



出典:USDA「PS&D」(2026.3.10)をもとに農林水産省で作成

II 2026年3月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、2月末、210ドル/トン台後半で推移。3月に入り、米国の冬小麦生産地域の降雨等を受け200ドル/トン台後半まで下落したものの、中東情勢や米国の冬小麦生産地域の乾燥懸念等を受け上昇し、3月中旬現在、220ドル/トン台後半で推移。

とうもろこしは、2月末、170ドル/トン台前半で推移。3月に入り、中東情勢への懸念等を受け170ドル/トン台半ばまで上昇後、170ドル/トン台前半まで下落。その後米国のとうもろこしの作付面積が縮小するとの予想等を受け上昇し、3月中旬現在、170ドル/トン台後半で推移。

コメは、2月末、420ドル/トン台前半で推移。3月に入り、世界的な供給増及び需要の低迷等を受け下落し、3月中旬現在、390ドル/トン台前半で推移。

大豆は、2月末、420ドル/トン台半ばで推移。3月に入り、中東情勢への懸念や中国による米国産大豆購入への期待等を受け上昇し、3月中旬現在、440ドル/トン台半ばで推移。

(注)小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場(期近物)、コメはタイ国家貿易委員会価格

III 2025/26年度の穀物需給(予測)のポイント

3月のUSDAの需給報告によれば、2025/26年度の世界の穀物全体の生産量は、前年度から4.3%増の29.77億トン。消費量は、前年度から3.0%増の29.60億トンとなり、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度から増加するものの、期末在庫率は前年度を下回り26.8%となる見込み(P14資料2参照)。

生産量は、前年度から、小麦、とうもろこしは増加、コメは減少し、穀物全体では増加となり、29.77億トンの見込み。

消費量は、前年度から、小麦、とうもろこし、コメは増加し、穀物全体でも増加となり、29.60億トンの見込み。

貿易量は、前年度から、小麦、とうもろこし、コメは増加し、穀物全体でも増加となり、5.37億トンの見込み。

期末在庫量は、7.92億トンと前年度より増加するものの、期末在庫率は26.8%と前年度より減少する見込み。

(注:数値は3月のUSDA「PS&D」による)

IV 2025/26年度の油糧種子需給(予測)のポイント

3月のUSDAの需給報告によれば、2025/26年度の油糧種子全体の生産量は、前年度を上回り6.98億トン。消費量も前年度を上回り6.90億トンとなり、前年度に引き続き、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度から増加し、期末在庫率も前年度をわずかに上回り21.2%となる見込み。

(注:数値は3月のUSDA「PS&D」による)

V 今月の注目情報:米国の小麦、とうもろこし及び大豆の生産・輸出動向等

USDAは2月19、20日に農業アウトLOOKフォーラムを開催し、2026/27年度の小麦、とうもろこし及び大豆の需給見通しを公表した。当該見通し等の内容についてまとめた。

注:文中の「2025/26年度」等は市場年度で、米国における小麦の市場年度は2025年6月から2026年5月、とうもろこし及び大豆は2025年9月から2026年8月。

1 2025/26年度の生産・輸出動向等

(1)小麦

3月10日公表のUSDA「PS&D」によれば、2025/26年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収が史上最高となることを受け前年度(53.9百万トン)から0.3%増、過去5年平均(48.4百万トン)から11.5%増の54.0百万トンとなる見込み。輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度(22.5百万トン)から9.0%増、過去5年平均(22.2百万トン)から10.2%増の24.5百万トンとなる見込み。同「Wheat Outlook」(2026.3.12)によれば、2025/26年度の輸出量は、年度前半に比べ直近数か月の輸出ペースは鈍化しているものの、現時点では前年同期を上回っている。メキシコ、フィリピン向け等が増加している一方、韓国向けは前年を下回った。ナイジェリア向けは前年から2倍以上に増加し、2021/22年度以降の同期としては過去最高となっており、インドネシア及びバングラデシュ向けも前年から急増し、両国とも米国産小麦の追加購入に合意する覚書を締結していることが要因とみられる。

同「Global Agricultural Trade System」よれば、2025/26年度のうち2025年6月～2026年1月の輸出量は、前年同期(1,401.3万トン)に比べ21.0%増の1,695.8万トンとなっている。輸出先国別には、メキシコ282.5万トン(16.7%)、フィリピン169.2万トン(10.0%)、ナイジェリア137.9万トン(8.1%)の順となっている(表1)。

(2)とうもろこし

USDAによれば、2025/26年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収が史上最高となることを受け前年度(378.3百万トン)から14.3%増、過去5年平均(370.8百万トン)から16.6%増の432.3百万トンと史上最高となる見込み。輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度(72.6百万トン)から15.5%増、過去5年平均(60.9百万トン)から37.6%増の83.8百万トンとなる見込み。同「Feed Outlook」(2026.3.12)によれば、2025/26年度の輸出量のうち2025年9～12月の輸出量は、11億100万ブッシェル(2,795万トン)となり、前年同期(1,855万トン)に比べ51%増加し、12月までの累計としては史上最高となった。

同「Global Agricultural Trade System」よれば、2025/26年度のうち2025年9月～2026年1月の輸出量は、前年同期(2,471.4万トン)に比べ39.8%増の3,455.4万トンとなっている。輸出先国別には、メキシコ1,125.9万トン(32.6%)、日本592.4万トン(17.1%)、コロンビア343.6万トン(9.9%)の順となって

表1 米国の小麦の輸出先国と輸出量

2023/24年度 (2023年6月～2024年5月)		2024/25年度 (2024年6月～2025年5月)		2024/25年度 (2024年6月～2025年1月)		2025/26年度 (2025年6月～2026年1月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
メキシコ	325.7	17.6	メキシコ	400.8	18.3	メキシコ	250.8	17.9
フィリピン	270.7	14.6	フィリピン	245.0	11.2	フィリピン	159.4	11.4
中国	203.6	11.0	韓国	238.7	10.9	韓国	150.7	10.8
日本	197.1	10.6	日本	215.1	9.8	日本	143.5	10.2
韓国	128.7	6.9	台湾	103.5	4.7	台湾	69.4	5.0
その他	730.1	39.3	その他	990.4	45.2	その他	627.5	44.8
計	1,855.9	100.0	計	2,193.5	100.0	計	1,401.3	100.0
						計	1,695.8	100.0

資料:USDA「Global Agricultural Trade System」をもとに農林水産省で作成

表2 米国のとうもろこしの輸出先国と輸出量

2023/24年度 (2023年9月～2024年8月)		2024/25年度 (2024年9月～2025年8月)		2024/25年度 (2024年9月～2025年1月)		2025/26年度 (2025年9月～2026年1月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
メキシコ	2,284.7	40.0	メキシコ	2,554.8	35.2	メキシコ	1,029.3	41.6
日本	1,115.0	19.5	日本	1,334.0	18.4	日本	404.9	16.4
コロンビア	624.7	10.9	コロンビア	762.4	10.5	コロンビア	310.0	12.5
中国	299.0	5.2	韓国	612.5	8.4	韓国	144.0	5.8
カナダ	275.1	4.8	台湾	234.6	3.2	スペイン	108.2	4.4
その他	1,119.6	19.6	その他	1,754.6	24.2	その他	474.9	19.2
計	5,718.1	100.0	計	7,252.9	100.0	計	2,471.4	100.0
						計	3,455.4	100.0

資料:USDA「Global Agricultural Trade System」をもとに農林水産省で作成

(表2)。

(3)大豆

USDAによれば、2025/26年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収が史上最高となるものの、収穫面積が減少することを受け前年度(119.0百万トン)から2.6%減、過去5年平均(117.0百万トン)から0.8%減の116.0百万トンとなる見込み。輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度(51.2百万トン)から16.3%減、過去5年平均(54.3百万トン)から21.1%減の42.9百万トンとなる見込み。粉砕量(Crush)は、前月予測から13.6万トン上方修正され、前年度(66.5百万トン)から5.3%増、過去5年平均(61.4百万トン)から14.1%増の70.1百万トンとなる見込み。同「Oil Crops Outlook」(2026.3.12)によれば、2025/26年度の粉砕量は、大豆製品に対する米国内外の堅調な需要により史上最高となる見込み。2026年1月の米国大豆粉砕量は前月から5.4万トン減少したものの、前年同月に比べ40.8万トン増加し、約620万トンとなった。

同「Global Agricultural Trade System」によれば、2025/26年度のうち2025年9月～2026年1月の輸出量は、前年同期(3,531.2万トン)に比べ35.4%減の2,279.5万トンとなっている。輸出先国別には、中国460.2万トン(20.2%)、メキシコ278.2万トン(12.2%)、エジプト212.9万トン(9.3%)の順となっている(表3)。

表3 米国の大豆の輸出先国と輸出量

2023/24年度 (2023年9月～2024年8月)			2024/25年度 (2024年9月～2025年8月)			2024/25年度 (2024年9月～2025年1月)			2025/26年度 (2025年9月～2026年1月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
中国	2,495.9	53.9	中国	2,264.9	44.2	中国	1,853.8	52.5	中国	460.2	20.2
メキシコ	485.6	10.5	メキシコ	520.8	10.2	メキシコ	248.9	7.0	メキシコ	278.2	12.2
インドネシア	240.4	5.2	エジプト	333.9	6.5	エジプト	161.0	4.6	エジプト	212.9	9.3
ドイツ	233.3	5.0	ドイツ	246.4	4.8	ドイツ	122.7	3.5	パキスタン	140.1	6.1
日本	213.9	4.6	日本	217.2	4.2	イタリア	103.6	2.9	インドネシア	117.2	5.1
その他	957.5	20.7	その他	1,539.6	30.1	その他	1,041.2	29.5	その他	1,070.8	47.0
計	4,626.6	100.0	計	5,122.7	100.0	計	3,531.2	100.0	計	2,279.5	100.0

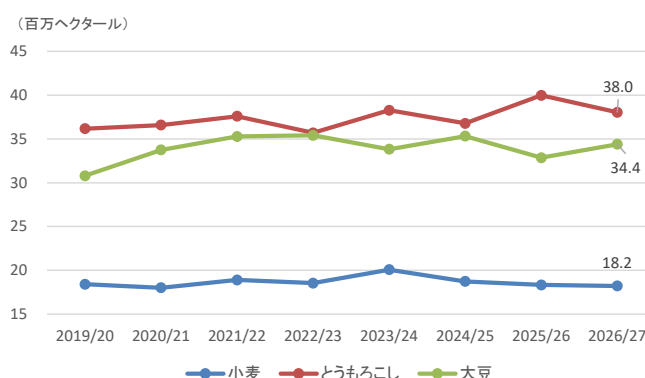
資料:USDA「Global Agricultural Trade System」をもとに農林水産省で作成

2 2026/27年度の生産・輸出動向等

(1)小麦

USDA「Grains and Oilseeds Outlook」(2026.2.19)によれば、2026/27年度の作付面積は、前年度(18.3百万ヘクタール)から0.7%減、過去5年平均(18.9百万ヘクタール)から3.7%減の18.2百万ヘクタールとなる見込み(図)。2026/27年度の冬小麦の作付面積は、前年度から0.5%減少し1,335万ヘクタール、春小麦及びデュラム小麦の総作付面積は、北部平原地域で大豆やその他油糧種子へ作付けがシフトすることから、前年度からわずかに減少する見込み。生産量は、前年度から6.3%減の50.6百万トンとなる見込み。輸出量は、前年度から5.6%減の23.1百万トンとなる見込み(表4)。

図 米国の小麦、とうもろこし及び大豆の作付面積の推移



資料:USDA「Grains and Oilseeds Outlook」(2026.2.19)をもとに農林水産省で作成

(2)とうもろこし

USDAによれば、2026/27年度の作付面積は、前年度(40.0百万ヘクタール)から4.9%減となるものの、過去5年平均(37.7百万ヘクタール)からは1.0%増の38.0百万ヘクタールとなる見込み(図)。生産量は、前年度から7.4%減の400.2百万トンとなる見込み。消費量は、飼料用消費量が減少すると見込まれることから前年度から1.5%減の329.5百万トンとなる見込み。なお、エタノール用等消費量は前

年度同の 142.2 百万トンとなる見込み。輸出量は、世界的な需要は緩やかに増加するものの、南米の輸出競合国の輸出量増加により米国の輸出量は減少すると見込まれることから、前年度から 6.1%減の 78.7 百万トンとなる見込み。期末在庫量は、前年度から 13.6%減少し 46.7 百万トンとなり、期末在庫率は、前年度から 1.5 ポイント減少するものの、過去5年平均(10.8%)を上回り 11.4%となる見込み(表5)。

(3)大豆

USDA によれば、2026/27 年度の作付面積は、他作物に比べ収益性が高まっていることや、コーンベルト及びデルタ地域における輪作予想を踏まえ、前年度(32.9 百万ヘクタール)から 4.7%増となるものの、過去5年平均(34.5 百万ヘクタール)からは 0.4%減の 34.4 百万ヘクタールとなる見込み(図)。生産量は、前年度から 4.4%増の 121.1 百万トンとなる見込み。消費量は、大豆粕及び大豆油の需要増加を背景に搾油用消費量が増加すると見込まれることから前年度から 3.1%増の 75.2 百万トンとなる見込み(表6)。

過去数年間、大豆搾油量はバイオ燃料原料としての需要増により大幅に増加した。この増加は、米国環境保護庁(EPA)の再生可能燃料基準(RFS)における再生可能燃料混合義務量(RVO)と州レベルでの義務付けが牽引している。カリフォルニア州は、バイオ燃料の主要な消費地となっており、バイオディーゼルの消費割合は、2020 年のディーゼル燃料全体の約 25%から、2025 年第1～第3四半期には 70%以上に増加している。カリフォルニア州の増加ペースは鈍化すると見込まれるものの、ワシントン州やニューメキシコ州などの低炭素燃料基準(LCFS)導入州の需要も含め、カリフォルニア州はバイオディーゼルの重要な市場であり続ける見込み。

USDA のバイオ燃料用大豆油の需要予測は、2025 年6月に発表された EPA の 2026 年及び 2027 年の RFS の RVO 案(表7のバイオディーゼル参照)に基づいている。また、今回の案では、再生可能燃料識別番号(RIN。製油業者等

表4 米国の小麦の需給見通し

(単位:百万トン)

年 度	2024/25	2025/26	2026/27(26年6月～27年5月)	
			予測値	対前年度増減率(%)
生産量	53.9	54.0	50.6	▲ 6.3
消費量	31.1	30.7	30.7	-
うち飼料用	3.1	2.7	2.7	-
輸 出 量	22.5	24.5	23.1	▲ 5.6
輸 入 量	4.1	3.3	3.3	-
期末在庫量	23.3	25.3	25.4	0.2
期末在庫率	43.4%	45.9%	47.2%	1.3
(参考)				
収穫面積(百万ha)	15.62	15.05	14.81	▲ 1.6
単収(t/ha)	3.44	3.58	3.42	▲ 4.7

資料:USDA「Grains and Oilseeds Outlook」(19 February 2026)をもとに農林水産省で作成。

注:換算の関係で他のUSDA公表値と数値が一致しない場合がある。

表5 米国のとうもろこしの需給見通し

(単位:百万トン)

年 度	2024/25	2025/26	2026/27(26年9月～27年8月)	
			予測値	対前年度増減率(%)
生産量	378.3	432.4	400.2	▲ 7.4
消費量	311.6	334.5	329.5	▲ 1.5
うち飼料用	138.5	157.5	152.4	▲ 3.2
エタノール用等	138.1	142.2	142.2	-
輸 出 量	72.6	83.8	78.7	▲ 6.1
輸 入 量	0.6	0.6	0.6	-
期末在庫量	39.4	54.0	46.7	▲ 13.6
期末在庫率	10.3%	12.9%	11.4%	▲ 1.5
(参考)				
収穫面積(百万ha)	33.59	36.95	34.84	▲ 5.7
単収(t/ha)	11.25	11.71	11.49	▲ 1.9

資料:USDA「Grains and Oilseeds Outlook」(19 February 2026)をもとに農林水産省で作成。

注:換算の関係で他のUSDA公表値と数値が一致しない場合がある。

表6 米国の大豆の需給見通し

(単位:百万トン)

年 度	2024/25	2025/26	2026/27(26年9月～27年8月)	
			予測値	対前年度増減率(%)
生産量	119.0	116.0	121.1	4.4
消費量	69.1	73.0	75.2	3.1
うち搾油用	66.5	69.9	72.3	3.3
輸 出 量	51.2	42.9	46.3	7.9
輸 入 量	0.8	0.5	0.5	-
期末在庫量	8.8	9.5	9.7	1.4
期末在庫率	7.3%	8.2%	8.0%	▲ 0.3
(参考)				
収穫面積(百万ha)	34.88	32.54	33.99	4.5
単収(t/ha)	3.41	3.56	3.56	-

資料:USDA「Grains and Oilseeds Outlook」(19 February 2026)をもとに農林水産省で作成。

注:換算の関係で他のUSDA公表値と数値が一致しない場合がある。

表7 2025 年6月に発表された再生可能燃料混合義務量案

単位:10億ガロン

区分	2023	2024	2025	2026 (案)	2027 (案)
再生可能燃料総量	20.94	21.54	22.33	24.02	24.46
先進型バイオ燃料	5.94	6.54	7.33	9.02	9.46
セルロース系バイオ燃料	0.84	1.09	1.38	1.30	1.36
バイオディーゼル	2.82	3.04	3.35	5.61	5.86
従来型バイオ燃料	15.00	15.00	15.00	15.00	15.00

出典:EPA「EPA Proposes New Renewable Fuel Standards to Strengthen U.S. Energy Security, Support Rural America, and Expand Production of Domestic Fuels」(2025.6.13)をもとに農林水産省で作成

が割り当てられた混合義務量を達成できない場合等に購入するクレジット。)について、輸入バイオ燃料や外国産原料を使用して米国内で生産されたバイオ燃料は、米国産原料を使用して米国内で生産されたバイオ燃料の半分の価値しかクレジットを受け取れないとしている。これを前提とすると、2026/27年度のバイオ燃料用大豆油の消費量は、前年度から25億ポンド増の173億ポンドに達すると予測され、大豆油価格は1ポンド当たり58セントまで上昇すると見込まれている。なお、最終的なRVOは、まだ決定されておらず、変更された場合、本予測は今後のUSDA公表のWASDEにおいて適宜見直される予定となっている。

2026/27年度の輸出量は、前年度から7.9%増の46.3百万トンと回復が見込まれる(表6)ものの、南米産の供給量増加により、世界全体における米国産の輸出のシェアは長期的には減少傾向となると見込まれている。特にブラジルでは、大豆生産量が史上最高となる見込みであり、これにより世界的に在庫が増加し、輸出可能な在庫量が米国収穫時期まで継続すると見込まれている。

2025/26年度の輸出量は13年ぶりの低水準になると見込まれており、世界全体の大豆輸出量に占める米国シェアは過去最低の23%となる見込み。米国最大の輸出先である中国は、2021/22年度から2023/24年度にかけて、年平均で2,870百万トンの米国産大豆を輸入していたが、関税措置により輸入量が減少した。2025年6~11月(2024/25年度末~2025/26年度初頭)にかけて、中国への米国産大豆輸出はゼロとなった。一方で、中国による米国製品への関税圧力により米国産大豆価格がブラジル産に比べて低くなったことから、中国以外の国への輸出量は2018年同期以来、最高水準となった。2025年10月30日には、米中協議が行われ、米国は、中国が2025年度末までに少なくとも1,200万トン、2026~2028年に各年最低2,500万トンの米国産大豆を購入するとの合意内容を発表した。本合意により輸出量は2025/26年度以前の水準に近づいたものの、米国産大豆価格は上昇し、ブラジル産との価格差が縮小したため、中国以外の市場における価格優位性は低下することとなった。

また、アルゼンチンが2025年9月に輸出税を一時的に撤廃したことで、11月に季節外れの輸出急増が発生し、米国の世界市場シェアにも影響を与えた。

3 今後の見通し

写真 インディアナ州のとうもろこし(2025年9月1日撮影)

2026/27年度の小麦、とうもろこし及び大豆の総作付面積は、前年度(91.2百万ヘクタール)から0.6%減、過去5年平均(91.1百万ヘクタール)からは0.5%減の90.7百万ヘクタールとなる見込み。

このうち小麦の作付面積は、近年減少が続いており、長期的にも減少傾向を辿るとみられており、今後の作付動向等について注視していく必要がある。

大豆については、2025/26年度の輸出量は、中国向けの減少により大きく減少した。2026/27年度は回復が見込まれるものの、南米産大豆との厳しい競合になるとみられる。一方で、バイオ燃料原料の需要増により、大豆搾油量は堅調に推移するとみられ、輸出も含めた需要や価格動向について注視していく必要がある。

とうもろこしについては、大豆等との輪作体系に含まれており、大豆の作付けが増加した場合、とうもろこしの作付けは減少する。直近の相場は大豆の作付けに有利となっており、2026/27年度はとうもろこしの作付けが減少するとみられる。バイオ燃料原料の需要の増加により、大豆相場は堅調に推移しており、今後も大豆の作付けに有利な状況が続くとみられる一方、輪作体系を維持する必要があることから過度な大豆への作付けシフトは起こらないとみられ、作付動向や需要動向について引き続き注視していきたい。



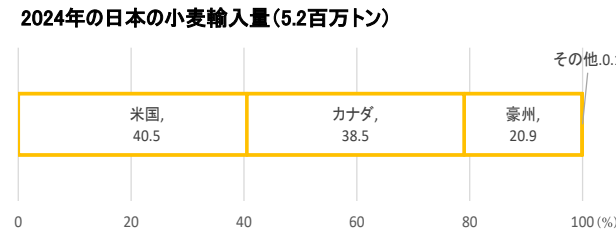
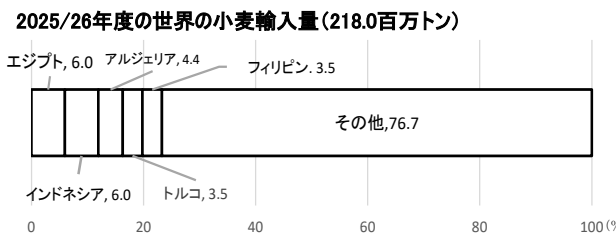
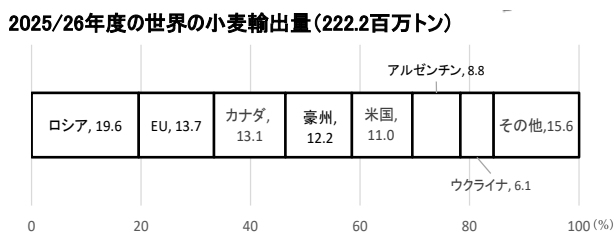
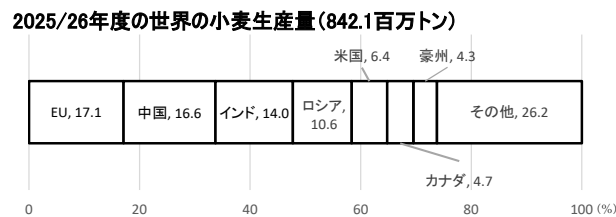
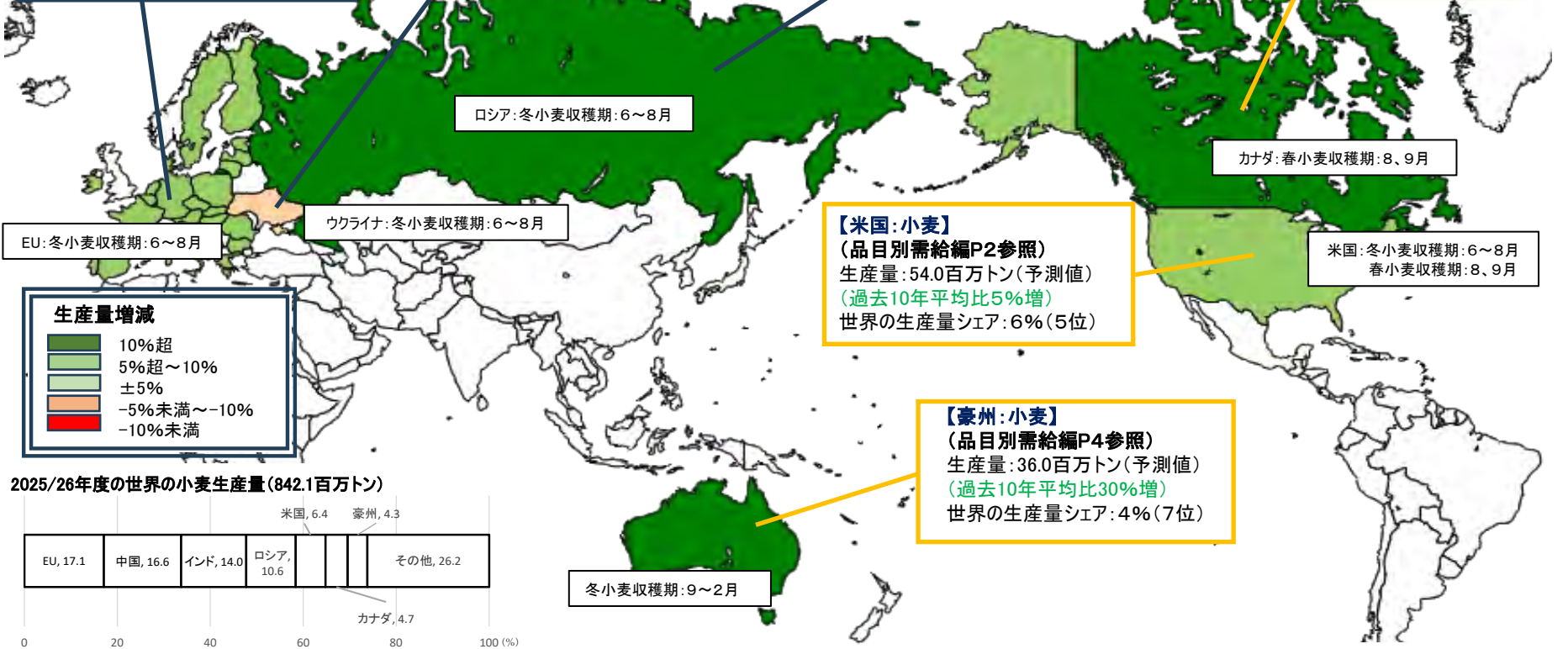
資料1-1 小麦の主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2025/26年度(3月版)

【EU:小麦】(品目別需給編P5参照)
 生産量:144.0百万トン(予測値)
 (過去10年平均比7%増)
 世界の生産量シェア:17%(1位)

【ウクライナ:小麦】(品目別需給編P7参照)
 生産量:24.0百万トン(予測値)
 (過去10年平均比8%減)
 世界の生産量シェア:3%(10位)

【ロシア:小麦】(品目別需給編P6参照)
 生産量:89.5百万トン(予測値)
 (過去10年平均比13%増)
 世界の生産量シェア:11%(4位)

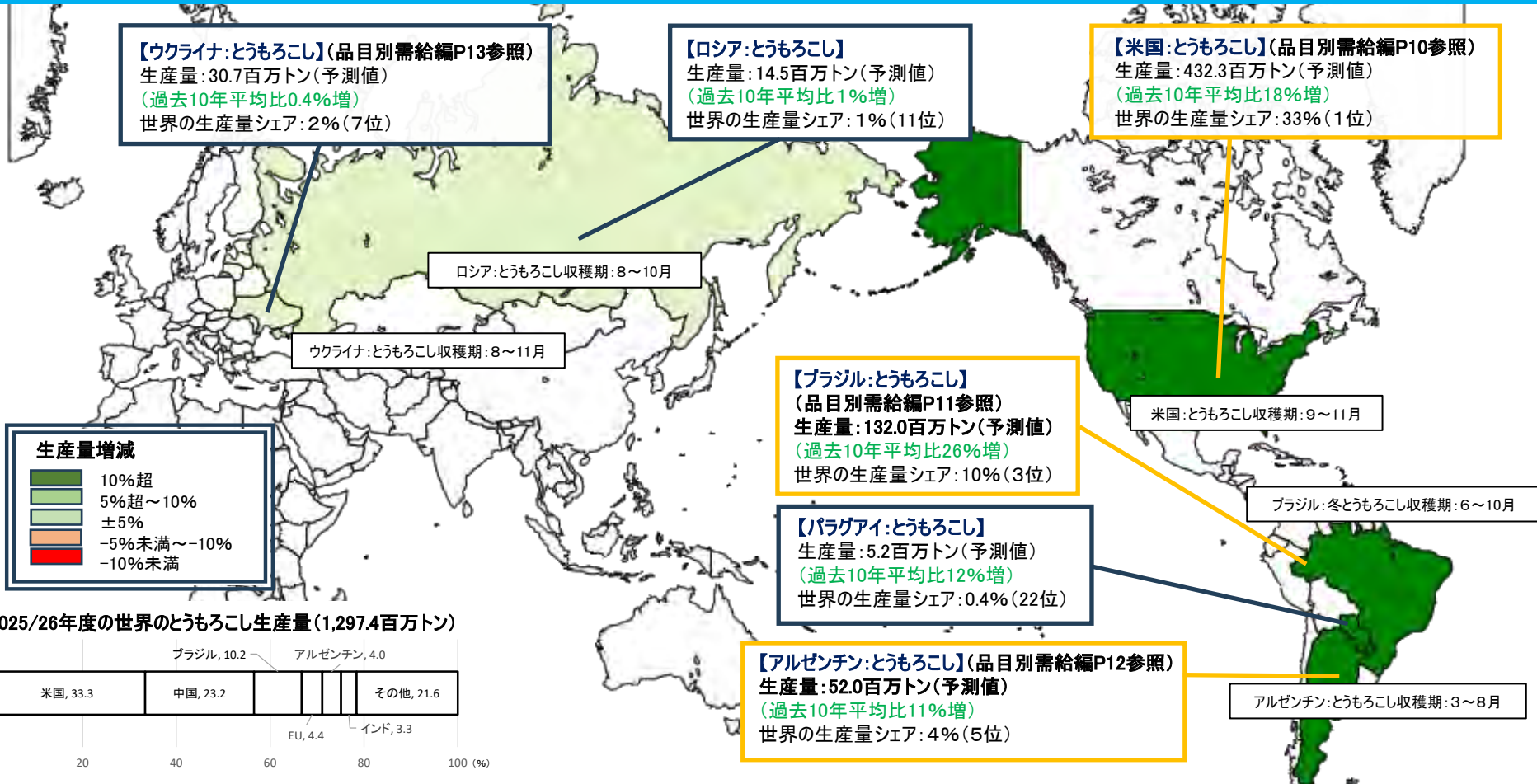
【カナダ:小麦】(品目別需給編P3参照)
 生産量:40.0百万トン(予測値)
 (過去10年平均比26%増)
 世界の生産量シェア:5%(6位)



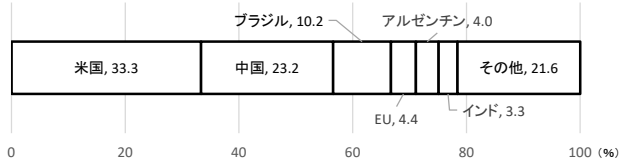
○ 2024年度の日本の小麦輸入量は533万トンであり、日本の小麦国内消費仕向量(650万トン、うち食用は512万トン)の82.0%を占める。
 ○ 輸入小麦の1人1日当たり供給熱量は256kcalと、1人1日当たり総供給熱量(2,248kcal)の11.4%を占める(2024年度)。

出典:USDA「PS&D」(2026.3)、財務省「貿易統計」(2024年輸入量)、農林水産省「令和6年度食料需給表(概算値)」(破線枠内)、AMIS「Supply and demand balances manual」(収穫期)をもとに農林水産省で作成。

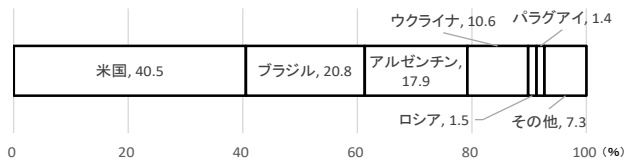
資料1-2 とうもろこしの主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2025/26年度(3月版)



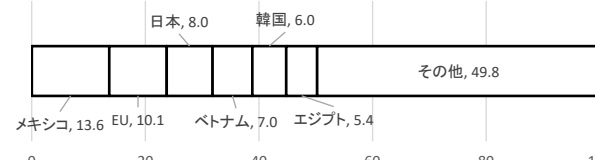
2025/26年度の世界のとうもろこし生産量(1,297.4百万トン)



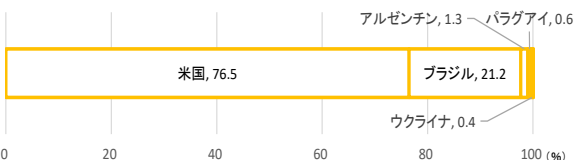
2025/26年度の世界のとうもろこし輸出量(206.9百万トン)



2025/26年度の世界のとうもろこし輸入量(192.7百万トン)



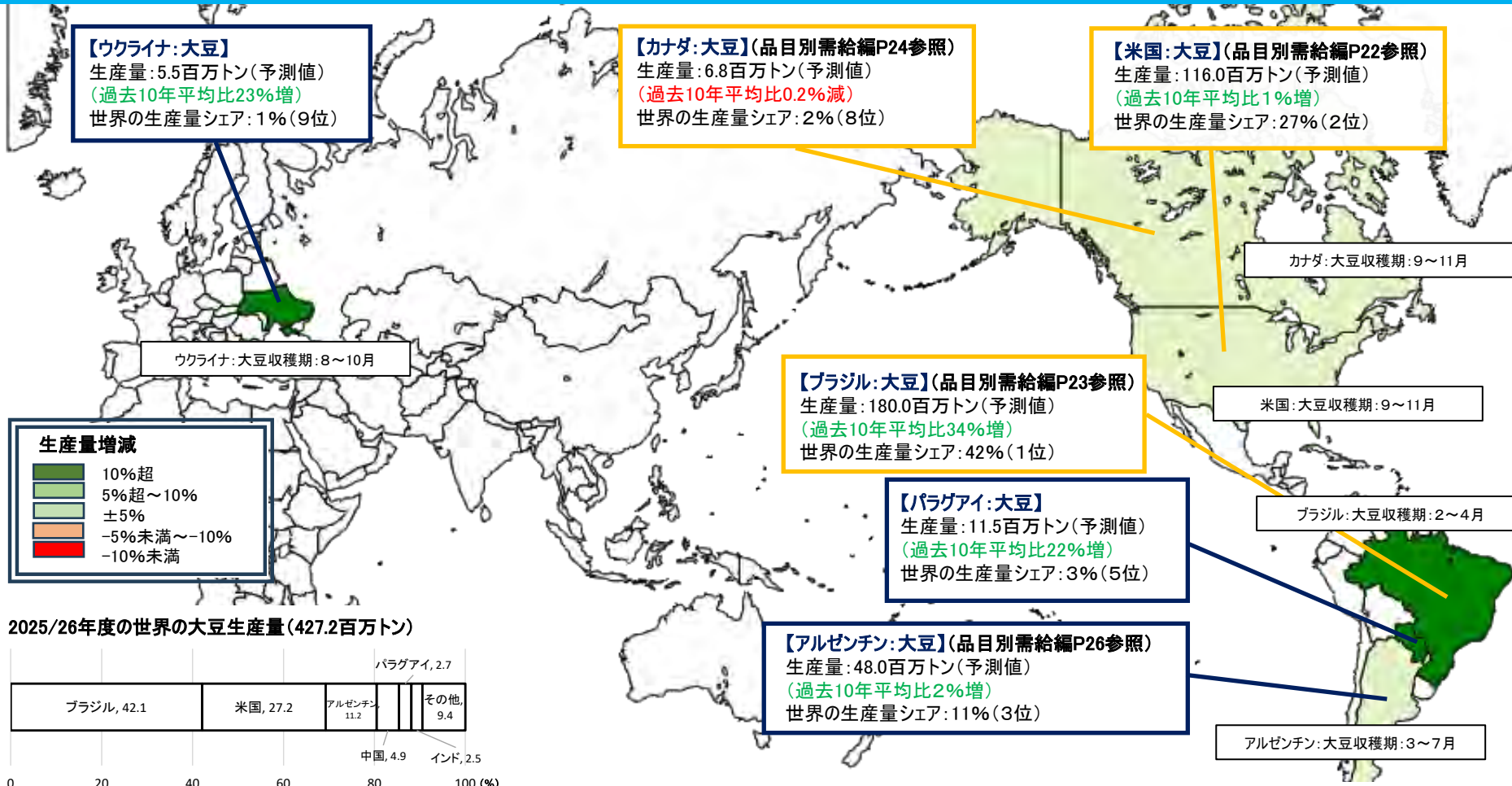
2024年の日本のとうもろこし輸入量(15.3百万トン)



○ 2024年度の日本のとうもろこし輸入量は1,522万トンと、日本のとうもろこし国内消費仕向量(1,518万トン、うち飼料用は1,194万トン)のほぼ全量を占める。

出典:USDA「PS&D」(2026.3)、財務省「貿易統計」(2024年輸入量)、農林水産省「令和6年度食料需給表(概算値)」(破線枠内)、AMIS「Supply and demand balances manual」(収穫期)をもとに農林水産省で作成。

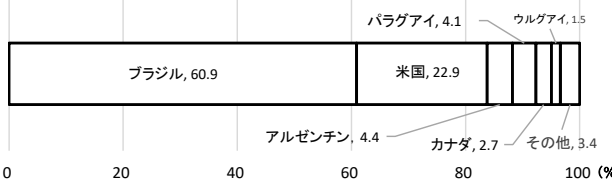
資料1-3 大豆の主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2025/26年度(3月版)



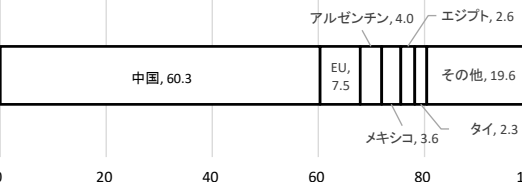
2025/26年度の世界の大豆生産量(427.2百万トン)



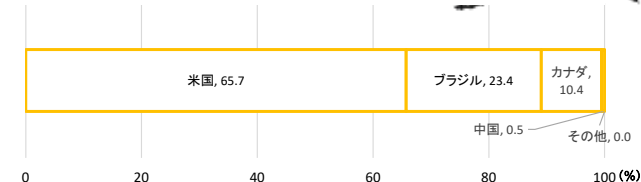
2025/26年度の世界の大豆輸出量(187.2百万トン)



2025/26年度の世界の大豆輸入量(185.6百万トン)



2024年の日本の大豆輸入量(3.17百万トン)



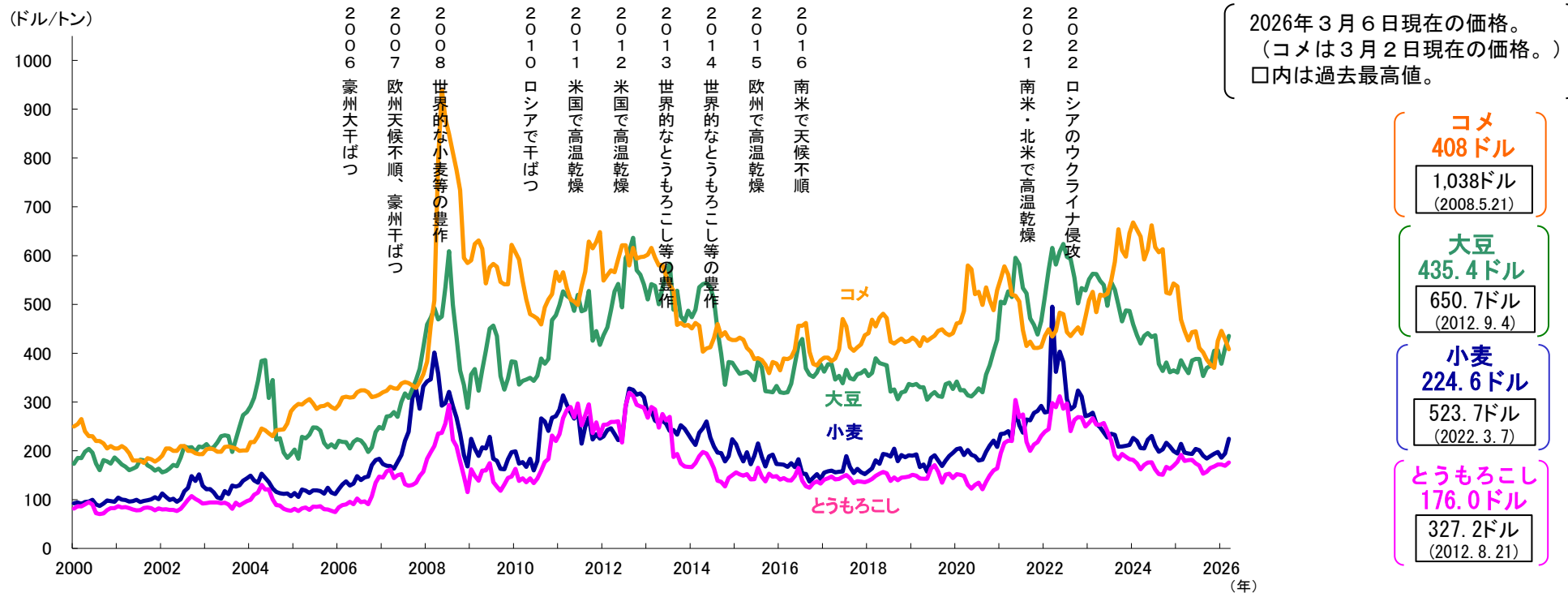
○ 2024年度の日本の大豆輸入量は309万トンであり、日本の大豆国内消費仕向量(359万トン、うち大豆油などの加工用は256万トン、食用は88万トン)の86.2%を占める。
○ 輸入大豆の1人1日当たり供給熱量は58kcalと、1人1日当たり総供給熱量(2,248kcal)の2.6%を占める(2024年度)。

出典:USDA「PS&D」(2026.3)、財務省「貿易統計」(2024年輸入量)、農林水産省「令和6年度食料需給表(概算値)」(破線枠内)、AMIS「Supply and demand balances manual」(収穫期)をもとに農林水産省で作成。

資料 1-4 穀物等の国際価格の動向 (ドル/トン)

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は下落。2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年、ロシアのウクライナ侵攻により、小麦は史上最高値を更新も、ウクライナからの臨時回廊等による輸出再開などもあり侵攻前の水準まで下落。とうもろこし、大豆はウクライナ侵攻時に高騰も、ブラジル等の豊作から侵攻前の水準まで下落。コメは、2022年9月以降、インドの輸出規制強化、インドネシアの需要増等から上昇も、2024年以降、インドの輸出規制解除等を受け下落。2025年11月以降、タイの洪水被害等を受け上昇するも、世界的な供給増等を受け、再び下落。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要等により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向



注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格(セツルメント)である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。なお、今月のコメは3月2日現在の価格。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料 1-5 サプライチェーン等に関する状況

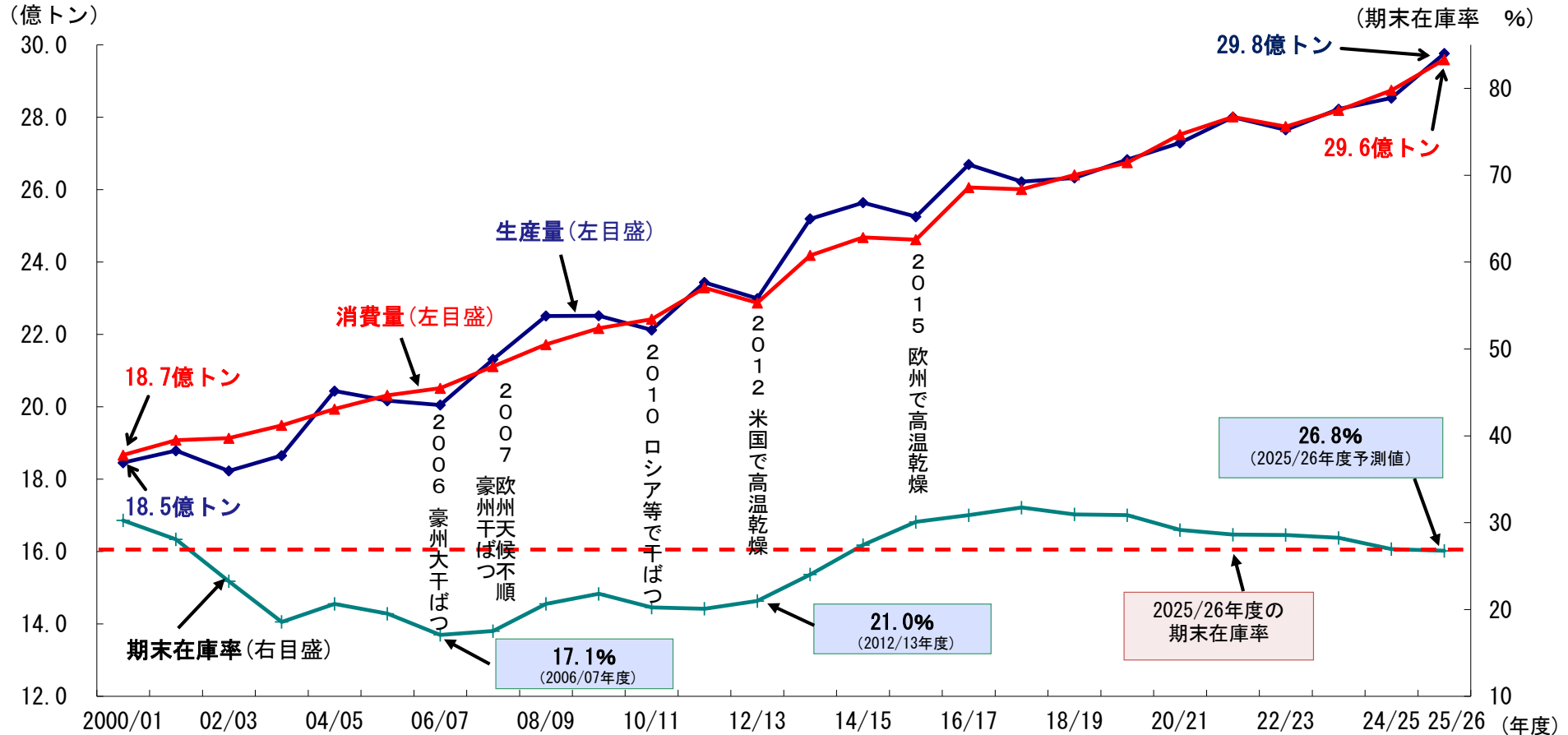
○サプライチェーン等に大きな影響を与える情報は特段なし (2026年2月24日時点)

生産国の情報	チョークポイント情報	その他
<p>○米国 中西部では寒波と干ばつが同時に発生し、ミシシッピ川及びオハイオ川の水位が大幅に低下し、はしけへの積載量が減少。さらに航行が制限されたことにより、輸送効率が悪化しはしけの運賃が上昇。はしけの輸送コスト上昇に伴い、鉄道やトラック輸送への代替も発生しているが、いずれもコスト高となり効率も悪い。アメリカ海洋大気庁の観測では、2月1日のミシシッピ川セントルイス地点の水位は「低水位しきい値」を下回っており、一時的に回復したものの再び低水位が続くと予測。寒波による氷結の影響でイリノイ川ハバナから北側区間がほぼ閉鎖され、とうもろこし、大豆、軟質赤色冬小麦(SRW)などの出荷が停滞。</p> <p>○ブラジル ①ブラジル食料供給公社(CONAB)によれば、2025/26年度のブラジルの穀物等の生産量は史上最高の3億5,300万トンとなる見込み。これにより物流への圧力が高まり、輸送コストは上昇する見通し。加えて、陸上運輸庁の規制強化により、最低運賃以下での契約はできない。2025年には最低運賃が0.82～3.55%引き上げられ、2025年第4四半期の平均運賃は前年同期比19%上昇。</p> <p>②2月20日、パラ州サンタレン港のカーギルの穀物輸出ターミナルが、タパジス川の浚渫事業の入札開始及びアマゾン流域3河川の管理を民営化とする大統領令に反対する先住民を含む地元抗議者らに占拠された。占拠は大豆の収穫期に発生し、同港はブラジルの重要な輸出拠点でもあることから穀物輸送に影響。2月23日、抗議を受けて大統領は大統領令を撤回。</p> <p>○アルゼンチン 2月14日の記事によれば、アルゼンチンでは乾燥が続く、とうもろこし及び大豆が広範囲で被害を受けている。コルドバ州の収穫が始まったとうもろこしでは、当初の収量予測を10～20%程度下回る見込み。大豆は約50万トン超の減産が見込まれる。</p> <p>○マレーシア マレーシアパームオイル協議会によれば、老朽化したパーム農園が2026年の約170万haから2027年には約200万haに拡大する見通しであると発表。2027年には約35%が樹齢19年以上となる見込み。また、霊芝菌の感染面積は約80万haに達している。このほか、インドネシアの違法な農園の摘発によりパーム油の供給が減少する見込みで、マレーシア産含むパーム油価格が上昇すると予測。</p>	<p>○パナマ運河 ①パナマ運河の通航に関し特段問題なし。1月のパナマ運河通航数は、1日平均34.2隻と、前月34.6隻と比べわずかに減少したものの、前年同月33.3隻と比べ増加。</p> <p>②パナマ最高裁が香港企業のCKハチソン社の港湾運営契約を違憲と判断したことを受け、2月23日、パナマ政府は、パナマ海事庁にバルボア港、クリストバル港及びその資産の掌握を命じた。CKハチソン社は操業停止となり、新たな事業者が決まるまでAPMターミナルズ社が港湾運営を担うと発表。</p> <p>○スエズ運河 2026年1月にスエズ運河を通過したコンテナ船は149隻で、2023年1月の441隻から大きく減少。</p>	<p>○輸送コスト 米国トランプ政権が新たに発表した「Maritime Action Plan」において、米国に入港する外国建造船に対して新たな重量ベースの港湾料金を課す方針が示された。</p>

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2025/26年度は、2000/01年度に比べ1.6倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2025/26年度の期末在庫率は、生産量が消費量を上回るものの、前年度より減少し、26.8%。過去の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

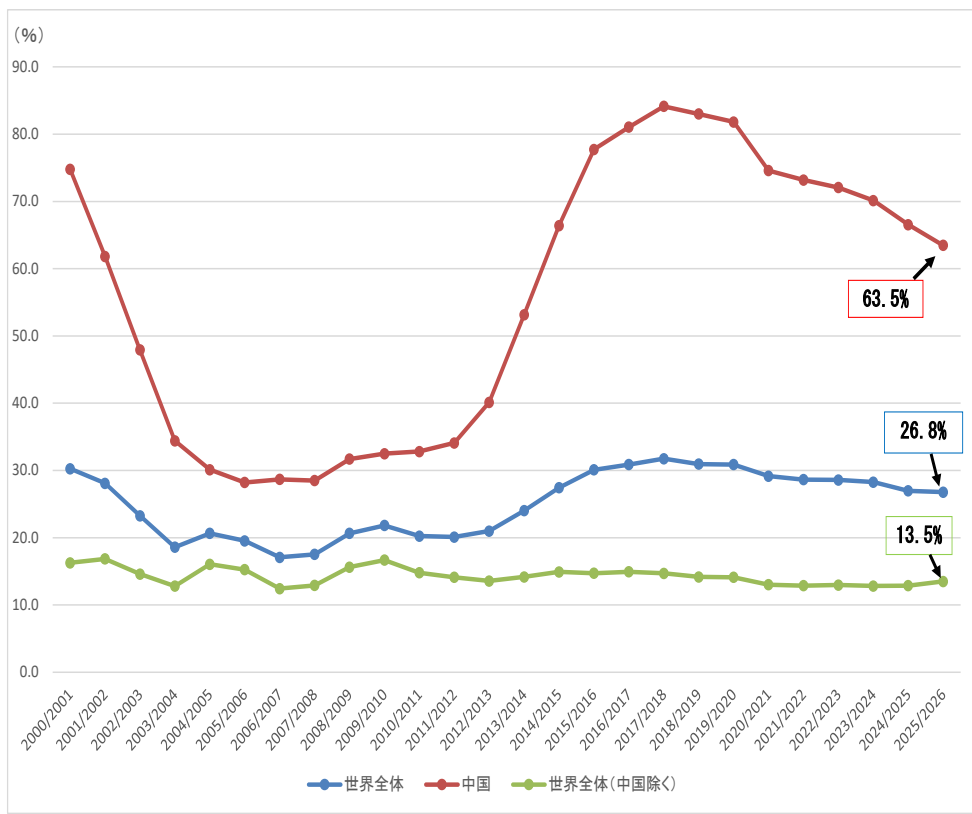


資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (March 2026)、 「PS&D」

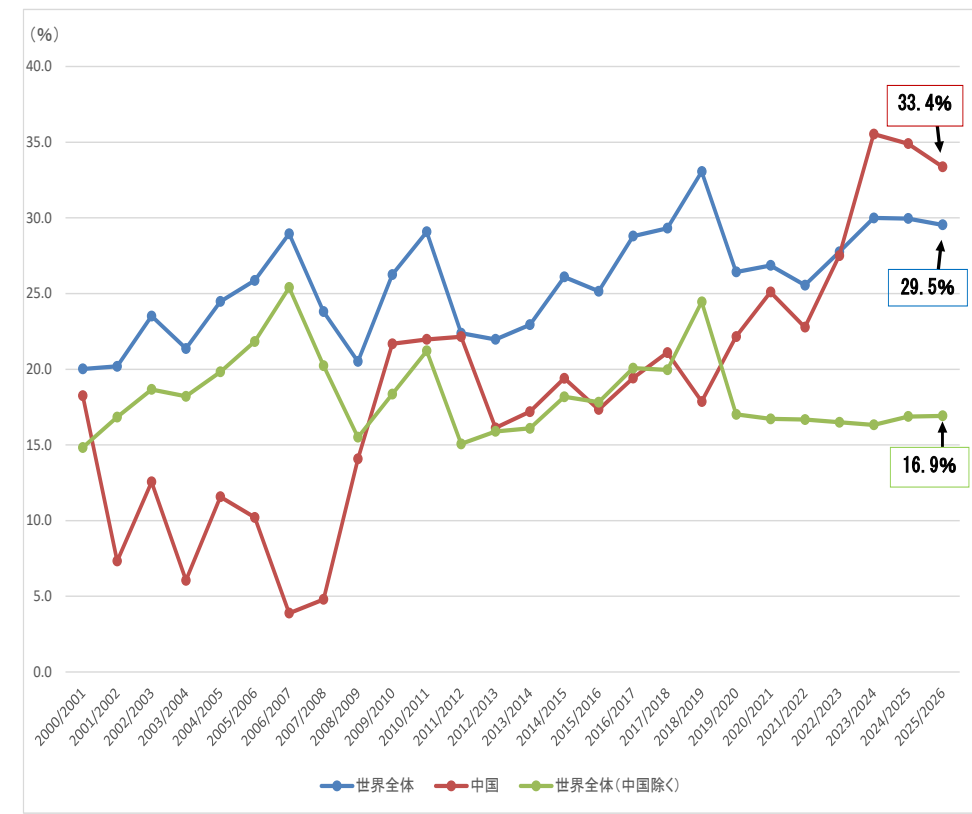
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移

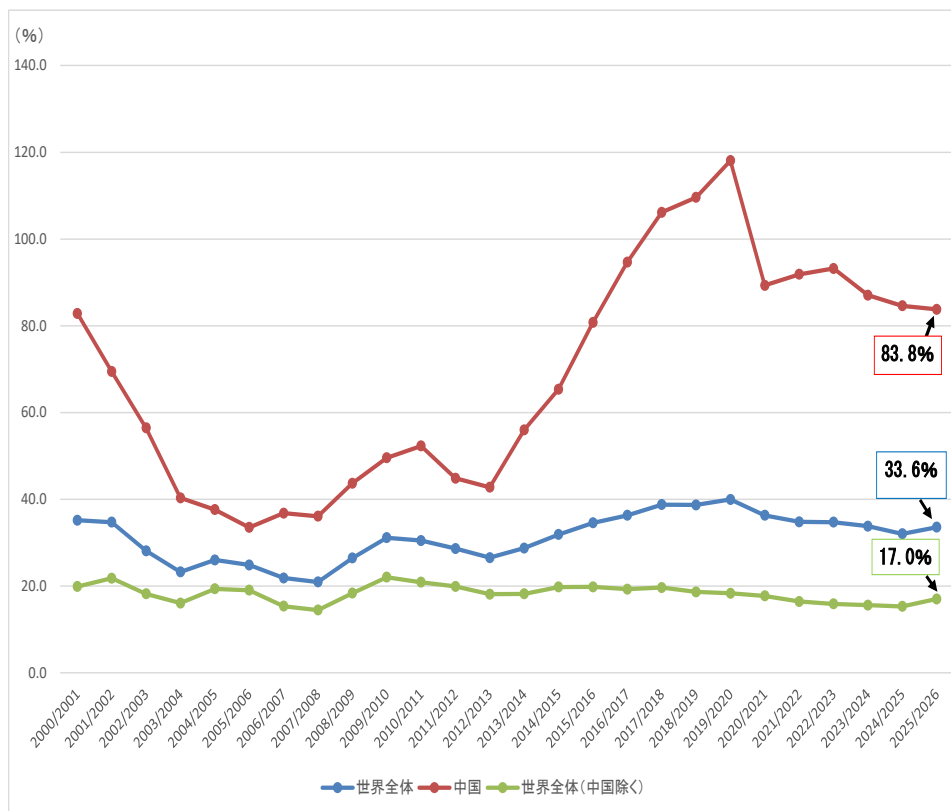


資料: 米国農務省「PS&D」(March 10, 2026)

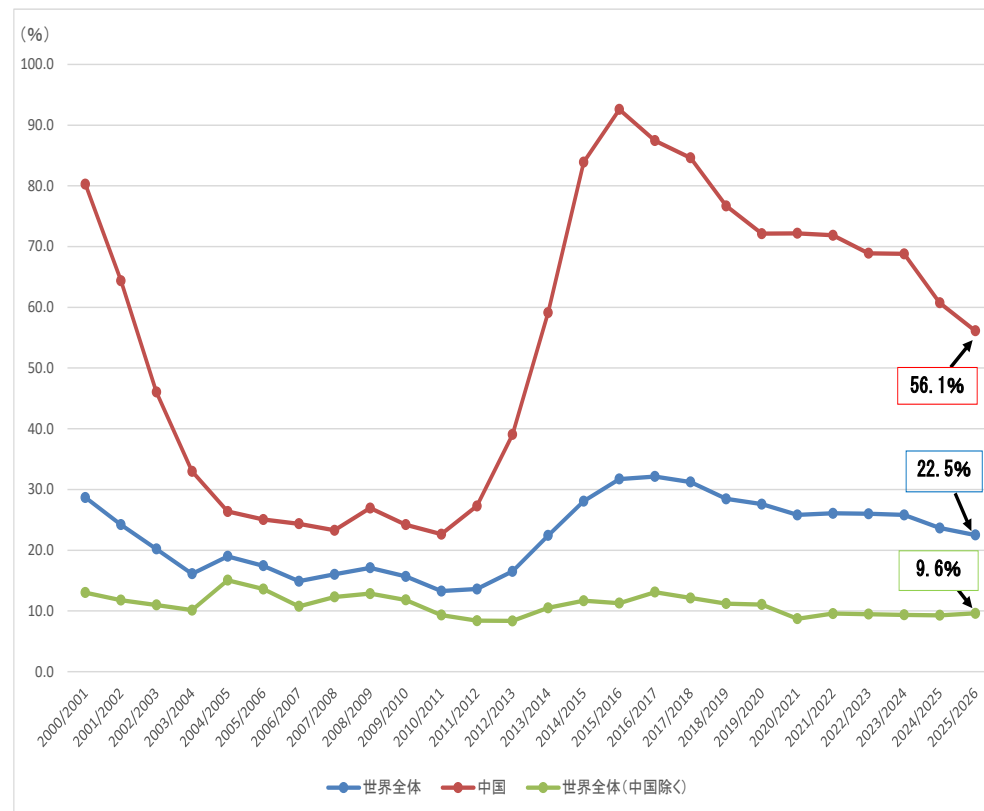
- 注: 1)穀物はとうもろこし、小麦、コム等(大豆除く)。
- 2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/消費量×100
- 3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100
- 4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(March 10, 2026)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

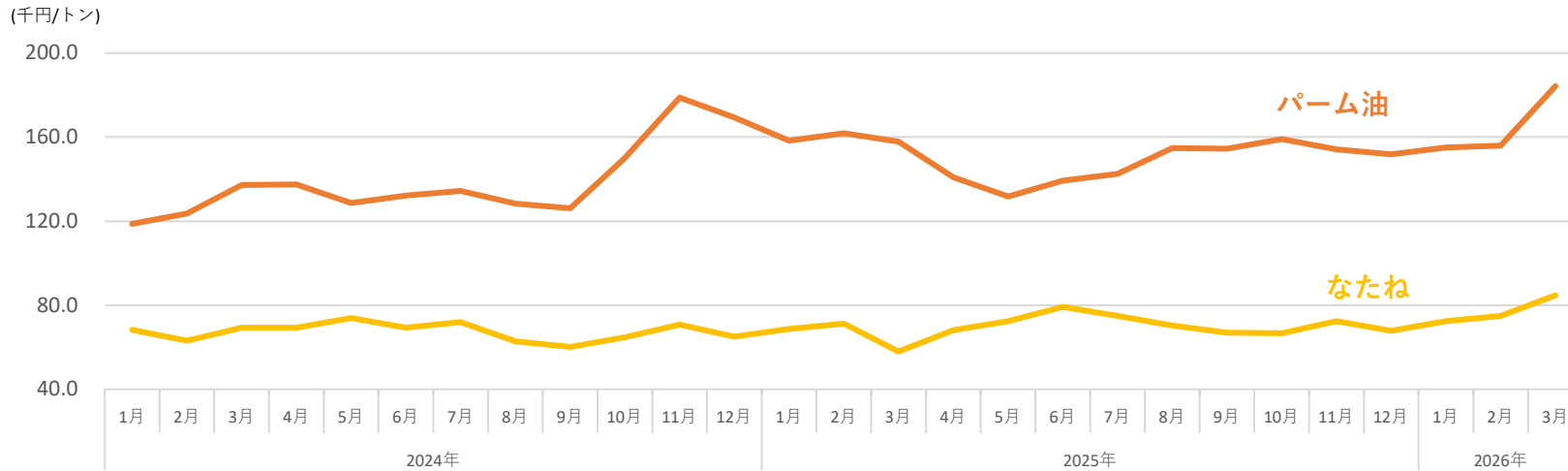
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料 4-1 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

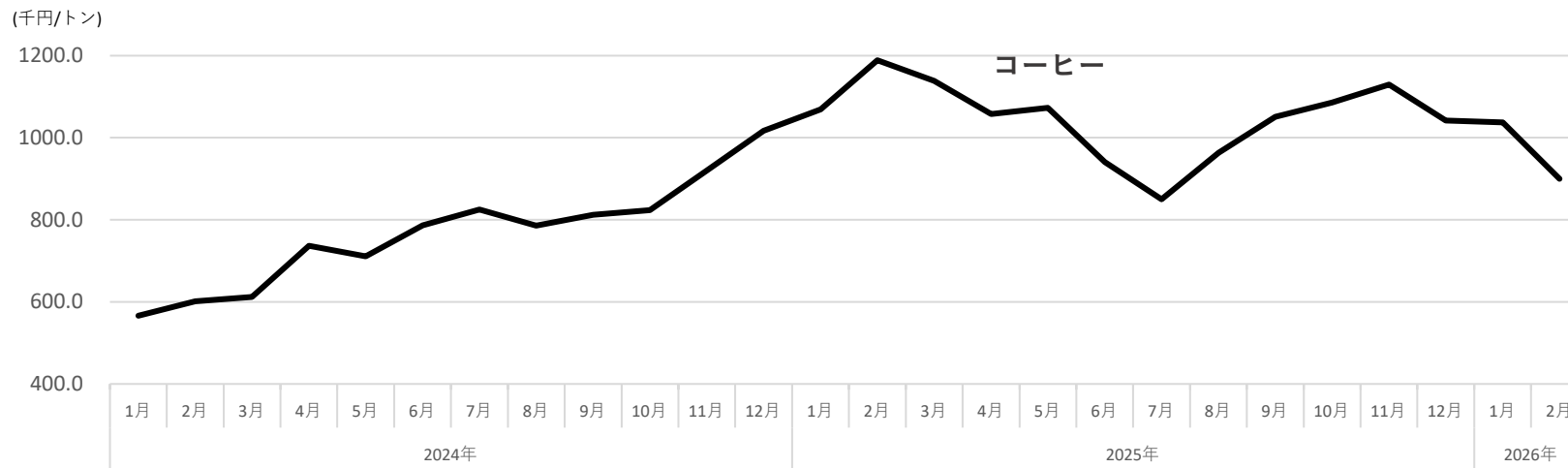
- パーム油については、インドネシアのバイオ燃料政策等の影響で2024年10月に一時的に上昇したが、その後マレーシアとインドネシアのパーム油生産量増加や在庫の増加見通し等により下落。直近の動きでは、中東情勢の緊迫化による原油価格高騰の影響から、上昇傾向にある。
- なたねについては、概ね安定しているが、直近の動きでは中東情勢の緊迫化による原油価格高騰の影響から、上昇傾向にある。
- コーヒーについては、ブラジルの天候不順による収穫量減少等により2024年以降上昇傾向。2025年3月以降、ブラジルの生産増加見込み等により下降傾向であったが、米国関税政策をめぐる不確実性等により上昇傾向に転じたものの、世界的な供給見通しの改善等により下降傾向。



□内は2024年1月以降の最高値。

パーム油
184.3千円/トン
184.3千円/トン
(2026.3)

なたね
84.7千円/トン
84.7千円/トン
(2026.3)



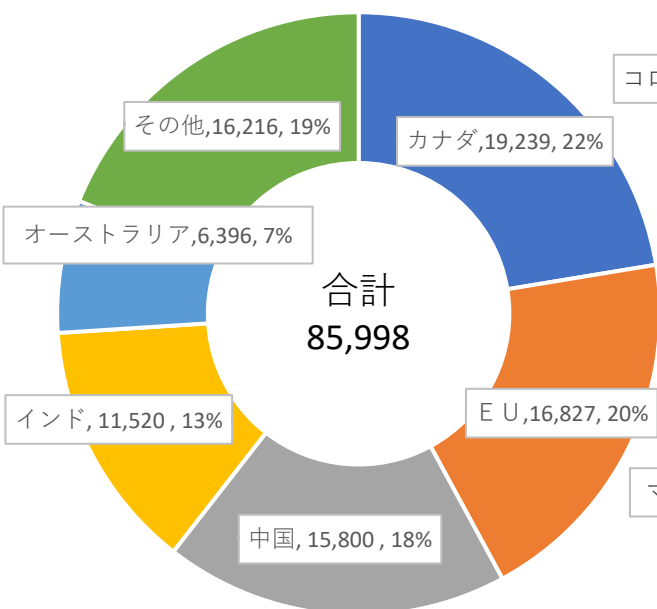
コーヒー
900.1千円/トン
1188.8千円/トン
(2025.2)

※ なたねの国際価格についてはカナダウィニベグなたね市場の先物価格（期近物）の月央値を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）の月央値を使用し、為替レートから円に換算して算出。コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料 4-2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

○主要生産国の生産状況（単位：千トン）

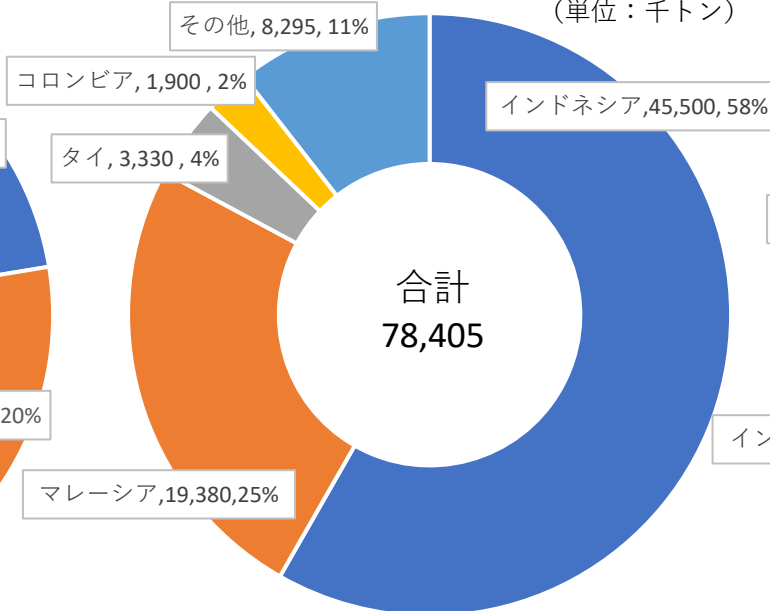
なたね生産量（2024/25）



※米国農務省 (PS&D)
2026年3月時点

パーム油生産量（2024/25）

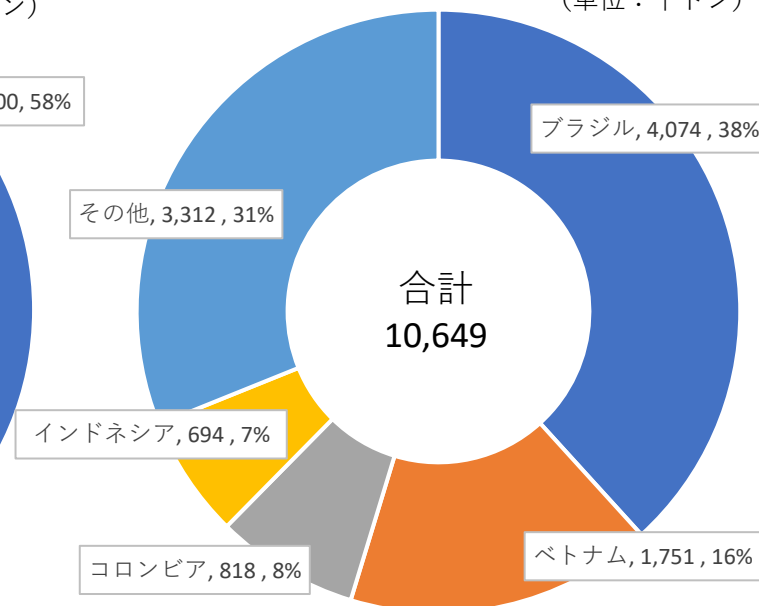
（単位：千トン）



※米国農務省 (PS&D)
2026年3月時点

コーヒー生産量（2024/25）

（単位：千トン）



※国際コーヒー機関 (ICO) 統計資料
2025年7月時点

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2025年））

なたね	輸入量	割合
カナダ	1,722	80.1%
オーストラリア	429	19.9%
その他	0	0.0%
合計	2,151	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

パーム油	輸入量	割合
マレーシア	568	87.6%
インドネシア	79	12.2%
その他	1	0.2%
合計	648	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

コーヒー	輸入量	割合
ブラジル	147	40.9%
ベトナム	90	25.1%
コロンビア	38	10.6%
その他	84	23.4%
合計	359	100.0%

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和8年2月の国内の主な加工食品の消費者物価指数は116.7～163.1(前年同月比は-3.7%～15.1%)の範囲内。

消費者物価指数(総務省)

品目	R5 (2023)	R6 (2024)	R7 (2025)	直近6か月							上昇率 (前年 同月比)
	年平均	年平均	年平均	R7 9月	10月	11月	12月	R8 1月	2月		
食パン	118.7	122.0	126.8	126.5	126.3	126.5	126.6	126.8	126.4	-0.3%	
即席めん	119.7	122.4	119.4	119.1	119.2	120.0	114.4	120.3	116.7	-3.7%	
豆腐	114.6	118.2	121.4	121.9	122.7	123.1	123.6	122.8	123.2	3.3%	
食用油 (キャノーラ油)	160.2	148.6	149.2	147.0	150.3	154.6	151.9	154.0	157.0	6.3%	
みそ	108.1	113.6	119.5	118.7	125.4	128.4	128.3	129.3	128.8	12.2%	
マヨネーズ	149.5	153.1	155.8	159.0	163.5	163.5	162.0	163.3	163.1	6.7%	
チーズ	131.1	133.0	139.1	144.5	144.3	137.5	134.5	140.3	143.4	7.1%	
バター	108.6	119.7	130.4	138.4	139.2	139.1	138.1	139.1	137.6	15.1%	
生鮮食品を 除く食料	112.6	116.9	125.2	126.7	127.7	128.3	128.2	128.4	128.5	5.7%	

資料:総務省「消費者物価指数」
注:令和2年の平均値を100とした指数で表記。

【参考】

食品価格動向調査(農林水産省)

品目	R5 (2023)	R6 (2024)	R7 (2025)	直近7か月							上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)	
	年平均	年平均	年平均	9月	10月	11月	12月	R8 1月	2月	3月			
食パン	114.5	117.9	124.3	124.9	123.8	124.5	124.5	124.5	124.5	124.5	124.2	0.0%	0.4%
即席めん	117.5	118.8	117.0	116.1	117.9	117.3	114.9	117.9	117.3	117.9	117.9	-0.5%	0.5%
豆腐	113.0	116.4	119.3	118.9	120.2	120.2	119.8	120.7	120.2	119.3	119.3	-0.4%	1.9%
食用油 (キャノーラ油)	159.4	145.8	142.0	142.9	143.8	144.1	144.1	144.1	145.4	146.7	146.7	0.9%	4.1%
みそ	105.9	109.5	114.9	114.2	123.8	126.7	125.2	126.5	126.9	128.6	128.6	0.3%	15.4%
マヨネーズ	139.8	141.2	142.5	145.4	149.2	149.2	148.9	150.3	151.3	149.6	149.6	0.7%	8.1%
チーズ	126.5	127.0	133.8	139.2	138.7	136.2	129.8	133.7	139.7	140.2	140.2	4.5%	10.6%
バター	108.0	119.3	131.4	139.4	139.8	140.1	137.4	138.9	137.4	138.9	138.9	-1.1%	15.1%

資料:農林水産省「食品価格動向調査」
注1:令和2年の平均値を100とした指数で表記。
注2:調査は原則、各都道府県10店舗で実施。

資料6 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

- 独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を『月報 畜産の情報』（https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_000168.html）で公表
- 2026年4月号（3月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

◆牛肉

- （米国）25年の牛肉輸出量は前年比でかなり大きく減少、輸入量は大幅に増加
- （豪州）成牛と畜頭数は異例の高水準で推移、牛肉業界は売り手市場に
- （アルゼンチン）25年の牛肉生産量および牛肉輸出量は、いずれも減少

◆豚肉

- （米国）25年12月の豚肉輸出量、中国向けの減少などから前年同月比6.8%減
- （EU）26年1月の豚枝肉卸売価格、前年同月をかなり大きく下回る
- （中国）25年の豚肉生産量は前年からやや増加、豚肉価格は前月比で上昇

◆牛乳・乳製品

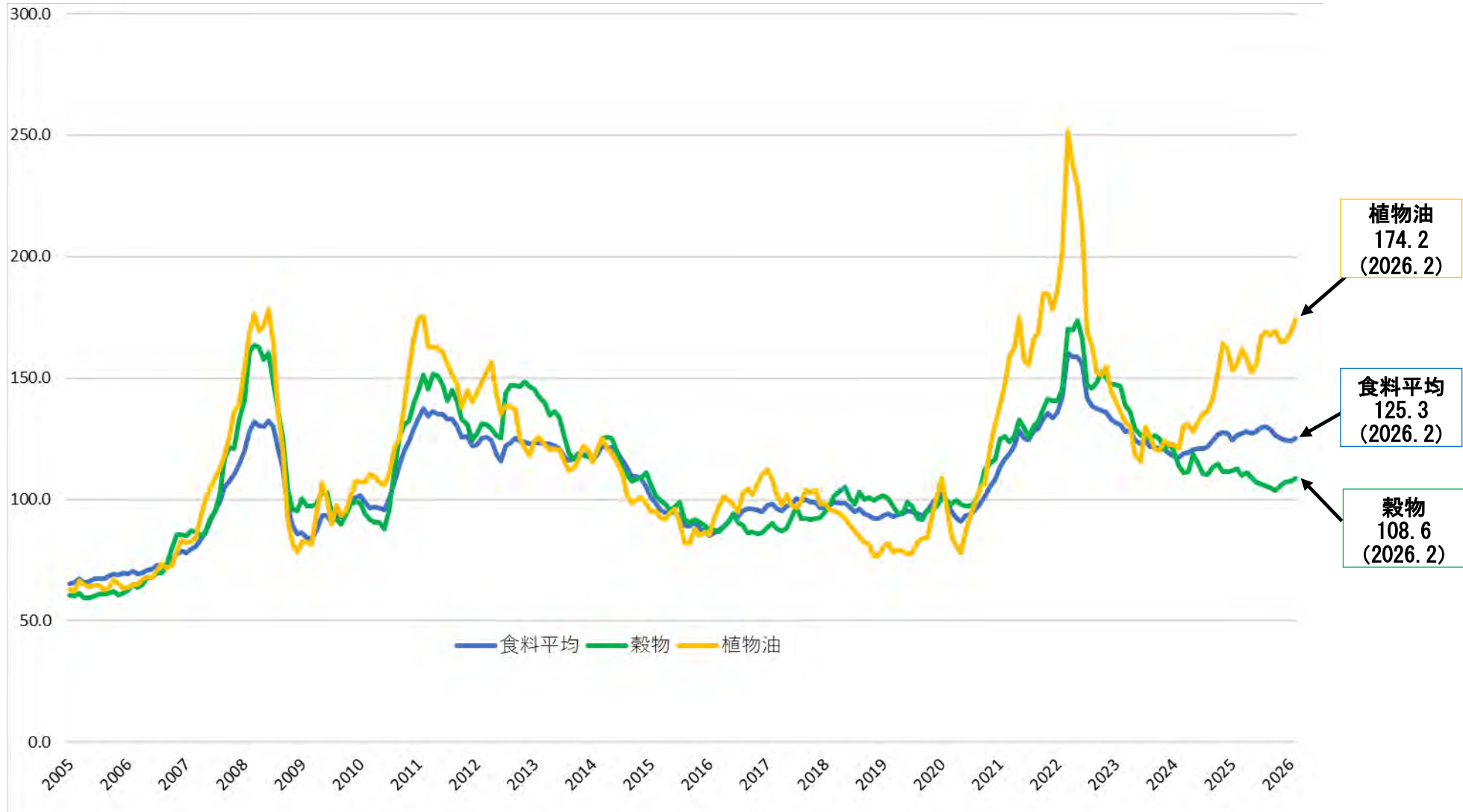
- （EU）25年の生乳出荷量、前年を上回る
- （豪州）生乳生産量は2カ月連続で前年同月比増、輸出量は主要4品目で減少
- （NZ）生乳生産が堅調な中、25/26年度の生産者支払乳価を引き上げ

◆飼料穀物

- （世界・トウモロコシ）25/26年度は消費量および輸出量の上方修正から期末在庫は下方修正
- （世界・大豆）大豆生産量の増加から期末在庫も上方修正
- （米国）米国は生産量の増加などから期末在庫は大幅に増加
- （中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2026.2)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

【今月のコラム】

我が国の食料政策において最も重要な国の一つ、カナダについて(その2)

今回はカナダにおける日本食の現状等について、現地に住んでいる一日本人の視点から記していきたいと思います。なお、以下に書いてあることは個人的な考えですので、その点ご留意いただければと思います。

1. カナダにおける日本食の現状

まずは日本食の現状についてお話ししたいと思います。端的に申し上げて、地域(州)毎にかなりばらつきがあります。

カナダ第1の都市であるオンタリオ州のトロントや、太平洋の玄関口であるブリティッシュコロンビア州のバンクーバーにおいては、日系のスーパーも存在し、日本産食材の購入も容易であるほか、非常に多くの日本食レストランも存在しています。米、醤油、味噌などの必需品はもちろんのこと、店舗によっては和牛なども購入可能なので、これらの地域に住む場合には日本食の入手に困ることは少ないでしょう。レストランで提供される食事のレベルも非常に高く、例えば、「ミシュランガイド・トロント(近郊含む)2025」の星付きレストラン 17 店舗のうち、5店舗が日本食レストランを占めていることからそのことがうかがえます。このほか、ケベック州のモントリオールや、アルバータ州のカルガリーなどの大都市においても、日本食は人気があり、日系のスーパーは少なくともアジア系のスーパーで日本産食材を購入出来ますし、日本人が経営にかかわっているレストランも多く存在しています。

一方で東部の大西洋に面した州や、北部の準州については、上述の大都市のように簡単に日本食にアクセスすることは出来ません。

では、在カナダ日本大使館がある首都・オタワ(オンタリオ州)はどうでしょうか。オタワはカナダで4番目の人口を誇る大都市であり、100万人を超える市民が暮らしています(オタワ市による2024年推計値は約110万人)。まず日本産食材の買いやすさについて申し上げますと、トロントやバンクーバーなどと比較すると手に入らない物も多いものの、台湾系のスーパー「T&T」や他のアジア系スーパーで日本産の米や味噌など、ある程度の物は購入可能です。さすがに日本産の生鮮食品についてはほとんど手に入らないですが、生活に困ることはあまりありません。

一方、日本食レストランについては、正直に申し上げますと、上述の都市と比較するとかなり遅れて



図 カナダの主な州と都市

【今月のコラム】

いるというのが実情です。レストラン検索サイト「Yelp」によると、オタワには約 60 の日本食レストランがあるとされていますが、数としても上述の大都市にある日本食レストランには遠く及びませんし、筆者の個人的な見解ですが、日本の方々も満足させることが出来得る店は、やや郊外にある伝統的な寿司を提供する日本人経営のレストラン1店舗と、日本のものと似たラーメンを提供するレストランが数店舗、そして日本風の居酒屋が2店舗(うち1店舗は日本人の寿司職人が握る寿司カウンターもあり。)のみです。残りは他のアジア地域の料理とのフュージョン料理やカリフォルニアロールを出すレストランばかりであり、少々寂しい状況であると言わざるを得ません。

しかしながら、これはオタワにおいて日本食に対する人気が低い事を意味している訳ではありません。オタワのダウンタウンのテナント賃料は、トロントやバンクーバーほどではないにしてもやはり高いようで、店の入れ替わりも激しい印象ですが、そのような中にある寿司レストラン(カリフォルニアロールを提供するタイプのもの)は継続して経営しているところが多く、外から見る限り客入りも悪くないように思えます。また、在カナダ日本大使館が主催する日本食に関するイベントにおいても、毎回非常に多くの方に参加していただいていることから、日本食に対する人気は高いと推測しています。

2. オタワでの日本食レストランの可能性

ここからはオタワでの日本食レストランに特化して、オタワに住む日本人の一つの考察として筆者の個人的な考えを述べたいと思います。

上述のとおり、オタワで日本食レストランと言えばほぼ寿司かラーメンという状況であることから、もしも寿司やラーメン以外の食事を提供する店、例えば、日本国内で展開しているような定食系チェーンがオタワに出店すれば、現在ある他の日本食レストランとは差別化が図れるため、大きな成功を収める可能性があると考えています。

敢えて「定食系」と申し上げたのは、筆者は寿司やラーメン以外の様々な日本食があることをオタワの住民に知って欲しいと考えているためです。今後さらに日本食を普及させていくためには、寿司、天ぷら、ラーメン以外の料理も日本食にはあることを世界の人々に啓蒙していく必要があります。この点、定食系レストランは、トンカツ、魚の煮付、丼物、カレーライス等の様々な日本食を提供でき、さらにこうした主菜に加えて、小鉢のような形で副菜も同時に提供されることも定食では多いため、現地の人々が複数の日本食を一度の食事で味わう事が可能です。そして様々な料理があることは、多様な客層にリーチできることにつながります。このように、海外における日本食の裾野を広げつつ、それにより現地の人々の注目の的になり得る定食系レストランに、筆者は大きな可能性を感じています。

この他に、オタワにはうどんやそばなどのラーメン以外の麺類を専門に提供するレストランや、牛丼やカレーなどの特定のメニューに特化してそれらを素早く提供するレストランもないと筆者は認識しておりますので、これらのジャンルのレストランも市民の耳目を集めやすく、成功を収める可能性が高いのではないかと考えています。

なお、筆者は日本のレストランのクオリティーに全幅の信頼を置いていますが、日本にあるレス

【今月のコラム】

トランをそのままの形でカナダ(オタワ)に出店しても必ず成功を収める事ができるとは思っていません。例えば、一般的にカナダ人は濃い味付けを好むと言われているため、日本では通常薄味とされる食事を提供するレストランにおいては、メニューの中に選択肢として濃い味付けのものを用意しておくなどの工夫が必要となるかも知れません。

さらに、カナダにもベジタリアンやヴィーガンの人々もそれなりの数がいるため、そのような人たちにも対応できるような料理を提供できるように配慮することも重要な論点になろうかと思えます。

オタワに住む日本人の多くが、日系のスーパーやレストランの当地への進出を渴望していると思いますので、もしも読者の皆様の中に外国でのそういったビジネスを検討している方がいらっしゃいましたら、是非オタワも選択肢に入れていただければ幸いです。

3. 在カナダ大使館の取組

少々個人的な思いを書きすぎてしまいましたが、私の職場である在カナダ日本大使館が行っている日本食・日本産食材の普及に向けた取組についてご紹介したいと思います。他の在外公館と同様に、在カナダ日本大使館では、毎年2月に開かれる天皇誕生日祝賀レセプションや、9月頃に開かれる自衛隊創立記念レセプションなどの大規模イベントで、必ず日本産食材や日本食の魅力を発信する取組を実施しています。例えば、令和8年2月の天皇誕生日祝賀レセプションでは、日本から柑橘の品種の一つ「せとか」を取り寄せてゲストに提供したところ、その圧倒的な甘さとジューシーさに試食したゲストは皆一様に驚いていました。

また、こうした大規模イベントだけでなく、和菓子や日本酒についてのレクチャーを行うイベント等も行っています。こうした取組は少しずつではありますが我が国の食品の質の高さや食文化への理解を深め、今後の日本産農林水産物・食品の購買に繋がっていくと考えておりますので、引き続き実施していきたいと考えています。

さらに、プロモーションだけでなく、日本産の農林水産物・食品がカナダに入ってきてやすくなるように、食品関係の規制緩和に向けた働きかけも重要です。詳細はここでは申し上げられませんが、筆者自身もカナダ政府内で食品の規制を担当する省庁への働きかけを継続して実施しているところですので、すぐに結果を出すことは難しいかも知れませんが、少しでも日本の食材がカナダに入りやすくなるように地道な努力を続けてまいります。

文責: 二田 紘太郎(在カナダ日本国大使館 一等書記官)

本稿は、世界各国・地域の駐在員の方々にご協力をいただき、最新の現地情報をご紹介するものです。日本とは異なる文化や経済、国土条件等を背景として、それぞれの国や地域における食料の生産、流通、消費の特徴などについてご紹介したいと思います。

(品目別需給編)

I 穀物

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要(詳細は右表を参照)

<USDAの見通し> 2025/26年度

生産量 前年度比 前月比

・豪州等で下方修正されたものの、ウクライナ、カザフスタンで上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

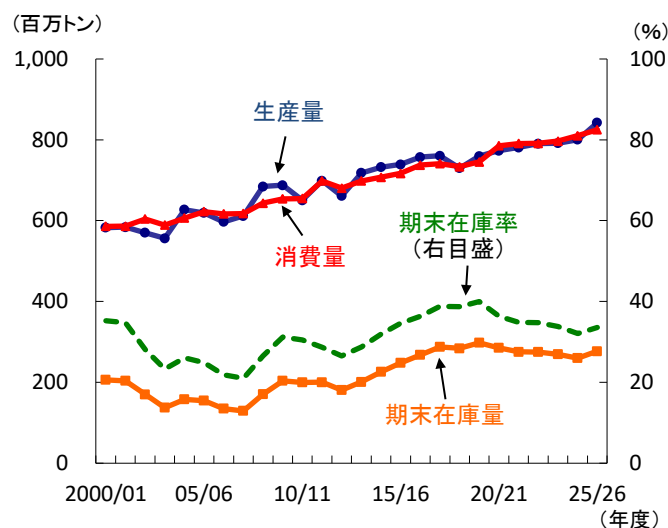
消費量 前年度比 前月比

・アルゼンチン等で下方修正されたものの、EU等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 前月比

・EU、ロシア、ウクライナ等で下方修正されたものの、アルゼンチン、カザフスタン等で上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量 前年度比 前月比



資料:USDA「PS&D」(2026.3.10)をもとに農林水産省にて作成

◎世界の小麦需給

(単位:百万トン)

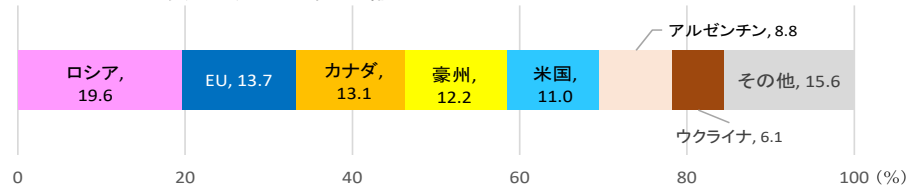
年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	791.5	800.4	842.1	0.3	5.2
消費量	796.7	810.2	824.8	0.7	1.8
うち飼料用	159.1	156.8	165.5	0.5	5.5
輸出量	222.2	210.5	222.2	0.2	5.6
輸入量	223.0	201.3	218.0	0.3	8.3
期末在庫量	269.4	259.6	277.0	▲ 0.6	6.7
期末在庫率	33.8%	32.0%	33.6%	▲ 0.1	1.5

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(10 March 2026)

○ 2025/26年度 世界の小麦の生産量(842.1百万トン)



○ 2025/26年度 世界の小麦の輸出量(222.2百万トン)



○ 2025/26年度 世界の小麦の輸入量(218.0百万トン)



(2) 国別の小麦の需給動向

< 米国 > 2026/27 年度の生産量は前年度から 6.3%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実績は、前月予測からの変更はなく、収穫面積は減少するものの、単収が増加することから前年度から 0.3%増、過去5年平均(48.4 百万トン)から 11.5%増の 54.0 百万トンとなる見込み。同「Crop Production」(2026.1.12)によれば、2025/26 年度の収穫面積は、前年度から 3.6%減の 1,507 万ヘクタールとなる見込み。種類別には、冬小麦が前年度から 2.7%減の 1,032 万ヘクタール、デュラム小麦を除く春小麦も同 7.5%減の 389 万ヘクタールとなる一方、デュラム小麦が同 4.3%増の 86 万ヘクタールとなる見込み。2025/26 年度の実績は前年度から 0.3%増の 5,401 万トンとなる見込み。種類別には、デュラム小麦を除く春小麦が前年度から 8.7%減の 1,352 万トンとなる一方、冬小麦が同 3.5%増の 3,814 万トン、デュラム小麦が同 7.7%増の 235 万トンとなる見込み。冬小麦は、乾燥で単収が減少した前年度と比べ降雨が多く、単収が増加した。一方、春小麦は、乾燥により作柄が悪化した。

同「Grains and Oilseeds Outlook」(2026.2.19)によれば、2026/27 年度の作付面積は、前年度(18.3 百万ヘクタール)から 0.7%減の 18.2 百万ヘクタール。2026/27 年度の実績は、前年度(54.0 百万トン)から 6.3%減の 50.6 百万トン。輸出量は、前年度(24.5 百万トン)から 5.6%減の 23.1 百万トンとなる見込み(図)。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の実績は、前月予測からの変更はなく、前年度から 8.9%増、過去5年平均(22.2 百万トン)から 10.2%増の 24.5 百万トンと、5年ぶりの高水準となる見込み。

同「Wheat Outlook」(2026.3.12)によれば、2025/26 年度の実績は、年度前半に比べ直近数か月の輸出ペースは鈍化しているものの、現時点では前年同期を上回っている。メキシコ、フィリピン、日本向けが増加している一方、韓国向けは前年を下回った。ナイジェリアは前年から2倍以上に増加し、2021/22 年度以降の同期としては過去最高となった。インドネシア及びバングラデシュも急増しており、これは両国とも米国と米国産小麦の追加購入に合意する覚書を締結しているためとみられる。

同「Global Agricultural Trade System」によれば、2025/26 年度のうち 2025 年6月～2026 年1月の輸出量は、前年同期(1,401.3 万トン)に比べ 21.0%増の 1,695.8 万トン。輸出先国別には、メキシコ 282.5 万トン(16.7%)、フィリピン 169.2 万トン(10.0%)、ナイジェリア 137.9 万トン(8.1%)の順となっている(表)。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 8.9%増の 25.3 百万トンとなる見込み。3年連続の増加となり、6年ぶりの高水準となる見込み。

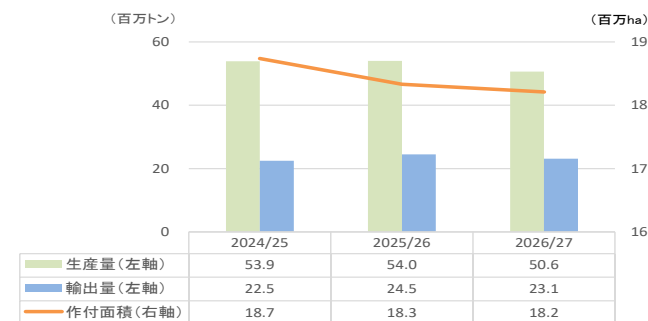
小麦—米国(冬小麦が全体の7割、春小麦は3割)

(単位:百万トン)

年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年6月～26年5月)		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	49.1	53.9	54.0	-	0.3
消費量	30.2	31.1	30.7	-	▲ 1.3
うち飼料用	2.3	3.1	2.7	-	▲ 11.4
輸出量	19.2	22.5	24.5	-	8.9
輸入量	3.8	4.1	3.3	-	▲ 19.3
期末在庫量	19.0	23.3	25.3	-	8.9
期末在庫率	38.4%	43.4%	45.9%	-	2.5
(参考)					
収穫面積(百万ha)	15.01	15.63	15.07	-	▲ 3.6
単収(t/ha)	3.27	3.44	3.58	-	4.1

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、World Agricultural Production(10 March 2026)

図 米国の小麦作付面積・生産量・輸出量の推移



資料:USDA「Grains and Oilseeds Outlook」(2026.2.19)をもとに農林水産省で作成

表 米国の小麦の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年6月～2025年5月)			2024/25年度 (2024年6月～2025年1月)			2025/26年度 (2025年6月～2026年1月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
メキシコ	400.8	18.3	メキシコ	250.8	17.9	メキシコ	282.5	16.7
フィリピン	245.0	11.2	フィリピン	159.4	11.4	フィリピン	169.2	10.0
韓国	238.7	10.9	韓国	150.7	10.8	ナイジェリア	137.9	8.1
日本	215.1	9.8	日本	143.5	10.2	日本	132.3	7.8
台湾	103.5	4.7	台湾	69.4	5.0	韓国	131.5	7.8
タイ	93.2	4.2	インドネシア	61.2	4.4	インドネシア	94.1	5.5
その他	897.2	40.9	その他	566.3	40.4	その他	748.2	44.1
計	2,193.5	100.0	計	1,401.3	100.0	計	1,695.8	100.0

資料:USDA「Global Agricultural Trade System」をもとに農林水産省で作成

< カナダ > 2025/26 年度の輸出量は前年度から 1.8%減となるも史上2番目の見込み(AAFC)

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2026.3.18)によれば、2025/26 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収が増加することを受け前年度から 11.2%増、過去5年平均(32.4 百万トン)から 23.2%増の 40.0 百万トンとなり史上最高の生産量となる見込み。種類別には、普通小麦は、前年度(29.6 百万トン)から 11.0%増、過去5年平均(27.2 百万トン)から 20.6%増の 32.8 百万トンとなり史上最高となる見込み。デュラム小麦も、アルバータ州及びサスカチュワン州の単収増を受け前年度(6.4 百万トン)から 11.8%増、過去5年平均(5.2 百万トン)から 37.1%増の 7.1 百万トンとなり、2016/17 年度(7.8 百万トン)以降で最大の生産量となる見込み。小麦全体では、生育期の適切な降雨により生産量が増加した。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、史上最高の輸出量となった前年度から 1.8%減の 28.7 百万トンとなるものの、史上2番目の輸出量となる見込み。種類別には、普通小麦は前年度から 0.4%減の 23.3 百万トンとなるものの、2025 年 12 月までの輸出量は前年度から8%増となっており、中国、バングラデシュ、エクアドル、スペインへの輸出が大きく増加している。デュラム小麦は従来からの輸出先国であるイタリア、北アフリカ、米国等の需要減を受け同 7.2%減の 5.4 百万トン。USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、史上最高となった前年度から 1.1%減となるものの、過去5年平均(24.4 百万トン)から 18.9%増の 29.0 百万トンと史上2番目の輸出量となる見込み。

カナダ穀物委員会(CGC)によれば、2025/26 年度のうち 2025 年8月～2026 年1月の輸出量は、前年同期(1,408.1 万トン)に比べ2.8%増の 1,447.5 万トン。種類別には、普通小麦が前年同期(1,119.6 万トン)に比べ5.4%増の 1,179.9 万トンで、輸出先国別には、中国 145.1 万トン(12.3%)、インドネシア 111.2 万トン(9.4%)、バングラデシュ 109.6 万トン(9.3%)の順となっている。デュラム小麦は前年同期(288.5 万トン)に比べ 7.2%減の 267.7 万トンで、輸出先国別には、アルジェリア 61.1 万トン(22.8%)、イタリア 60.4 万トン(22.6%)、モロッコ 45.0 万トン(16.8%)の順となっている(表)。

USDA「Grain and Feed Update」(2026.2.2)によれば、2025/26 年度第1四半期(2025.8～10 月)の普通小麦の輸出量は、史上最高となった。これは、バングラデシュ、中国、スペイン及びEU向けの輸出が大きく増加したことによる。一方、同期間のデュラム小麦の輸出は、過去5年平均から2%増となったものの、前年同期からは3%減となった。これは、モロッコ向けの輸出が減少したことによる。

AAFC によれば、2025/26 年度の期末在庫量は前月予測からの変更はなく、前年度から 78.7%増の 7.4 百万トンとなる見込み。USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 40.9%増の 5.9 百万トンとなる見込み。

小麦一カナダ(春小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(25年8月～26年7月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	33.4	35.9 (35.9)	40.0 (40.0)	- (-)	11.2 (11.2)
消費量	9.0	8.4 (8.0)	9.9 (8.2)	- (-)	18.0 (2.5)
うち飼料用	3.8	3.0 (3.3)	4.5 (3.6)	- (-)	48.0 (8.5)
輸出量	25.4	29.3 (29.2)	29.0 (28.7)	- (-)	▲1.1 (▲1.8)
輸入量	0.6	0.6 (0.1)	0.6 (0.2)	- (-)	▲1.6 (83.5)
期末在庫量	5.3	4.2 (4.1)	5.9 (7.4)	- (-)	40.9 (78.7)
期末在庫率	15.4%	11.1% (11.1%)	15.2% (19.9%)	- (-)	4.1 (8.9)
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.71	10.65 (10.65)	10.62 (10.62)	- (-)	▲0.3 (▲0.3)
単収(t/ha)	3.12	3.37 (3.37)	3.76 (3.76)	- (-)	11.6 (11.6)

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,「World Agricultural Production」(10 March 2026)

AAFC「Outlook For Principal Field Crops」(18 March 2026) ※()書き

表 カナダの小麦の輸出先国と輸出量

○普通小麦

2024/25年度 (2024年8月～2025年7月)			2024/25年度 (2024年8月～2025年1月)			2025/26年度 (2025年8月～2026年1月)		
国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
インドネシア	243.2	10.3	インドネシア	129.5	11.6	中国	145.1	12.3
中国	206.1	8.7	日本	98.3	8.8	インドネシア	111.2	9.4
日本	191.0	8.1	コロンビア	86.3	7.7	バングラデシュ	109.6	9.3
ペルー	164.2	6.9	ペルー	79.8	7.1	日本	104.8	8.9
コロンビア	143.1	6.0	米国	61.7	5.5	コロンビア	66.6	5.6
その他	1,419.1	60.0	その他	664.1	59.3	その他	642.6	54.5
計	2,366.5	100.0	計	1,119.6	100.0	計	1,179.9	100.0

○デュラム小麦

2024/25年度 (2024年8月～2025年7月)			2024/25年度 (2024年8月～2025年1月)			2025/26年度 (2025年8月～2026年1月)		
国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
アルジェリア	156.8	27.2	イタリア	64.1	22.2	アルジェリア	61.1	22.8
モロッコ	124.2	21.5	モロッコ	62.2	21.6	イタリア	60.4	22.6
イタリア	83.8	14.5	アルジェリア	51.4	17.8	モロッコ	45.0	16.8
米国	51.0	8.8	米国	28.0	9.7	米国	18.6	7.0
日本	22.7	3.9	スペイン	16.9	5.9	日本	12.1	4.5
その他	138.2	24.0	その他	66.0	22.9	その他	70.5	26.3
計	576.7	100.0	計	288.5	100.0	計	267.7	100.0

資料:CGC のデータをもとに農林水産省で作成

< 豪州 > 2025/26 年度の生産量は前年度から 5.5%増加する見込み(ABARES)

【生育・生産状況】豪州農業資源経済科学局(ABARES)「Australian Crop Report」(2026.3.3)によれば、2025/26 年度の生産量は、単収の引上げを受け前回予測(12 月)から 0.4 百万トン上方修正され、単収が増加することを受け前年度(34.1 百万トン)から 5.5%増、過去5年平均(33.8 百万トン)から 6.6%増の 36.0 百万トンとなり、史上3番目の生産量となる見込み。州別には、ウエスタンオーストラリア州(WA 州)は前回予測からの変更はなく前年度から 5.9%増の 13.4 百万トン。ニューサウスウェールズ州(NSW 州)は 0.1 百万トン上方修正されたものの、前年度から 13.2%減の 11.2 百万トン。サウスオーストラリア州(SA 州)は前回予測からの変更はなく前年度から 71.1%増の 4.7 百万トン。ビクトリア州(VIC 州)は 0.2 百万トン上方修正され前年度から 21.4%増の 4.3 百万トン。クイーンズランド州(QLD 州)は 0.1 百万トン上方修正され前年度から 3.6%増の 2.3 百万トン。特に WA 州では、平年を上回る降雨と穏やかな春の気候により生産量が増加し、史上2番目の生産量となる見込み(図)。

USDA によれば、2025/26 年度の実績は、収穫面積及び単収の引下げを受け前月予測から 1.0 百万トン下方修正され、前年度から 5.5%増、過去5年平均(33.8 百万トン)から 6.7%増の 36.0 百万トンとなり、史上3番目の生産量となる見込み。

【貿易情報・その他】ABARES によれば、2025/26 年度の輸出量は、生産量の引上げ等を受け前回予測から 0.5 百万トン上方修正され、供給量が増加することを受け前年度から 11.4%増、過去5年平均(25.2 百万トン)から 3.8%増の 26.2 百万トンとなり、史上3番目の輸出量となる見込み。USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加を受け前年度から 14.2%増、過去5年平均(25.3 百万トン)から 6.6%増の 27.0 百万トンとなり史上3番目の輸出量となる見込み。同「Grain and Feed Update」(2026.1.21)によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10、11 月の輸出量は 2.8 百万トンと、史上最高の輸出量となった 2022/23 年度に次ぐ好調なスタートとなった。ABARES「Trade dashboard」によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10 月～2026 年1月の輸出量は、前年同期(566.6 万トン)に比べ 37.6%増の 779.4 万トン。輸出先国別には、インドネシア 165.7 万トン(21.3%)、フィリピン 141.5 万トン(18.1%)、イエメン 61.5 万トン(7.9%)の順となっている(表)。

ABARES によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、輸出量の引上げ等を受け前回予測からわずかに下方修正されたものの、前年度から 13.0%増の 5.1 百万トンとなる見込み。USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、生産量の引下げを受け前月予測から 1.0 百万トン下方修正されたものの、前年度から 3.3%増の 4.1 百万トンとなる見込み。

小麦一豪州(冬小麦を主に栽培)

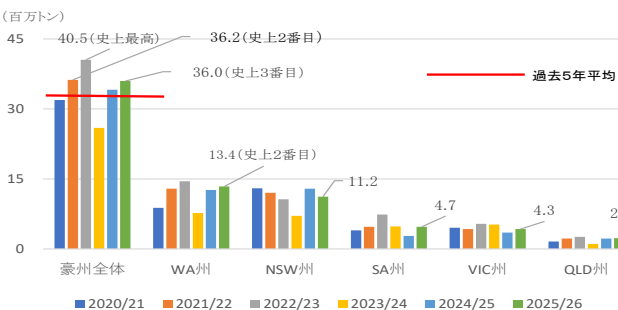
(単位:百万トン)

年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(25年10月～26年9月)		
			予測値	前月(前回)予測 からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	26.0	34.1 (34.1)	36.0 (36.0)	▲1.0 (0.4)	5.5 (5.5)
消費量	8.3	9.1 (9.0)	9.1 (9.2)	- (▲0.1)	- (2.3)
うち飼料用	4.8	5.6 ...	5.5 ...	- ...	▲1.8 ...
輸出量	19.8	23.7 (23.5)	27.0 (26.2)	- (0.5)	14.2 (11.4)
輸入量	0.2	0.2 ...	0.2 ...	- ...	4.5 ...
期末在庫量	2.4	4.0 (4.5)	4.1 (5.1)	▲1.0 (▲0.04)	3.3 (13.0)
期末在庫率	8.6%	12.2% (13.9%)	11.4% (14.4%)	▲2.8 (▲0.3)	▲0.8 (0.5)

(参考)
 収穫面積(百万ha) 12.37 13.06 (13.06) 12.40 (12.41) ▲0.30 (▲0.30) ▲5.1 (▲5.0)
 単収(t/ha) 2.10 2.61 (2.61) 2.90 (2.90) ▲0.01 (0.10) 11.1 (11.0)

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、World Agricultural Production(10 March 2026)
 ABARES「Australian Crop Report」(3 March 2026) ※()書き。

図 豪州の小麦の州別生産量の推移



資料:ABARES「Australian Crop Report」(2026.3.3)をもとに農林水産省で作成

表 豪州の小麦の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年10月～2025年9月)			2024/25年度 (2024年10月～2025年1月)			2025/26年度 (2025年10月～2026年1月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
インドネシア	449.6	19.0	インドネシア	102.6	18.1	インドネシア	165.7	21.3
フィリピン	352.7	14.9	フィリピン	92.0	16.2	フィリピン	141.5	18.1
タイ	170.9	7.2	ベトナム	50.2	8.9	イエメン	61.5	7.9
ベトナム	157.4	6.7	イエメン	47.5	8.4	中国	59.1	7.6
韓国	146.5	6.2	韓国	44.5	7.9	ベトナム	40.1	5.1
イエメン	137.6	5.8	日本	36.2	6.4	韓国	40.1	5.1
その他	946.6	40.1	その他	193.6	34.2	その他	271.5	34.8
計	2,361.3	100.0	計	566.6	100.0	計	779.4	100.0

資料: ABARES「Trade dashboard」をもとに農林水産省で作成

< EU27 > 2025/26 年度の生産量は前年度から 20.1%増加する見込み(EC)

【生育・生産状況】欧州委員会(EC)「EU Cereals Balance Sheets」(2026.3.3)によれば、2025/26 年度の実生産量は、収穫面積及び単収の引上げを受け前月予測から 0.2 百万トン上方修正され、主産国で生育期間を通じた降雨過多等により減産となった前年度から 20.1%増、過去5年平均(129.4 百万トン)から 10.1%増の 142.4 百万トンとなる見込み。種類別には、普通小麦がクロアチアの生産量引上げにより前月予測から 0.2 百万トン上方修正され、フランス、ドイツ、ルーマニア等で生産量が回復することを受け前年度から 21.1%増、過去5年平均(121.8 百万トン)から 10.3%増の 134.4 百万トンとなる見込み。デュラム小麦は、前月予測からの変更はなく、前年度から 5.4%増、過去5年平均(7.6 百万トン)から 6.2%増の 8.1 百万トンとなる見込み。

USDA「World Agricultural Production」(2025.12.9)によれば、2025/26 年度の実生産については、春先の降雨と穏やかな気温により生育に好ましい気象条件であった。その後も広範囲で良好な天候が続き、夏季には EU 全体が乾燥状態であったものの、影響は軽微であり、主産国の生産量は前年度から増加した。

【貿易情報・その他】EC によれば、2025/26 年度の実消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用消費量が増加することを受け前年度から 1.1%増の 112.5 百万トンとなる見込み。USDA「Grain and Feed Quarterly」(2025.12.4)によれば、当該増加は、乾燥の影響により EU の 2025/26 年度とうもろこしの生産量が減少し、小麦の飼料用消費が増加することによる。

EC によれば、2025/26 年度の実輸入量は、前月予測からの変更はなく、関税割当制度の再開等によりウクライナからの輸入が減少すると見込まれることを受け前年度から 42.6%減の 5.8 百万トンとなる見込み。

同「EU trade for cereals」(2026.2.17)によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7～12 月の輸入量は、ウクライナからの輸入が大きく減少したこと等により前年同期(552.9 万トン)に比べ 35.9%減の 354.4 万トン(図)。種類別には、普通小麦が前年同期に比べ 45.6%減の 255.5 万トンとなる一方、デュラム小麦は同 19.2%増の 98.9 万トン(表)。

2025/26 年度の実輸出量は、前月予測から 1.0 百万トン下方修正されたものの、生産量が回復することを受け前年度から 12.0%増の 29.4 百万トンとなる見込み。同「EU trade for cereals」(2026.2.17)によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7～12 月の輸出量は、前年同期(1,400.8 万トン)に比べ 13.1%増の 1,583.9 万トン。種類別には、普通小麦が前年同期に比べ 12.9%増の 1,531.3 万トン、デュラム小麦が同 17.4%増の 52.6 万トン(表)。

2025/26 年度の期末在庫量は、輸出量の引下げ等を受け前月予測から 1.4 百万トン上方修正され、前年度から 71.8%増の 15.2 百万トンとなる見込み。

小麦—EU27 (冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年7月～26年6月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	135.4	122.2 (118.6)	144.0 (142.4)	- (0.2)	17.9 (20.1)
消費量	110.5	109.0 (111.2)	115.5 (112.5)	1.0 (0.001)	6.0 (1.1)
うち飼料用	46.5	45.0 (46.2)	51.0 (47.1)	1.0 (-)	13.3 (2.0)
輸出量	38.0	27.9 (26.3)	30.5 (29.4)	▲1.0 (▲1.0)	9.2 (12.0)
輸入量	12.7	10.6 (10.1)	6.0 (5.8)	- (-)	▲43.6 (▲42.6)
期末在庫量	15.8	11.7 (8.8)	15.7 (15.2)	0.01 (1.4)	34.3 (71.8)
期末在庫率	10.6%	8.5% (6.4%)	10.7% (10.7%)	0.01 (1.0)	2.2 (4.3)

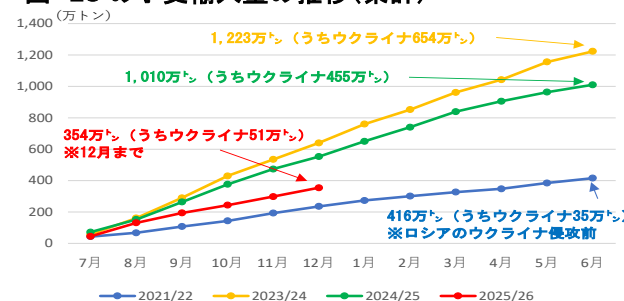
(参考)

収穫面積(百万ha)	24.32	22.74 (22.52)	23.97 (23.73)	- (0.01)	5.4 (5.4)
単収(t/ha)	5.57	5.37 (5.27)	6.01 (6.00)	- (0.005)	11.9 (13.9)

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、World Agricultural Production(10 March 2026)

EC「EU Cereals Balance Sheets」(3 March 2026) ※()書き

図 EU の小麦輸入量の推移(累計)



資料:EC「EU trade for cereals」(2026.2.17)をもとに農林水産省で作成

表 EU の小麦の輸出量及び輸入量

	○輸出量		○輸入量			
	2024/25年度 (2024年7月～2025年6月)	2025/26年度 (2025年7月～12月)	2024/25年度 (2024年7月～2025年6月)	2025/26年度 (2025年7月～12月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	
普通小麦	モロッコ	342.2	13.5	モロッコ	230.7	15.1
	アルジェリア	324.4	12.8	アルジェリア	175.6	11.5
	ナイジェリア	281.5	11.1	エジプト	108.3	7.1
	その他	1,593.8	62.7	その他	1,016.7	66.4
	小計	2,541.8	100.0	小計	1,531.3	100.0
デュラム小麦	チェコ	21.4	25.5	サウジアラビア	15.0	28.6
	アルジェリア	11.3	13.5	エジプト	4.7	8.9
	ユーロペ	10.0	11.9	英国	4.1	7.9
	その他	41.2	49.1	その他	28.8	54.7
	小計	84.0	100.0	小計	52.6	100.0
小麦計	2,625.8		小麦計	1,583.9		

資料:EC「EU trade for cereals」(2026.2.17)をもとに農林水産省で作成

< ロシア > 2025/26 年度の輸出量は前年度から 1.2%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量(クリミア地域分を含まず)は、前月予測からの変更はなく、霜害と高温乾燥により生産量が減少した前年度から単収が増加することを受け前年度から 9.7%増、過去5年平均(85.1 百万トン)から 5.1%増の 89.5 百万トンとなり史上3番目となる見込み。種類別には、冬小麦は、前年度(55.8 百万トン)から 12.9%増の 63.0 百万トン。春小麦も、前年度(25.8 百万トン)から 2.7%増の 26.5 百万トンとなる見込み。

同「World Agricultural Production」(2026.1.12)によれば、2025/26 年度の小麦について、作付面積は前年度から減少したものの、南部と極東を除く全ての地域で前年度を上回る単収となり、主に春小麦の生産量増加が作付面積の減少を補い、小麦の生産量は史上3番目の水準となった。

ロシア連邦統計庁の2月 27 日付発表によれば、2025/26 年度の小麦生産量は、前年度(82.60 百万トン)から 10.3%増の 91.07 百万トン。種類別には、冬小麦が、前年度(56.72 百万トン)から 8.9%増の 61.74 百万トン。春小麦が前年度(25.88 百万トン)から 13.3%増の 29.33 百万トン。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、年度前半の輸出低迷を受け前月予測から 0.5 百万トン下方修正されたものの、前年度から 1.2%増、過去5年平均(44.1 百万トン)から 1.4%減の 43.5 百万トンとなり、史上3番目の輸出量となる見込み。

ロシア連邦政府は、2025 年 12 月 24 日、2025/26 年度後半(2026 年2月 15 日～6月 30 日)に穀物(小麦・メスリン、大麦及びとうもろこし)に設定される輸出枠を 2,000 万トン(前年度は小麦・メスリンのみ 1,060 万トン)とすることを発表した。現地情報会社によれば、ロシアの小麦輸出は、ルーブル高、世界的に供給が潤沢で国際相場が低迷していること、主要な輸出地域である黒海沿岸が不作で在庫が少ないこと等が足かせとなり、輸出枠の全量消化は難しい見込み。

現地情報会社によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7月～2026 年2月の輸出量は、前年同期(3,499.5 万トン)に比べ 10.5%減の 3,132.8 万トンとなっている。輸出先国別には、エジプト 613.1 万トン(19.6%)、トルコ 472.1 万トン(15.1%)、イラン 174.0 万トン(5.6%)の順(表)。2025 年に小麦が不作であったトルコとイランへの輸出が増加した一方、バングラデシュへの輸出は、アルゼンチン、ブラジル及び豪州との競合のため減少した。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、輸出量の引下げを受け前月予測から 0.5 百万トン上方修正され、前年度から 43.4%増の 15.2 百万トンとなる見込み。

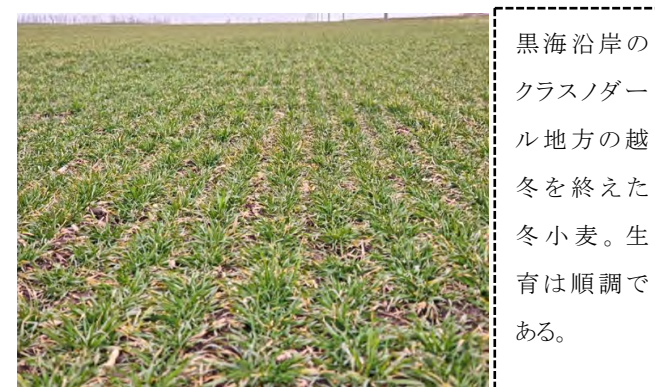
小麦ーロシア(主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培)

(単位:百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(25年7月～26年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	91.5	81.6	89.5 (87.6)	-	9.7
消費量	39.0	40.0	41.7 (41.0)	-	4.3
うち飼料用	16.0	17.0	18.5 (17.4)	-	8.8
輸 出 量	55.5	43.0	43.5 (44.4)	▲ 0.5	1.2
輸 入 量	0.3	0.3	0.3 (0.9)	-	-
期末在庫量	11.7	10.6	15.2 (12.5)	0.5	43.4
期末在庫率	12.4%	12.8%	17.8% (14.6%)	0.7	5.1
(参考)					
収穫面積(百万ha)	28.83	27.80	26.30 (26.37)	-	▲ 5.4
単収(t/ha)	3.17	2.94	3.40 (3.32)	-	15.6

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、World Agricultural Production(10 March 2026)
IGC「Grain Market Report」(19 February 2026)

写真 越冬を終えた 2026/27 年度冬小麦(2026.3.3 撮影)



黒海沿岸のクラスノダール地方の越冬を終えた冬小麦。生育は順調である。

表 ロシアの小麦の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2023年7月～2024年6月)		2024/25年度 (2024年7月～2025年2月)		2025/26年度 (2025年7月～2026年2月)				
国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国 名	輸出量 (万トン)	シェア (%)			
エジプト	821.2	20.2	エジプト	743.4	21.2	エジプト	613.1	19.6
トルコ	310.4	7.6	バングラデシュ	236.5	6.8	トルコ	472.1	15.1
バングラデシュ	277.3	6.8	トルコ	221.2	6.3	イラン	174.0	5.6
アルジェリア	173.4	4.3	アルジェリア	175.3	5.0	バングラデシュ	151.8	4.8
イスラエル	163.9	4.0	サウジアラビア	138.5	4.0	イスラエル	142.6	4.6
その他	2,327.2	57.1	その他	1,984.6	56.7	その他	1,579.2	50.4
合計	4,073.4	100.0	合計	3,499.5	100.0	合計	3,132.8	100.0

資料:現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

<ウクライナ> 2025/26年度の生産量は前年度から2.6%増加する見込み

【生育・生産状況】USDAによれば、2025/26年度の生産量(クリミア地域分を含む)は、単収の引上げを受け前月予測から1.0百万トン上方修正され、収穫面積が増加することから前年度から2.6%増、ロシアの侵攻前の過去5年平均(2017/18～2021/22年度、27.9百万トン)から14.1%減の24.0百万トンとなる見込み(図)。ウクライナ国家統計局の2月25日付発表によれば、2025/26年度の小麦の生産量は、前年度から3.3%増の23.27百万トン。

現地情報会社によれば、冬小麦を含む2026/27年度の秋播き作物は、2月以降、概ね無事に越冬を終えており、枯死や再播種はほとんどの地域で10%未満に抑えられる見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2025/26年度の輸出量は、年度前半の輸出低迷を受け前月予測から0.5百万トン下方修正され、前年度から14.3%減、ロシアの侵攻前の過去5年平均(18.1百万トン)から25.4%減の13.5百万トンとなる見込み(図)。

EUは、ウクライナ産品の輸入に関し、2022年6月から輸入関税及び関税割当を停止してきた。当該措置は2025年6月5日に失効し、「深化した包括的自由貿易協定(DCFTA)」に基づき、関税割当制度等の適用を再開した。その後、6月30日に新たな貿易措置についてウクライナと合意し、EUとウクライナの連合委員会は10月14日に合意を承認し、10月29日に発効となった。これにより、小麦及びメスリン等に対する年間輸入割当数量は130万トン、小麦粉等は同3万トンに見直された。報道によれば、ポーランド、ハンガリー及びスロバキアは、ウクライナ産農産物に対して、2023年から独自に輸入禁止措置を行っており、10月29日の新たなDCFTA発効後も同措置を維持する意向である。

現地情報会社によれば、2025/26年度のうち2025年7月～2026年2月の輸出量は、前年同期(1,193.6万トン)に比べ24.3%減の903.4万トンとなっている。輸出先国別には、エジプト235.5万トン(26.1%)、アルジェリア161.6万トン(17.9%)、インドネシア142.3万トン(15.7%)の順(表)。前年度からの減少は、輸出先第1位であったスペインへの輸出が大きく減少したことや、主要輸出先である北アフリカや中東におけるロシア産小麦等との競争が要因。また、USDA「Grain and Feed Quarterly」(2026.2.4)によれば、ロシアによるエネルギー網、鉄道・港湾インフラ、船舶への攻撃やEUのウクライナ産小麦に対する関税割当制度の適用再開等が影響しているとみられる。引き続き、ロシアによる輸送インフラの攻撃が続いており、輸出に対する大きな抑制要因となるおそれがある。

USDAによれば、2025/26年度の期末在庫量は、生産量の引上げ及び輸出量の引下げを受け前月予測から1.5百万トン上方修正され、前年度から236.6%増の3.1百万トンとなる見込み。

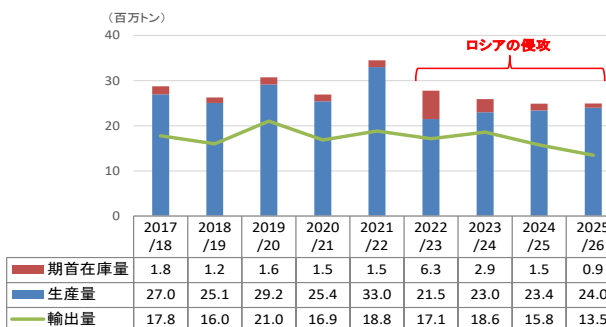
小麦－ウクライナ(主に冬小麦を栽培)

(単位:百万トン)

年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(25年7月～26年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	23.0	23.4	24.0 (26.0)	1.0	2.6
消費量	5.9	8.3	8.4 (10.3)	-	1.2
うち飼料用	1.6	3.6	3.5 (3.0)	-	▲ 2.8
輸出量	18.6	15.8	13.5 (14.0)	▲ 0.5	▲ 14.3
輸入量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	42.9
期末在庫量	1.5	0.9	3.1 (2.6)	1.5	236.6
期末在庫率	6.2%	3.9%	14.3% (10.5%)	7.0	10.4

(参考)
 収穫面積(百万ha) 5.01 5.20 5.50 (6.35) - 5.8
 単収(t/ha) 4.59 4.50 4.36 (4.09) 0.18 ▲ 3.1
 資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,「World Agricultural Production」(10 March 2026)
 IGC「Grain Market Report」(19 February 2026)

図 ウクライナの小麦の期首在庫量・生産量・輸出量の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.3.10)をもとに農林水産省で作成

表 ウクライナの小麦の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年7月～2025年6月)			2024/25年度 (2024年7月～2025年2月)			2025/26年度 (2025年7月～2026年2月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
スペイン	326.1	20.9	スペイン	290.7	24.4	エジプト	235.5	26.1
エジプト	211.1	13.5	インドネシア	155.5	13.0	アルジェリア	161.6	17.9
アルジェリア	195.1	12.5	エジプト	120.4	10.1	インドネシア	142.3	15.7
インドネシア	158.8	10.2	アルジェリア	113.3	9.5	イエメン	75.8	8.4
ベトナム	104.7	6.7	ベトナム	88.4	7.4	ベトナム	53.1	5.9
その他	566.5	36.3	その他	425.3	35.6	その他	235.2	26.0
合計	1,562.2	100.0	合計	1,193.6	100.0	合計	903.4	100.0

資料:APK-Inform Agencyのデータをもとに農林水産省で作成

< 中国 > 2025/26年度の輸入量は前年度から43.9%増加する見込み

【生育・生産状況】USDAによれば、2025/26年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度と同水準、過去5年平均(137.1百万トン)から2.2%増の140.1百万トンとなり、史上最高の前年度に次ぐ生産量となる見込み。

中国国家统计局「2025年糧食生産量データ」(2025.12.12)によれば、2025年の小麦の作付面積は、前年(23.59百万ヘクタール)からわずかに減少し23.58百万ヘクタール。単収は、前年(5.94トン/ヘクタール)と比べ同水準の5.94トン/ヘクタール。生産量は、前年(140.1百万トン)と同水準の140.1百万トン。

中国中央气象台「全国農業気象月報」(2026.3.4)によれば、2026/27年度の冬小麦について、2月末現在、新疆ウイグル自治区、西北地区中部(陝西省、甘肅省及び寧夏回族自治区)、華北北部(河北省、山西省)などの冬小麦は越冬期にあり、江蘇省、安徽省北部、河南省、山東省中西部、河北省南部などの冬小麦は、南から北へ順次、起生期を迎えており、生育は平年に比べ3~10日早くなっている。江漢(湖北省中南部)及び西南地区(四川省、貴州省、雲南省、重慶及びチベット自治区)の大部分では、分けつ期から穂ばらみ期を迎えている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2025/26年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度から1.3%減、過去5年平均(150.9百万トン)から1.9%減の148.0百万トンとなる見込み。

2025/26年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、在庫量の減少等を受け前年度から43.9%増となるものの、過去5年平均(10.3百万トン)から41.5%減の6.0百万トンとなる見込み(図)。

同「Grain and Feed Update」(2026.1.23)によれば、2025年12月、アルゼンチンは製粉用として約16万トンの小麦を中国に輸出した。これは約30年ぶりの輸出で、2024年1月に中国がアルゼンチン産小麦の輸入を再認可したことを受けたもの。同「Grain and Feed Update」(2026.1.27)によれば、2025年12月にはロシア産小麦ふすまの市場開放も発表された。また、2025年末までに中国は米国産小麦約20万トンの購入を予約している。トレーダーらは、2025/26年度の中国のとうもろこしの生産量が過去最高を記録したものの、中国のとうもろこし及び春小麦の品質が大幅に低下しているため、更なる輸入が必要になるとみている。

中国海関統計によれば、2025/26年度のうち2025年7~12月の輸入量は、前年同期(190.0万トン)に比べ6.3%増の202.0万トンとなっている。輸入先国別には、カナダ151.9万トン(75.2%)、豪州35.6万トン(17.6%)、ロシア7.0万トン(3.5%)の順となっている(表)。米国からの輸入は76トンと大きく減少している。

USDAによれば、2025/26年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度から2.3%減の124.8百万トンとなる見込み(図)。

小麦—中国(冬小麦を主に栽培)

(単位:百万トン)

年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(25年7月~26年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	136.6	140.1	140.1 (140.1)	-	▲ 0.02
消費量	153.5	150.0	148.0 (146.8)	-	▲ 1.3
うち飼料用	37.0	33.0	31.0 (28.0)	-	▲ 6.1
輸出量	1.0	1.0	1.0 (1.2)	-	▲ 2.0
輸入量	13.6	4.2	6.0 (6.2)	-	▲ 43.9
期末在庫量	134.5	127.8	124.8 (135.5)	-	▲ 2.3
期末在庫率	87.1%	84.6%	83.8% (91.6%)	-	▲ 0.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)	23.63	23.59	23.58 (23.64)	-	▲ 0.04
単収(t/ha)	5.78	5.94	5.94 (5.93)	-	-

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,「World Agricultural Production」(10 March 2026)
IGC「Grain Market Report」(19 February 2026)

図 中国の小麦輸入量・期末在庫量の推移

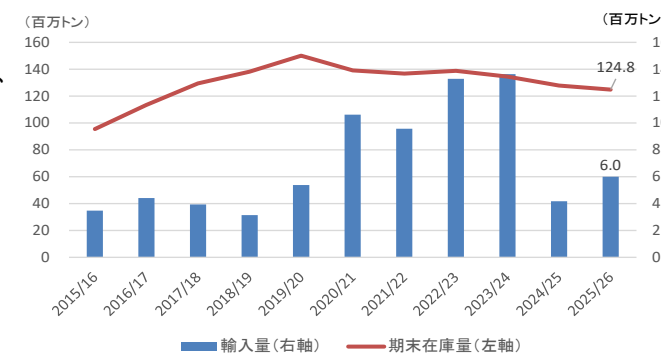


表 中国の小麦の輸入先国と輸入量

2024/25年度 (2024年7月~2025年6月)			2024/25年度 (2024年7月~12月)			2025/26年度 (2025年7月~12月)		
国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)
カナダ	185.9	48.2	カナダ	66.4	35.0	カナダ	151.9	75.2
豪州	86.9	22.5	米国	46.2	24.3	豪州	35.6	17.6
米国	46.2	12.0	カザフスタン	28.4	15.0	ロシア	7.0	3.5
カザフスタン	30.8	8.0	ロシア	25.2	13.3	カザフスタン	4.3	2.1
ロシア	29.7	7.7	豪州	20.3	10.7	日本	2.5	1.2
日本	4.9	1.3	日本	2.6	1.3	フランス	0.7	0.3
その他	1.5	0.4	その他	0.9	0.5	その他	0.1	0.1
合計	385.9	100.0	合計	190.0	100.0	合計	202.0	100.0

資料:中国海関統計をもとに農林水産省で作成

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要(詳細は右表を参照)

<USDAの見通し> 2025/26年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・アルゼンチン等で下方修正されたものの、ウクライナ、ブラジル等で上方修正され前月から上方修正された。史上最高の見込み。

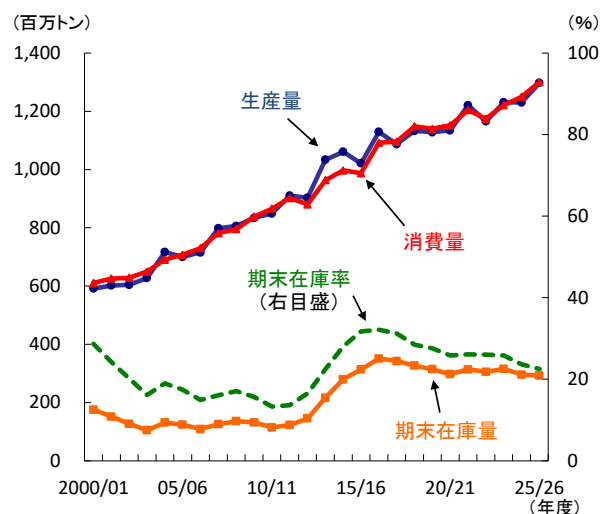
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・ベトナム、ウクライナ等で上方修正されたものの、インド、ブラジル等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↑

・インド等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↑



資料:USDA「PS&D」(2026.3.10)をもとに農林水産省で作成

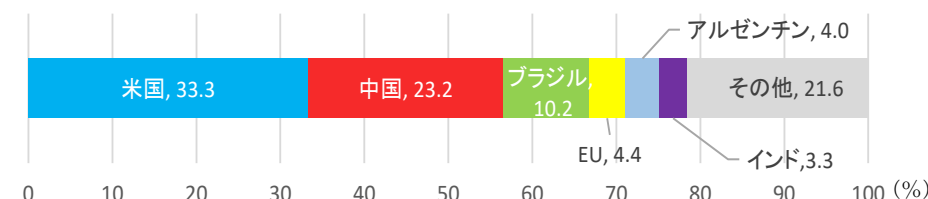
◎世界のとうもろこし需給

(単位:百万トン)

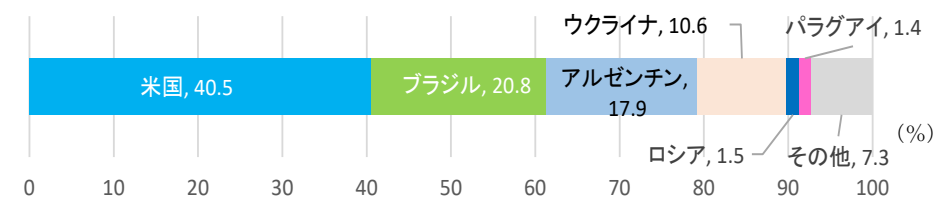
年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	1,231.1	1,230.6	1,297.4	1.5	5.4
消費量	1,221.2	1,250.0	1,300.5	▲ 0.8	4.0
うち飼料用	769.9	785.4	814.5	▲ 0.1	3.7
輸出量	192.7	187.4	206.9	0.3	10.4
輸入量	197.6	186.1	192.7	0.6	3.5
期末在庫量	315.3	295.8	292.8	3.8	▲ 1.0
期末在庫率	25.8%	23.7%	22.5%	0.3	▲ 1.2

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(10 March 2026)

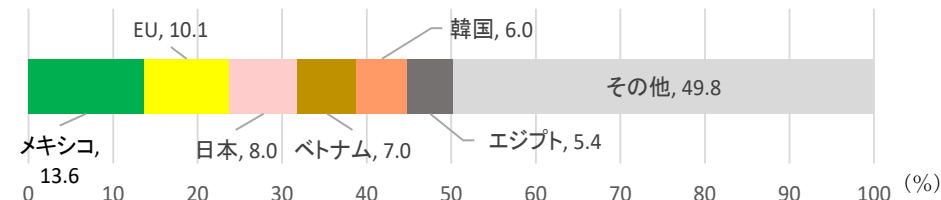
○ 2025/26年度 世界のとうもろこしの生産量 (1,297.4百万トン)



○ 2025/26年度 世界のとうもろこしの輸出量 (206.9百万トン)



○ 2025/26年度 世界のとうもろこしの輸入量 (192.7百万トン)



(2) 国別のとうもろこしの需給動向

< 米国 > 2025/26 年度の生産量は、前年度から 14.3%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 14.3%増、過去5年平均(370.8 百万トン)から 16.6%増の 432.3 百万トンと、史上最高の見込み。とうもろこしに有利な価格相場により、多くの農家が大豆から作付けを切り替えたとみられる。

同「Grains and Oilseeds Outlook」(2026.2.19)によれば、2026/27 年度のとうもろこしの生産量は、作付面積が 4.9%減少するとの予測を受け 2025/26 年度から 7.4%減の 400.2 百万トンとなる見込み。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用及びエタノール用需要の増加等を受け、前年度から 7.4%増の 334.5 百万トンと、史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 15.5%増の 83.8 百万トンと、史上最高の見込み。なお、同「Grains and Oilseeds Outlook」(2026.2.19)によれば、2026/27 年度の輸出量は 2025/26 年度から 6.1%減の 78.7 百万トンとなり、世界の輸出量に占める米国のシェアは、競合する南米産の輸出量が増加すると見込まれることから、わずかに減少すると予測されている。

同「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」によれば、2025/26 年度のうち 2025 年9月～2026 年2月の輸出量は、前年同期(2,751.3 万トン)に比べ 44.9%増の 3,986.2 万トン。輸出先国別には、メキシコ 1,215.8 万トン(30.5%)、日本 719.3 万トン(18.0%)、韓国 419.2 万トン(10.5%)の順となっている(表)。

同「Grain: World Markets and Trade」(2026.3.10)によれば、3月5日現在の輸出価格は、アルゼンチンは早植えとうもろこしの収穫開始により前月から7ドル/トン下落し 207 ドル/トン、ブラジルは季節的な輸出量の減少により3ドル/トン上昇し 226ドル/トン、米国はほぼ横ばいの 219ドル/トンとなった(図)。

米国環境保護庁(EPA)は 2025 年6月に、2026～2027 年の再生可能燃料総混合義務量について、2025 年の 223.3 億ガロンに対して、2026 年には 240.2 億ガロン、2027 年には 244.6 億ガロンと過去最高の数量とする案を公表した。報道情報によれば、2026 年度の義務量は 2026 年3月までに最終決定される見通し。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加等を受け前年度から 37.1%増、過去5年平均(37.0 百万トン)から 45.9%増の 54.0 百万トンとなる見込み。期末在庫率は前年度から 2.7 ポイント増の 12.9%となる見込み。

とうもろこしー米国

(概ね4～5月に作付けされ、9～11月に収穫される。)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年9月～26年8月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	389.7	378.3	432.3	-	14.3
消費量	322.9	311.6	334.5	-	7.4
うち飼料用	148.1	138.6	157.5	-	13.7
エタノール用等	139.4	138.1	142.2	-	3.0
輸 出 量	57.3	72.6	83.8	-	15.5
輸 入 量	0.7	0.6	0.6	-	16.4
期末在庫量	44.8	39.4	54.0	-	37.1
期末在庫率	11.8%	10.3%	12.9%	-	2.7
(参考)					
収穫面積(百万ha)	35.01	33.61	36.93	-	9.9
単収(t/ha)	11.13	11.26	11.71	-	4.0

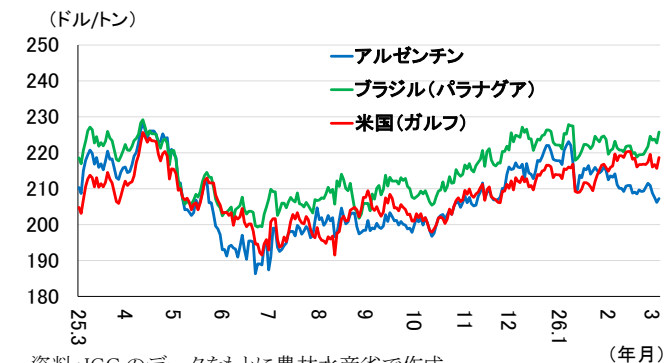
資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 March 2026)

表 米国のとうもろこしの輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年9月～2025年8月)			2024/25年度 (2024年9月～2025年2月)			2025/26年度 (2025年9月～2026年2月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
メキシコ	2,212.2	32.6	メキシコ	988.3	35.9	メキシコ	1,215.8	30.5
日本	1,344.0	19.8	日本	488.0	17.7	日本	719.3	18.0
コロンビア	743.7	11.0	コロンビア	360.2	13.1	韓国	419.2	10.5
韓国	617.4	9.1	韓国	190.1	6.9	コロンビア	380.1	9.5
台湾	241.6	3.6	スペイン	163.7	6.0	スペイン	249.1	6.2
その他	1,617.3	23.9	その他	560.9	20.4	その他	1,002.8	25.2
合計	6,776.2	100.0	合計	2,751.3	100.0	合計	3,986.2	100.0

資料:USDA「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」をもとに農林水産省で作成

図 各国のとうもろこし輸出価格(FOB)の推移



資料:IGCのデータをもとに農林水産省で作成

< ブラジル > 2025/26 年度の生産量は、前年度から 2.9%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実績は、収穫面積の引上げを受け前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、史上2番目の前年度からは 2.9%減となるものの、過去5年平均(119.0 百万トン)からは 10.9%増の 132.0 百万トンとなり、史上3番目の生産量となる見込み。

ブラジル食料供給公社(CONAB)の月例報告(2026.3.13)によれば、2025/26 年度の実績は、単収の減少を受け前年度から 2.0%減の 138.3 百万トンの見込み。作付期別には、夏とうもろこし(第1期作)の実績は、作付面積及び単収の増加を受け前年度から 9.7%増の 27.4 百万トンの見込み。作付作業は2月までに完了し、3月第1週時点での収穫進捗率は 29.5%に達した。リオ・グランデ・ド・スール州では、2月の乾燥型の天候により、とうもろこしの収穫作業は大幅に進展し収穫進捗率は 79%に達するとともに、単収は当初の予想を上回る水準に達した。冬とうもろこし(第2・3期作)のうち第2期作の実績は、単収の減少を受け前年度から 4.2%減の 108.4 百万トンの見込み。作付進捗率は3月第1週時点で 75.9%であり、これは過去数年間の平均値に近いものの、一部地域で大豆の収穫作業が遅延したことにより、とうもろこしの作付作業は遅れ気味となった。作付けが行われた圃場の大部分では、良好な気象条件に恵まれ、初期成育は良好。また、第3期作の実績は、作付面積及び単収の減少を受け前年度から 17.0%減の 2.5 百万トンの見込み(図)。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の実績は、前月予測から 0.5 百万トン下方修正されたものの、エタノール向け需要の高まりを受け前年度から 3.8%増の 96.0 百万トンと、史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の実績は、前月予測からの変更はなく、前年度から 1.8%増の 43.0 百万トンとなる見込み。また、CONAB によれば、2025/26 年度の実績は、良好な生産に支えられ、前年度から 11.7%増の 46.5 百万トンとなる見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2024/25 年度の実績は、前年度(3,818.2 万トン)に比べ 9.3%増の 4,173.5 万トン。輸出先国別には、イラン 871.3 万トン(20.9%)、エジプト 724.2 万トン(17.4%)、ベトナム 530.9 万トン(12.7%)の順となっている(表)。

USDA によれば、2025/26 年度の実績は、前月予測から 2.3 百万トン上方修正されたものの、消費量の増加等を受け前年度から 47.5%減、過去5年平均(7.6 百万トン)から 21.9%減の 6.0 百万トンとなる見込み。期末在庫率は前年度から 4.1 ポイント減の 4.3%となる見込み。

とうもろこしーブラジル

(夏とうもろこしは、概ね8~翌年1月に作付けされ、2~6月に収穫される。冬とうもろこしは、大豆収穫後の概ね1~3月に作付けされ、6~10月に収穫される。)

年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (26年3月~27年2月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	119.0	136.0 (141.2)	132.0 (138.3)	1.0 (▲0.2)	▲2.9 (▲2.0)
消費量	84.0	92.5 (90.6)	96.0 (94.6)	▲0.5 (▲0.01)	3.8 (4.4)
うち飼料用	62.5	65.0 …	65.5 …	▲0.5 …	0.8 …
輸出量	38.3	42.2 (41.6)	43.0 (46.5)	- (-)	1.8 (11.7)
輸入量	1.7	1.8 (1.8)	1.6 (1.7)	- (-)	▲9.1 (▲7.9)
期末在庫量	8.3	11.4 (12.7)	6.0 (11.6)	2.3 (▲0.2)	▲47.5 (▲8.6)
期末在庫率	6.8%	8.4% (9.6%)	4.3% (8.2%)	1.6 (▲0.1)	▲4.1 (▲1.4)
(参考)					
収穫面積(百万ha)	21.65	22.30 (21.84)	22.80 (22.41)	0.20 (▲0.12)	2.2 (2.6)
単収(t/ha)	5.50	6.10 (6.46)	5.79 (6.17)	▲0.01 (0.02)	▲5.1 (▲4.5)

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,
「World Agricultural Production」(10 March 2026)
CONAB「Graos」(13 March 2026) ※()書き、なお、CONABの収穫面積は作付面積である。

図 ブラジルのクロープカレンダー(中西部から南部)

2025/26年度	2025年				2026年								
	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9
夏とうもろこし (リオ・グランデ・ド・スール州等)	作付け 4.1 百万ha				収穫 27.4 百万t					→ 収穫夏冬作計 138.3 百万t			
冬とうもろこし (マツ・グロソ州、 パラナ州等)	作付面積夏冬作計 22.4 百万ha				作付け 18.3 百万ha					↑ 大豆収穫後の一部圃場で冬とうもろこし作付け 収穫 110.9 百万t			
大豆 (マツ・グロソ州、 パラナ州等)	作付け 48.4 百万ha				↑ 大豆収穫後の一部圃場で冬とうもろこし作付け 収穫 177.8 百万t								

資料:CONAB「Graos」(2026.3.13)をもとに農林水産省で作成

表 ブラジルのとうもろこしの輸出先国と輸出量

国名	2023/24年度 (2024年3月~2025年2月)		2024/25年度 (2025年3月~2026年2月)		
	輸出量 (万トン)	シェア (%)	輸出量 (万トン)	シェア (%)	
エジプト	601.1	15.7	イラン	871.3	20.9
イラン	535.7	14.0	エジプト	724.2	17.4
ベトナム	450.9	11.8	ベトナム	530.9	12.7
韓国	243.3	6.4	サウジアラビア	219.6	5.3
日本	214.3	5.6	中国	192.9	4.6
その他	1,772.8	46.4	その他	1,634.6	39.2
合計	3,818.2	100.0	合計	4,173.5	100.0

資料:ブラジル貿易統計のデータをもとに農林水産省で作成

< アルゼンチン > 2025/26 年度の生産量は、前年度から 4.0%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、2月の乾燥型の天候を受け前月予測から 1.0 百万トン下方修正されたものの、前年度から 4.0%増、過去5年平均(49.1 百万トン)から 5.9%増の 52.0 百万トンとなる見込み。病虫害のヨコバイによる被害が改善したことを受け 2025/26 年度は作付面積が回復する見込み。同「Feed Outlook」(2026.3.12)によれば、1月から2月にかけて、早植えとうもろこしが重要な生育段階を迎える中、降雨不足により土壌水分量が低下し生産量の見通しに悪影響を及ぼした。

アルゼンチン農牧漁業庁(SAGyP)の月報(2026.3.19)によれば、とうもろこしの作付けは完了し、収穫進捗率は 14%と前年同期(8%)を上回っている。3月に広範囲で降雨が観測され、乾燥に見舞われていた多くの地域で作物の生育が回復した。未収穫のとうもろこしの生育段階は5%が生長期、17%が開花期、45%が登熟期、33%が成熟期にあり、作柄は 10%が非常に良好、72%が良好、14%が平年並み、4%が不良となっている。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の実消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度から横ばいの 16.7 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 27.6%増の 37.0 百万トンとなる見込み。同「Grain: World Markets and Trade」(2026.1.12)によれば、輸出量の増加は、輸出可能な供給量が増加し米国やブラジルに対する競争力が高まることによる。

アルゼンチン国家統計局によれば、2024/25 年度のうち 2025 年3月～2026 年1月の輸出量は、前年同期(3,377.8 万トン)に比べ 17.9%減の 2,772.0 万トン。輸出先国別には、ベトナム 511.8 万トン(18.5%)、ペルー436.7 万トン(15.8%)、マレーシア 299.3 万トン(10.8%)の順となっている(表)。

アルゼンチン政府は、2025 年 12 月 12 日、とうもろこしの輸出税を 9.5%から 8.5%に引き下げた。これは、生産者の税負担を軽減し、農業分野の競争力を高めることを目的としている。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測から 0.8 百万トン下方修正され、輸出量の増加を受け前年度から 24.9%減となるものの、過去5年平均(3.9 百万トン)からは 30.7%増の 5.1 百万トンとなる見込み。期末在庫率は前年度から 5.4 ポイント減の 9.5%となる見込み。

とうもろこしーアルゼンチン

(早植えとうもろこしは、概ね9月後半～12 月前半に作付けされ、遅植えとうもろこしは、概ね 12 月前半～翌年2月前半に作付けされる。概ね3～8月に収穫される。)

(単位:百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (26年3月～27年2月)		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
			予測値、() はIGC			
生産量	51.6	50.0	52.0	(58.5)	▲ 1.0	4.0
消費量	15.2	16.7	16.7	(21.0)	-	-
うち飼料用	11.0	12.3	12.3	(16.0)	-	-
輸出量	36.3	29.0	37.0	(36.5)	-	27.6
輸入量	0.01	0.01	0.01	(0.001)	-	-
期末在庫量	2.5	6.8	5.1	(3.4)	▲ 0.8	▲ 24.9
期末在庫率	4.8%	14.8%	9.5%	(5.8%)	▲ 1.5	▲ 5.4
(参考)						
収穫面積(百万ha)	7.73	6.90	7.50	(8.50)	-	8.7
単収(t/ha)	6.68	7.25	6.93	(6.88)	▲ 0.14	▲ 4.4

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 March 2026)
IGC「Grain Market Report」(19 February 2026)

写真 サンタフェ州の圃場の様子(2026.2.28 撮影)



9月前半に作付けされ、成熟期を迎えている圃場。収穫は3月中旬を予定している。

撮影者: José Daniel Peloni

表 アルゼンチンのとうもろこしの輸出先国と輸出量

2023/24年度 (2024年3月～2025年2月)			2023/24年度 (2024年3月～2025年1月)			2024/25年度 (2025年3月～2026年1月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
ベトナム	667.8	18.4	ベトナム	638.1	18.9	ベトナム	511.8	18.5
ペルー	433.1	11.9	ペルー	405.0	12.0	ペルー	436.7	15.8
マレーシア	333.6	9.2	マレーシア	316.2	9.4	マレーシア	299.3	10.8
韓国	282.2	7.8	韓国	282.2	8.4	アルジェリア	233.5	8.4
アルジェリア	280.1	7.7	アルジェリア	254.7	7.5	サウジアラビア	206.0	7.4
その他	1,628.2	44.9	その他	1,481.6	43.9	その他	1084.7	39.1
合計	3,624.9	100.0	合計	3,377.8	100.0	合計	2,772.0	100.0

資料:アルゼンチン国家統計局(INDEC)をもとに農林水産省で作成

< ウクライナ > 2025/26 年度の生産量は、前年度から 14.6%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実生産量は、ウクライナ国家統計局が発表したデータに基づき前月予測から 1.7 百万トン上方修正され、前年度から 14.6%増となるものの、ロシアの侵攻前の過去5年平均(2017/18～2021/22 年度、33.6 百万トン)からは 8.8%減の 30.7 百万トンとなる見込み。

同「Feed Outlook」(2026.3.12)によれば、北部及び中央部の生産地域で概ね良好な生産状況となった一方、秋の豪雨の影響により一部の圃場では収穫ができず、冬の間、作物が圃場に残留する状況となった。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、飼料用消費の引上げを受け前月予測から 0.4 百万トン上方修正され、前年度から 1.5%増の 6.6 百万トンとなる見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出品量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加等を受け前年度から 9.9%増の 22.0 百万トンとなる見込み。

現地情報会社によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10 月～2026 年2月の輸出品量は、前年同期(1,174.0 万トン)に比べ 9.7%減の 1,060.5 万トン(図)。輸出品先国別には、トルコ 289.8 万トン(27.3%)、イタリア 220.3 万トン(20.8%)、スペイン 117.2 万トン(11.0%)の順となっている(表)。USDA「Grain and Feed Quarterly」(2026.2.4)によれば、とうもろこしの水分量が過剰で、出荷前に乾燥機に通す必要があり、輸出品遅延が生じた。

2022 年6月より適用されてきた EU のウクライナ産品に対する輸入関税と輸入割当の停止措置が 2025 年6月5日に適用期限を迎え失効し、欧州委員会は、6月6日以降、深化した包括的自由貿易協定(DCFTA)に基づく関税割当を適用している。6月30日には欧州委員会とウクライナが DCFTA の下で新たな貿易措置に合意したことが発表され、とうもろこしの年間の関税割当量は、現行の 65 万トンから 100 万トンに拡大された。EU とウクライナの連合委員会は 10 月 14 日に上記の合意を承認し、10 月 29 日に発効となった。期限は 2028 年末までとされ、同年に見直しを検討される予定。現地情報会社によれば、とうもろこしについては、EU の関税率は0%であるため、割当量の増減による影響はないものとみられる。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測から 1.3 百万トン上方修正され、生産量の増加を受け前年度から 251.2%増、ロシアの侵攻前の過去5年平均(2.5 百万トン)からも 17.3%増の 3.0 百万トンとなる見込み。2025/26 年度の期末在庫率は、前年度から 7.1 ポイント増の 10.3%となる見込み。

とうもろこしーウクライナ

(概ね4～5月に作付けされ、8～11月に収穫される。)

(単位:百万トン)

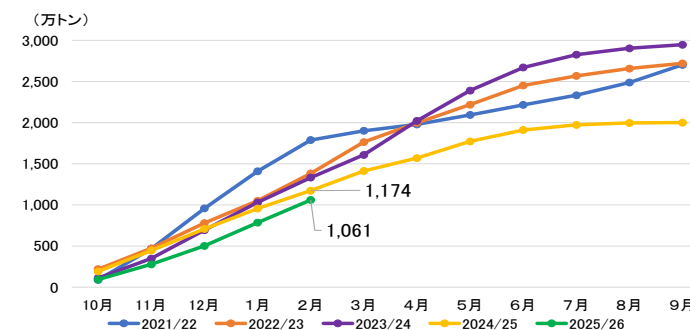
年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年10月～26年9月)		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	32.5	26.8	30.7 (30.5)	1.7	14.6
消費量	5.5	6.5	6.6 (6.1)	0.4	1.5
うち飼料用	4.6	5.4	5.4 (4.7)	0.4	-
輸出品量	29.5	20.0	22.0 (22.5)	-	9.9
輸入量	0.01	0.02	0.01 (0.002)	-	▲ 50.0
期末在庫量	0.5	0.8	3.0 (3.0)	1.3	251.2
期末在庫率	1.5%	3.2%	10.3% (10.5%)	4.5	7.1

(参考)

収穫面積(百万ha)	4.20	4.10	4.37 (4.20)	0.17	6.6
単収(t/ha)	7.74	6.54	7.03 (7.26)	0.13	7.5

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,
「World Agricultural Production」(10 March 2026)
IGC「Grain Market Report」(19 February 2026)

図 ウクライナのとうもろこしの輸出品量の推移(累計)



資料:APK-Inform Agency のデータをもとに農林水産省で作成

表 ウクライナのとうもろこしの輸出品先国と輸出品量

2024/25年度 (2024年10月～2025年9月)			2024/25年度 (2024年10月～2025年2月)			2025/26年度 (2025年10月～2026年2月)		
国名	輸出品量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出品量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出品量 (万トン)	シェア (%)
トルコ	568.8	28.4	トルコ	210.8	18.0	トルコ	289.8	27.3
イタリア	273.6	13.7	スペイン	200.7	17.1	イタリア	220.3	20.8
スペイン	240.7	12.0	イタリア	181.2	15.4	スペイン	117.2	11.0
オランダ	199.1	10.0	オランダ	136.2	11.6	オランダ	72.8	6.9
エジプト	162.5	8.1	エジプト	112.4	9.6	エジプト	70.5	6.6
その他	556.1	27.8	その他	332.7	28.3	その他	290.0	27.3
合計	2,000.8	100.0	合計	1,174.0	100.0	合計	1,060.5	100.0

資料:APK-Inform Agency のデータをもとに農林水産省で作成

< 中国 > 2025/26 年度の生産量は、前年度から 2.1%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加を受け前年度から 2.1%増、過去5年平均(278.8 百万トン)から 8.0%増の 301.2 百万トンと、史上最高の見込み(図)。同「World Agricultural Production」(2026.1.12)によれば、2025/26 年度は、南東部(四川省を含む)の一部で異常な高温乾燥に見舞われたものの、主要生産地の東北部では良好な天候に恵まれ生産量が増加した。

中国中央气象台「作物生育期監視」(2026.3.8~14)によれば、2026/27 年度の春とうもろこしは西南地域を中心に作付期から出芽期、3葉期を迎えている。ただし、同「全国農業気象週報」(2026.3.16)によれば、四川省北部の一部地域では、土壌水分量の不足により春とうもろこしの適時作付けに不利な状況となった。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用消費の増加を受け前年度から 1.6%増の 321.0 百万トンと、史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 339.6%増の 8.0 百万トンとなる見込み。同「Grain and Feed Update」(2025.7.2 及び 2026.1.27)によれば、2024/25 年度は、報復関税などの貿易政策の変更や国内農家の利益を守るための輸入抑制等により輸入量が大きく減少したが、2025/26 年度は、国内産とうもろこしの品質懸念や米国産農産物に対する報復関税の撤廃により輸入量が増加する見込み。

中国海関統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10~12 月の輸入量は、前年同期(88.9 万トン)に比べ 92.7%増の 171.4 万トン。輸入先国別には、ブラジル 135.8 万トン(79.2%)、ミャンマー19.2 万トン(11.2%)、ロシア 12.4 万トン(7.2%)の順となっている(表)。

中国農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2026 年1月号」によれば、1月の国内価格は、前月から横ばいの 2,420 元/トンであるものの、堅調な飼料用需要等により強含みで推移するとみられる。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、消費量の増加を受け前年度から 6.1%減、過去5年平均(204.8 百万トン)から 12.0%減の 180.2 百万トンとなる見込み。期末在庫率は前年度から 4.6 ポイント減の 56.1%となる見込み。

とうもろこしー中国

(春とうもろこしは、概ね2~4月に作付けされ、7~9月に収穫される。夏とうもろこしは、概ね4~6月に作付けされ、9~10月に収穫される。)

(単位:百万トン)

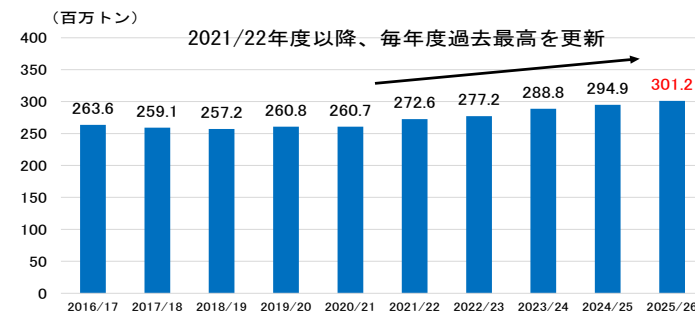
年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年10月~26年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	288.8	294.9	301.2 (301.2)	-	2.1
消費量	307.0	316.0	321.0 (312.2)	-	1.6
うち飼料用	225.0	234.0	239.0 (210.0)	-	2.1
輸出品	0.00	0.00	0.02 (0.1)	-	-
輸入品	23.3	1.8	8.0 (6.0)	-	339.6
期末在庫量	211.2	191.9	180.2 (179.9)	-	▲ 6.1
期末在庫率	68.8%	60.7%	56.1% (57.6%)	-	▲ 4.6

(参考)

収穫面積(百万ha)	44.22	44.74	44.96 (45.00)	-	0.5
単収(t/ha)	6.53	6.59	6.70 (6.69)	-	1.7

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,
「World Agricultural Production」(10 March 2026)
IGC「Grain Market Report」(19 February 2026)

図 中国のとうもろこしの生産量の推移



資料:USDA「PS&D」(2026.3.10)をもとに農林水産省で作成

表 中国のとうもろこしの輸入先国と輸入量

2024/25 年度 (2024年10月~2025年9月)			2024/25年度 (2024年10月~12月)			2025/26年度 (2025年10月~12月)		
国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸入量 (万トン)	シェア (%)
ブラジル	72.4	39.7	ブラジル	47.5	53.4	ブラジル	135.8	79.2
ウクライナ	37.6	20.6	ウクライナ	14.5	16.3	ミャンマー	19.2	11.2
ロシア	36.8	20.2	ミャンマー	13.2	14.8	ロシア	12.4	7.2
ミャンマー	22.8	12.5	ラオス	6.1	6.8	ラオス	4.0	2.3
ラオス	6.4	3.5	ロシア	4.8	5.4	ペルー	0.0	0.0
米国	3.9	2.1	米国	1.9	2.1	-	-	-
その他	2.3	1.3	その他	1.0	1.1	-	-	-
計	182.3	100.0	計	88.9	100.0	計	171.4	100.0

資料:中国海関統計をもとに農林水産省で作成

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要(詳細は右表を参照)

<USDAの見通し> 2025/26年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 —

・前月予測からの変更なし。

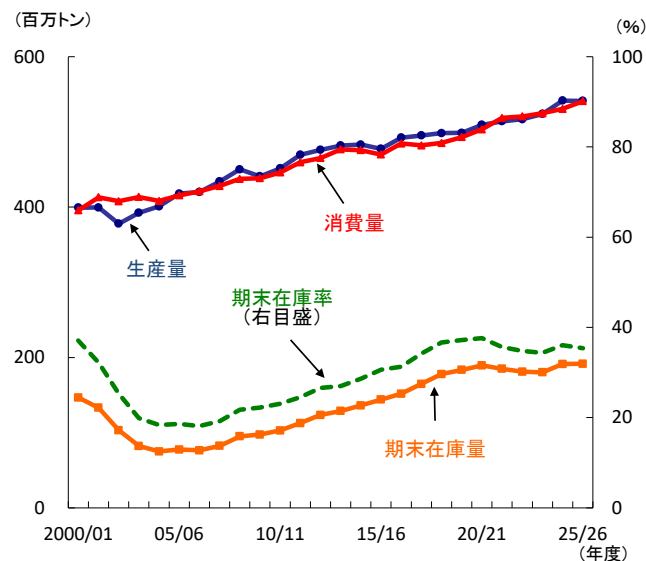
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・カメルーン、ギニア等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・インド、タイ等で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↑



資料:USDA「PS&D」(2026.3.10)をもとに農林水産省にて作成

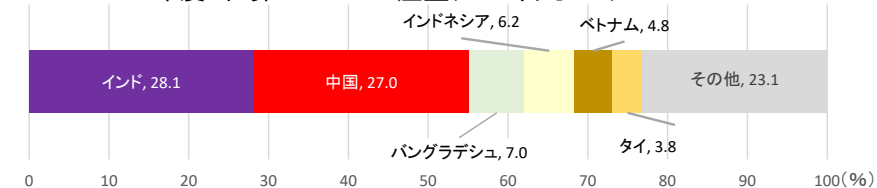
◎世界のコメ需給

(単位:百万精米トン)

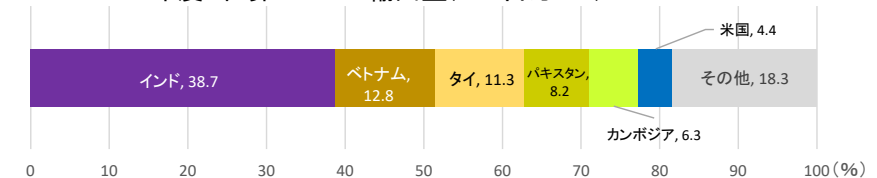
年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	523.9	541.7	541.3	-	▲ 0.1
消費量	524.7	530.6	541.0	▲ 0.8	1.9
輸出量	56.8	61.5	62.0	▲ 1.3	0.8
輸入量	53.5	57.8	59.0	▲ 1.0	2.1
期末在庫量	180.2	191.2	191.5	0.7	0.2
期末在庫率	34.3%	36.0%	35.4%	0.2	▲ 0.6

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(10 March 2026)

○ 2025/26年度 世界のコメの生産量(541.3百万トン)



○ 2025/26年度 世界のコメの輸出量(62.0百万トン)



○ 2025/26年度 世界のコメの輸入量(59.0百万トン)



(2) 国別のコメの需給動向

< タイ > 2025/26 年度の輸出量は、前年度から 10.9%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積が前年度から 0.28 百万ヘクタール減少(前年度比 2.5%減)することを受け、前年度から 2.1%減の 20.4 百万トンの見込み。単収は過去最高の 2.86 トン/ヘクタールを維持する見込み。

タイ農業協同組合省農業経済局(2026.2)によれば、2025/26 年度の乾季米の作付面積は、前年度に比べ 2.1%減の 2.06 百万ヘクタールと予測されている。前年同様に雨季中の十分な降雨による灌漑用水の供給が期待される一方、コメの農家買取価格が下げ止まりしており、乾季米の栽培を控える農家や、サトウキビや飼料用とうもろこしの栽培を選択する農家が増えることが見込まれている。

アセアン食料安全保障情報システム(2026.2)によれば、乾季米は現在、幼穂形成期から登熟期にあり、総作付面積は、約 200 万ヘクタールと推定され、前年度に比べ 2%減となっている。作付面積は減少したものの、好天に支えられ生育期を通じてほとんどの圃場で安定した灌漑用水が供給された。結果、単収は前年度に比べわずかな増加が見込まれている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、タイ米の輸出価格が、バーツ高及び国内価格の上昇を主要因として、他のアジアのコメ輸出国に比べ高いことから、前月予測から 0.2 百万トン下方修正され、前年度から 10.9%減の 7.0 百万トンの見込み。同「Grain and Feed Monthly」(2026.3.2)によれば、2026 年初頭、タイ産米の輸出価格は、バーツ高とベトナム、インドとの競争激化に加え、季節的な需要減が重なり、バイヤーが世界的なコメ価格下落を見込み、購入を先送りする動きが加速したことから、軟調に推移している。同「Grain: World Markets and Trade」(2026.3.10)によれば、タイ産米(長粒種白米 100%B)の3月5日までの週の価格は、需要減を受け、前月2月5日までの週から 17 ドル/トン下落し 383 ドル/トンとなった(図)。

タイ関税局によれば、2025/26 年度の輸出量のうち 2026 年1月の輸出量は、前年度(64.3 万トン)に比べ 17.5%減の 53.0 万トンで、輸出先国別には、イラク 8.4 万トン(15.8%)、米国 6.0 万トン(11.3%)、南アフリカ 4.2 万トン(8.0%)の順となっている(表)。USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測から 0.2 百万トン上方修正され、前年度から 29.1%増の 3.6 百万トンの見込み。

コメータイ

夏期の雨季作(5~10 月作付け、同年7月~翌年5月収穫)と冬期の乾季作(11 月~翌年4月作付け、翌年2~10 月収穫)で行われる。主にインディカ米を栽培。

(単位:百万精米トン)

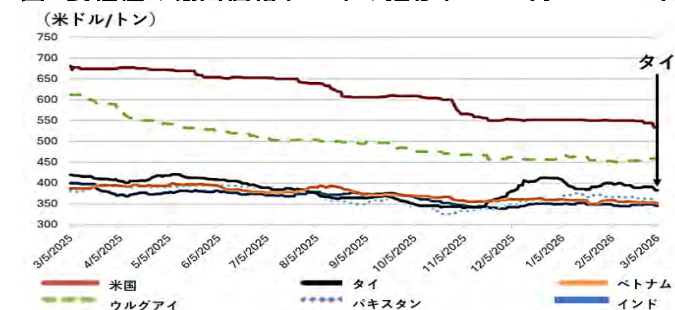
年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(26年1月~26年12月)		
			予測値、0はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	20.0	20.8	20.4 (20.4)	-	▲ 2.1
消費量	12.3	12.5	12.7 (12.7)	-	▲ 1.2
輸出量	9.9	7.9	7.0 (7.1)	▲ 0.2	▲ 10.9
輸入量	0.1	0.1	0.1 (0.02)	-	-
期末在庫量	2.2	2.8	3.6 (3.5)	0.2	29.1
期末在庫率	10.0%	13.5%	18.1% (17.7%)	1.2	4.6

(参考)

収穫面積(百万ha)	10.65	11.08	10.80 (10.80)	-	▲ 2.5
単収(噸/ha)	2.85	2.85	2.86 (1.89)	-	0.4

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,
「World Agricultural Production」(10 March 2026)
IGC「Grain Market Report」(19 February 2026)(単収は精米/ha)

図 長粒種の輸出価格(FOB)の推移(2025.3月~2026.3月)



資料:USDA「Grain: World Markets and Trade」をもとに農林水産省で作成

表 タイのコメの輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2025年1月~12月)			2024/25年度 (2025年1月)			2025/26年度 (2026年1月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
イラク	100.1	12.7	イラク	10.5	16.3	イラク	8.4	15.8
南アフリカ	87.6	11.1	米国	9.1	14.1	米国	6.0	11.3
米国	81.8	10.4	セネガル	5.3	8.2	南アフリカ	4.2	8.0
中国	65.5	8.3	南アフリカ	4.9	7.6	マレーシア	3.6	6.8
セネガル	28.7	3.6	日本	3.5	5.5	アンゴラ	2.7	5.1
マレーシア	27.8	3.5	アンゴラ	3.5	5.5	カメルーン	2.4	4.5
その他	398.6	50.4	その他	27.4	42.7	その他	25.8	48.6
計	790.1	100.0	計	64.3	100.0	計	53.0	100.0

資料:タイ関税局「Electronic Service」をもとに農林水産省で作成

< 米国 > 2025/26 年度の輸出量は、前年度から 5.9%減少する見込み

【生育・生産状況】USDAによれば、2025/26年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収及び収穫面積の減少を受け、前年度から7.0%減の6.6百万トンの見込み。2025/26年度の収穫面積は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ4.3%減の1.11百万ヘクタールの見込み。

同「Crop Production」(2026.1.12)によれば、種類別生産量は、長粒種は4.9百万トンと前年度(5.5百万トン)から11%減の見込み。一方、中・短粒種は1.7百万トンと、前年度(1.6百万トン)から5.5%増の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2025/26年度の輸入量は、前月予測から0.1百万トン下方修正され、前年度から7.6%減の1.5百万トンの見込み。同「Rice Outlook」(2026.2.12)によれば、特にタイからの長粒種(香り米(ジャスミン米))の輸入ペースの鈍化を受けている。

USDAによれば、2025/26年度の輸出量は、前月予測から0.1百万トン下方修正され、前年度から5.9%減の2.7百万トンの見込み。同「Rice Outlook」(2026.2.12)によれば、当該下方修正は、長粒種(玄米及び精米)の輸出減が予測され、長粒種玄米の最大輸出先のメキシコにおける貿易政策の転換や、パキスタンからのハイチ向け長粒種精米の輸出再開が影響している。

同「Grain: World Markets and Trade」(2026.3.10)によれば、米国産米(長粒種白米、4%碎米混入)の3月5日までの週の価格は、メキシコ等の伝統的長粒種市場への販売不振が続き、前月2月5日までの週から16ドル/トン下落し534ドル/トンとなった(<タイ>図 長粒種の輸出価格(FOB)の推移参照)。

同「Exports Sales Query System」によれば、2025/26年度のうち2025年8月～2026年1月の輸出量は113.7万トンで、輸出先国別には、日本20.2万トン(17.8%)、ハイチ18.2万トン(16.0%)、メキシコ16.3万トン(14.3%)の順(表)。種類別には、長粒種は、輸出量74.1万トンで、輸出先国別には、ハイチ18.2万トン(国別シェア24.6%)、メキシコ13.6万トン(同18.3%)、イラク8.8万トン(同11.9%)。中・短粒種は、輸出量39.6万トンで、輸出先国別には、日本20.2万トン(国別シェア51.1%)、韓国10.7万トン(同26.9%)、メキシコ2.7万トン(同6.8%)。同「Grain: World Markets and Trade」(2026.2.10)によれば、2024/25年度(2024年8月～翌年7月)の米国産米の対日輸出量は、30年の中で最高を記録した。日本の輸入増は、国内供給量の低下、国内価格の高騰、日米間の枠組み合意等の要因が作用している(図2)。USDAによれば、2025/26年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度から6.4%減の1.6百万トンの見込み。

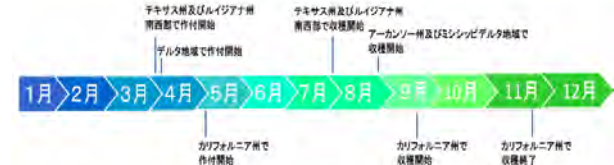
コメー米国

長粒種の生産量は7割、中・短粒種の生産量は3割を占め、長粒種の6割をアーカンソー州が、中・短粒種の7割をカリフォルニア州が占める。

年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年8月～26年7月)		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	6.9	7.1	6.6	-	▲ 7.0
消費量	4.9	5.3	5.4	-	▲ 2.5
輸出量	3.2	2.9	2.7	▲ 0.1	▲ 5.9
輸入量	1.4	1.6	1.5	▲ 0.1	▲ 7.6
期末在庫量	1.3	1.7	1.6	-	▲ 6.4
期末在庫率	15.8%	20.9%	19.7%	0.1	▲ 1.3

(参考)
 収穫面積(百万ha) 1.16 1.16 1.11 - ▲ 4.3
 単収(粒/ha) 8.56 8.69 8.45 - ▲ 2.8
 資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,
 「World Agricultural Production」(10 March 2026)

図1 米国のコメの作付けから収穫時期



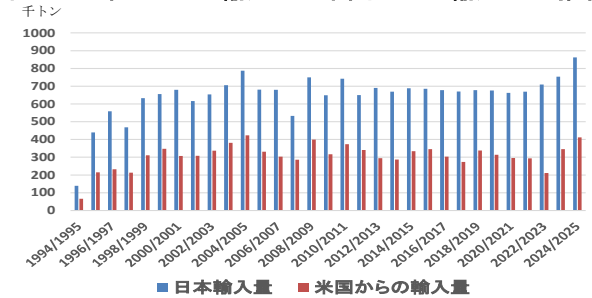
資料: USDA「Rice-Rice Sector at a Glance」(2025.12.23)をもとに農林水産省で作成

表 米国のコメの輸出先国と輸出量

国名	2024/25年度 (2024年8月～2025年7月)		2024/25年度 (2024年8月～2025年1月)		2025/26年度 (2025年8月～2026年1月)	
	輸出量 (万トン)	シェア (%)	輸出量 (万トン)	シェア (%)	輸出量 (万トン)	シェア (%)
メキシコ	68.6	23.5	41.2	27.1	20.2	17.8
日本	39.4	13.5	17.6	11.6	18.2	16.0
ハイチ	28.6	9.8	15.4	10.1	16.3	14.3
ホンジュラス	27.4	9.4	10.8	7.1	10.7	9.4
イラク	22.0	7.6	10.2	6.7	8.8	7.7
韓国	13.4	4.6	7.3	4.8	8.6	7.6
その他	91.9	31.6	49.6	32.6	30.9	27.1
計	291.2	100.0	計	152.0	計	113.7

資料: USDA「Exports Sales Query System」をもとに農林水産省で作成

図2 日本のコメの輸入量と米国からの輸入量の推移



資料: USDA「PS&D」(TY Importsを使用)(2026.3.10)をもとに農林水産省で作成

< 中国 > 2025/26 年度の輸出量は、前年度から 65.2%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 0.7%増の 146.3 百万トン(精米ベース)となる見込み。同「Grain and Feed Update」(2026.1.27)によれば、2025/26 年度の実生産量は、中国国家统计局による単収増の公表を受け、前年度(145.3 百万トン)と比べ 0.7%増の 146.3 百万トン(精米ベース)となる見込み。晩稲の収穫は 2025 年 12 月下旬に終了している。

中国中央气象台「一期作生育状況」及び「早生二期米生育状況」(2026.3.8~14)によれば、一期作米は、主に西南地域で、作付け、発芽期にあり、雲南省一部では既に3葉期に入っている。早稲二期作米は、華南地域を中心に、作付けから発芽期、3葉期へと進んでおり、海南省では既に茎伸長期に入っている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料及び工業用への古米在庫の放出増を要因として前年度から 1.4%増の 147.0 百万トンとなる見込み。

2025/26 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、国際市場におけるコメ価格の持続的な下落により国内コメ価格との価格差が拡大し、ミャンマー、タイ及びベトナムからの輸入米増の予測を受け前年度から 32.5%増の 3.1 百万トンの見込み。

中国海関統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7~12 月の輸入量は、前年同期(90.4 万トン)に比べ 84.8%増の 167.1 万トンとなっている。輸入先国別には、ミャンマー73.2 万トン(43.8%)、タイ 35.4 万トン(21.2%)、ベトナム 28.5 万トン(17.1%)の順となっている(表)。

USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、コートジボワール、ギニアビサウ及びリビアを含むアフリカ市場における競争力のある中粒種の需要拡大を背景に、前年度から 65.2%増の 1.9 百万トンの見込み。

中国海関統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年7~12 月の輸出量は、前年同期(55.2 万トン)に比べ 104.2%増の 112.8 万トンとなっている。輸出先国別には、トルコ 12.5 万トン(11.1%)、カメルーン 8.3 万トン(7.4%)、パプアニューギニア 7.4 万トン(6.6%)、日本 7.3 万トン(6.5%)の順となっている。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度から 0.5%増の 105.0 百万トンの見込み(図)。同「Grain and Feed Update」(2026.1.27)によれば、長雨による品質の低下、特に河南省での発芽率の悪化を受け、高品質米の供給が減少し一部地域でコメの買付価格が上昇している。その結果、備蓄基準を満たさない玄米の市場供給が増加し、期末在庫は 105.0 百万トンを上回るとも見込まれている。

コメー中国

中国の主要コメ生産地域は、南部稲作地域(華南、華中、西南高原地域)で、インディカ米とジャポニカ米を栽培。北部稲作地域では、主にジャポニカ米を栽培。

(単位:百万精米トン)

年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(25年7月~26年6月)		
			予測値、0はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	144.6	145.3	146.3 (146.3)	-	0.7
消費量	148.1	145.0	147.0 (145.7)	-	1.4
輸出量	1.6	1.2	1.9 (1.9)	-	65.2
輸入量	1.5	2.3	3.1 (2.8)	-	32.5
期末在庫量	103.0	104.5	105.0 (103.6)	-	0.5
期末在庫率	68.8%	71.5%	70.5% (70.2%)	-	▲ 1.0

(参考)

収穫面積(百万ha)	28.95	29.01	29.00 (29.00)	-	▲ 0.02
単収(kg/ha)	7.14	7.15	7.21 (5.05)	-	0.8

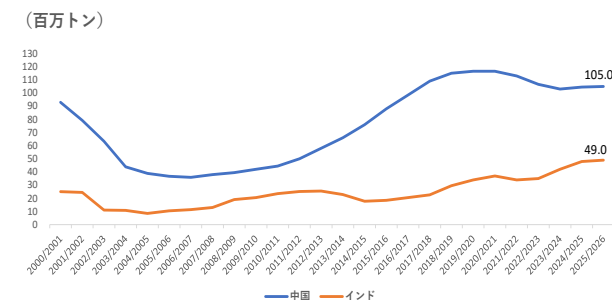
資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 March 2026)
IGC「Grain Market Report」(19 February 2026)(単収は精米t/ha)

表 中国のコメの輸入先国と輸入量

国名	2024/25年度 (2024年7月~2025年6月)		2024/25年度 (2024年7月~12月)		2025/26年度 (2025年7月~12月)	
	輸入量 (万トン)	シェア (%)	輸入量 (万トン)	シェア (%)	輸入量 (万トン)	シェア (%)
ミャンマー	67.4	28.9	36.3	40.2	73.2	43.8
タイ	56.1	24.0	23.5	26.0	35.4	21.2
ベトナム	49.6	21.3	12.1	13.4	28.5	17.1
インド	24.1	10.3	6.6	7.3	11.2	6.7
パキスタン	20.7	8.9	5.6	6.2	9.0	5.4
カンボジア	11.7	5.0	3.3	3.6	7.2	4.3
その他	3.8	1.6	3.0	3.3	2.6	1.6
合計	233.5	100.0	90.4	100.0	167.1	100.0

資料:中国海関統計をもとに農林水産省で作成

図 中国とインドのコメの在庫推移



資料:USDA「PS&D」(2026.3.10)をもとに農林水産省で作成

< インド > 2025/26 年度の輸出量は、前年度から 5.1%増加する見込み

【生育・生産状況】USDAによれば、2025/26年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度から1.3%増、過去5年平均(135.5百万トン)から12.2%増の152.0百万トンと史上最高の見込み。10年連続の記録更新が見込まれている。

インド農業・農民福祉省によれば、2025/26年度のラビ米の作付けは順調に進捗しており、1月23日時点で前年同期(2.9百万ヘクタール)から6.2%増(0.2百万ヘクタール増)の3.1百万ヘクタールとなっている。また、2025/26年度の夏季米の作付面積は、2026年2月20日時点で前年同期(1.8百万ヘクタール)と同じ1.8百万ヘクタールとなっている。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2025/26年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度から4.8%増の127.0百万トンと予測されている。同「Grain and Feed Update」(2025.12.4)によれば、当該増加は、インド政府が実施するエタノール製造業者向けプログラムにおける、政府余剰米在庫の需要増が要因となっている。また生産量の増加により、政府は食料安全保障法に基づく公的食料配給制度(PDS)の継続実施が可能となっており、政府はPDSにより市場からコメ等を調達し、低所得世帯(8.14億人以上)に無償又は低価格で配給している。

USDAによれば、2025/26年度の輸出量は、輸出ペースが予測を下回ったことを受け、前月予測から1.0百万トン下方修正されたものの、前年度から5.1%増の24.0百万トンの見込み。同「Grain: World Markets and Trade」(2026.3.10)によれば、インド産米(長粒種白米、5%碎米混入)の3月5日までの週の価格は、サブサハラ・アフリカからの需要減を受け、前月2月5日までの週から2ドル/トン下落し346ドル/トンとなった(<タイ>図 長粒種の輸出価格(FOB)の推移参照)。

インド輸出入統計によれば、2025/26年度のうち2025年10~12月の輸出量は、503.5万トンと前年同期(620.1万トン)に比べ18.8%減となっている。輸出先国別には、ベナン34.9万トン(6.9%)、ギニア31.9万トン(6.3%)、サウジアラビア29.8万トン(5.9%)の順となっている(表)。

USDAによれば、2025/26年度の期末在庫量は、輸出ペースの鈍化を受け、前月予測から1.0百万トン上方修正され、前年度から2.1%増の49.0百万トンとなり、政府が望む在庫水準は大幅に上回る見込み(<中国>図 中国とインドのコメの在庫推移参照)。インド食料公社(Food Cooperation India)によれば、2026年2月時点の期末在庫量は、33.67百万トン(精米)と前年同期(34.01百万トン)に比べ1%減の見込み。

コメーインド

カリフ米:雨季/モンスーン期(5~10月)に栽培。
ラビ米:冬季の11月~翌3月に栽培。
夏季米:3~6月に栽培。

年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(25年10月~26年9月)		
			予測値、0はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	137.8	150.0	152.0 (153.0)	-	1.3
消費量	116.4	121.2	127.0 (125.2)	-	4.8
輸出量	14.4	22.8	24.0 (21.3)	▲1.0	5.1
輸入量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-
期末在庫量	42.0	48.0	49.0 (54.9)	1.0	2.1
期末在庫率	32.1%	33.3%	32.5% (37.5%)	0.9	▲0.9
(参考)					
収種面積(百万ha)	47.83	51.42	52.00 (51.50)	-	1.1
単収(噸/ha)	4.32	4.38	4.39 (2.97)	-	0.2

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

「World Agricultural Production」(19 March 2026)

IGC「Grain Market Report」(19 February 2026) (単収は精米/ha)

写真 インド・西ベンガル州の圃場



二期作地域では、冬季米(現地名:ボロ)が移植段階にある。移植後1~3日の稲(3月2日撮影)。

表 インドのコメの輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年10月~2025年9月)			2024/25年度 (2024年10月~12月)			2025/26年度 (2025年10月~12月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
ベナン	216.7	9.4	ベナン	72.2	11.6	ベナン	34.9	6.9
バングラデシュ	149.9	6.5	コートジボワール	39.1	6.3	ギニア	31.9	6.3
サウジアラビア	139.8	6.1	トーゴ	37.2	6.0	サウジアラビア	29.8	5.9
ギニア	114.5	5.0	ギニア	31.4	5.1	バングラデシュ	29.7	5.9
トーゴ	113.9	5.0	サウジアラビア	31.1	5.0	アラブ首長国連邦	25.4	5.0
コートジボワール	111.2	4.8	ベトナム	24.9	4.0	コートジボワール	25.1	5.0
その他	1,454.8	63.2	その他	384.2	62.0	その他	326.6	64.9
計	2,300.8	100.0	計	620.1	100.0	計	503.5	100.0

資料:インド農業・加工食品輸出振興局(APEDA)「Agri Xchange」をもとに農林水産省で作成

< ベトナム > 2025/26 年度の輸出量は、前年度から 2.0%減少する見込み

【生育・生産状況】USDAによれば、2025/26年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の減少を受け前年度から2.8%減の26.0百万トンの見込み。

ベトナム総統計局(2026.3.6)によれば、2026年(USDA:2025/26年度)の全国の冬春作の作付面積は、2月20日時点で、前年同期に比べ5.8万ヘクタール減の273.1万ヘクタールの見込み。この内、北部では、季節当初の厳しい寒さによる稲被害を回避するため、作付作業が後ろ倒しとなり、前年同期に比べ2.4万ヘクタール減の85.4万ヘクタールに留まった。また、南部では、冬春作の作付けは概ね完了しており、前年同期に比べ3.4万ヘクタール減の187.7万ヘクタールとなった。作付面積の減少は、より収益性の高い作物へ作付けが転換されたことによる。

アセアン食料安全保障情報システム(2026.2)によれば、ベトナム北部では、乾季米(冬春作)の作付けが開始され、18万1千ヘクタールに達しているが、早春の寒波と長雨により耕起や作付作業が妨げられ、進捗は前年に比べ遅れている。南部でも、乾季米(冬春作)の作付けが進行中であり、総作付面積は173万ヘクタールに達している。一方、メコンデルタ地域を中心に一部の省では収穫が始まっている。作柄及び単収見通し共に概ね良好となっている。

【貿易情報・その他】USDA「Grain: World Markets and Trade」(2026.3.10)によれば、2025/26 年度の輸入量は、2026 年初頭の緩慢な輸入ペースを受け、前月予測から 0.2 百万トン下方修正されたものの、前年度からは 10.5%増の 3.9 百万トンと、過去最高となる見込み。

2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、インドやタイといった輸出国との競争激化が予測され前年度から 2.0%減の 7.9 百万トンとなる見込み。

ベトナム税関総局によれば、2025/26 年度のうち 2026 年1月～2月の輸出量は、127.3 万トンと前年同期(123.0 万トン)に比べ 3.5%増。輸出先国別には、フィリピン 71.1 万トン(55.9%)、中国 17.8 万トン(14.0%)、ガーナ 8.7 万トン(6.8%)の順(表)。

同「Grain: World Markets and Trade」(2026.3.10)によれば、ベトナム産米(長粒種白米、5%碎米混入)の3月5日までの週の価格は、フィリピンからの需要改善を冬春作の収穫開始が相殺し、前月2月5日までの週から7ドル/トン下落し 352 ドル/トンとなった(<タイ>図 長粒種の輸出価格(FOB)の推移参照)。USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測から0.2百万トン下方修正され、前年度に比べ26.9%減の1.9百万トンとなる見込み。

コメベトナム

北部で概ね二期作、南部で三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培。

年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26(26年1月～26年12月)		
			予測値、0%IGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	27.2	26.8	26.0 (28.3)	-	▲ 2.8
消費量	22.5	22.6	22.7 (23.3)	-	0.4
輸出量	9.0	8.1	7.9 (8.5)	-	▲ 2.0
輸入量	3.7	3.5	3.9 (3.5)	▲ 0.2	10.5
期末在庫量	3.0	2.6	1.9 (3.3)	▲ 0.2	▲ 26.9
期末在庫率	9.5%	8.5%	6.2% (10.2%)	▲ 0.5	▲ 2.3

(参考)
 収穫面積(百万ha) 7.11 6.95 6.80 (7.12) - ▲ 2.2
 単収(噸/ha) 6.12 6.16 6.12 (3.97) - ▲ 0.6
 資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,
 「World Agricultural Production」(10 March 2026)
 IGC「Grain Market Report」(19 February 2026) (単収は精米t/ha)

写真 ベトナム南部の圃場(3月10日撮影)



作付け後 98 日目、登熟期のジャポニカ品種 DS1の圃場。
 3月下旬に収穫を迎える予定。

表 ベトナムのコメの輸出先国と輸出量

国名	2024/25年度 (2025年1月～12月)		2024/25年度 (2025年1月～2月)		2025/26年度 (2026年1月～2月)	
	輸出量 (万トン)	シェア (%)	輸出量 (万トン)	シェア (%)	輸出量 (万トン)	シェア (%)
フィリピン	320.7	39.8	54.7	44.5	71.1	55.9
コートジボワール	105.5	13.1	21.3	17.3	17.8	14.0
ガーナ	91.9	11.4	11.2	9.1	8.7	6.8
中国	74.7	9.3	7.3	5.9	6.7	5.3
マレーシア	51.5	6.4	2.6	2.1	6.7	5.3
セネガル	16.8	2.1	2.2	1.8	1.5	1.2
その他	145.5	18.0	23.7	19.3	14.8	11.6
計	806.7	100.0	123.0	100.0	127.3	100.0

資料:ベトナム税関総局「月別主要輸出統計データ」をもとに農林水産省で作成

II 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要(詳細は右表を参照)

<USDAの見通し> 2025/26年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・カザフスタンで上方修正されたものの、アルゼンチン、ウクライナ等で下方修正され、前月から下方修正された。

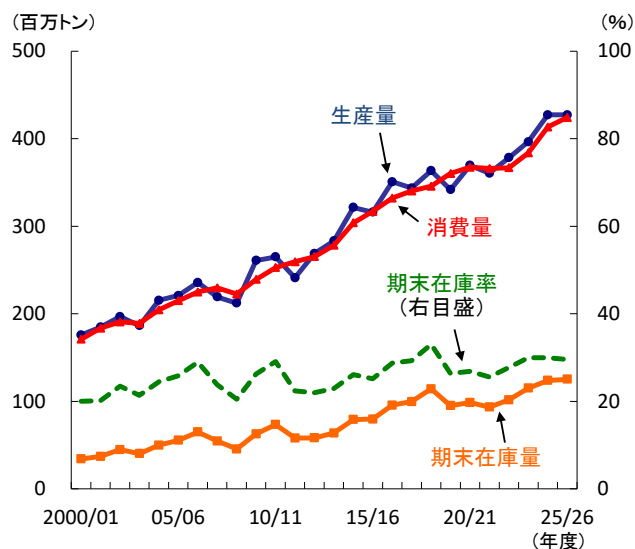
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・米国で上方修正されたものの、アルゼンチン等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・ウクライナで下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↓



資料:USDA「PS&D」(2026.3.10)をもとに農林水産省で作成

◎世界の大豆需給

(単位:百万トン)

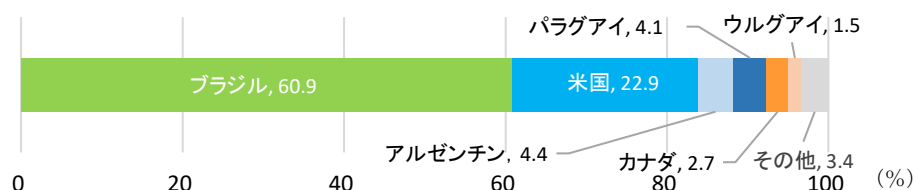
年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	396.4	427.2	427.2	▲ 1.0	▲ 0.002
消費量	383.7	413.4	424.2	▲ 0.6	2.6
うち搾油用	331.2	359.0	368.0	▲ 0.1	2.5
輸出量	177.8	184.2	187.2	▲ 0.4	1.6
輸入量	178.4	179.2	185.6	▲ 0.4	3.6
期末在庫量	115.1	123.8	125.3	▲ 0.2	1.2
期末在庫率	30.0%	30.0%	29.5%	▲ 0.01	▲ 0.4

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(10 March2026)

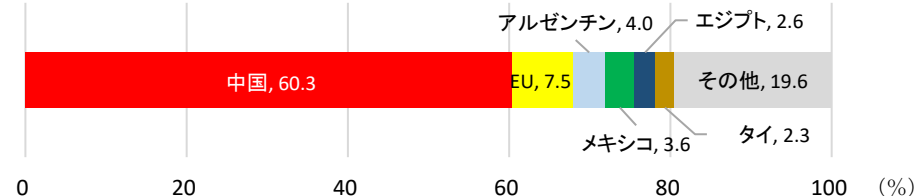
○ 2025/26年度 世界の大豆の生産量(427.2百万トン)



○ 2025/26年度 世界の大豆の輸出量(187.2百万トン)



○ 2025/26年度 世界の大豆の輸入量(185.6百万トン)



(2) 国別の大豆の需給動向

< 米国 > 2025/26 年度の生産量は前年度から 2.6%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積の減少を受け前年度から 2.6%減の 116.0 百万トンの見込み。同「Grains and Oilseeds Outlook」(2026.2.19)によれば、2025/26 年度は、とうもろこしに有利な価格相場により多くの農家がとうもろこしに作付けを切り替えたが、2026/27 年度は、他作物と比べ大豆の収益性が高いことや輪作によるとうもろこしからの作付けシフトを受け、作付面積は前年度から 4.7%増の 34.40 百万ヘクタールの見込み。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、搾油用需要の引上げを受け前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、前年度から 5.8%増の 73.1 百万トンと史上最高の見込み。米国環境保護庁(EPA)は、2025 年6月、再生可能燃料基準制度(RFS)について、2026~27 年の混合義務量案を公表した。バイオディーゼルは、2025 年の 33.5 億ガロンに対して、2026 年は 56.1 億ガロン、2027 年は 58.6 億ガロンと過去最高の数量を設定している。報道情報によれば、2026 年の義務量は、2026 年3月に最終決定される見通し。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、搾油用需要の増加等を受け前年度から 16.3%減の 42.9 百万トンの見込み。国際穀物理事会(IGC)によれば、3月5日現在、米国産の輸出価格は、473 ドル/トンと、前月(2月5日)から 18 ドル/トン上昇した。ブラジル産は前月から 12 ドル/トン上昇し 425 ドル/トン、アルゼンチン産は前月から8ドル/トン上昇し 441 ドル/トンとなった(図)。USDA 「Oilseeds: World Markets and Trade」(2026.3.10)によれば、米国産の輸出価格は約2年ぶりの高値を記録し、南米産に対する価格差が拡大した。ここ数か月間は、国内バイオ燃料需要拡大の期待が米国産の価格を下支えした。さらに、原油市場の急騰にバイオ燃料市場が連動し、価格が押し上げられた。

同「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」によれば、2025/26 年度の輸出量のうち 2025 年9月~2026 年2月の輸出量は、前年同期(3,772.0 万トン)に比べ 29.9%減の 2,643.2 万トン。輸出先国別には、中国 697.0 万トン(26.4%)、メキシコ 301.0 万トン(11.4%)、エジプト 273.9 万トン(10.4%)の順(表)。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、輸出量の減少等を受け前年度から 7.7%増、過去5年平均(8.0 百万トン)から 19.5%増の 9.5 百万トンの見込み。期末在庫率は、前年度から 0.9 ポイント増の 8.2%となる見込み。

大豆—米国

(概ね5~6月に作付けされ、9~11月に収穫される。)

(単位:百万トン)

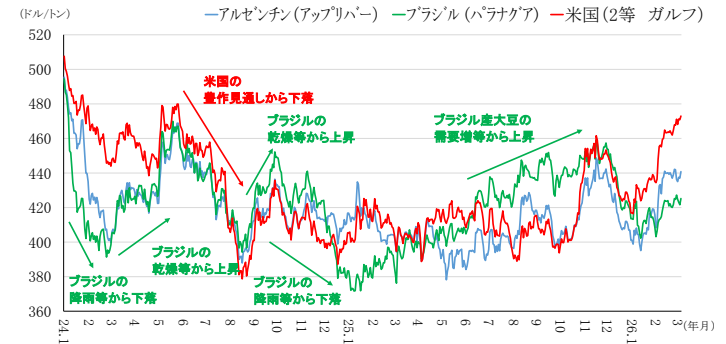
年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年9月~26年8月)		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生産量	113.3	119.1	116.0	-	▲ 2.6
消費量	65.4	69.1	73.1	0.1	5.8
うち搾油用	62.2	66.6	70.1	0.1	5.3
輸出量	46.3	51.2	42.9	-	▲ 16.3
輸入量	0.6	0.8	0.7	0.1	▲ 13.9
期末在庫量	9.3	8.8	9.5	-	7.7
期末在庫率	8.3%	7.3%	8.2%	▲ 0.01	0.9

(参考)

収穫面積(百万ha)	33.29	34.89	32.55	-	▲ 6.7
単収(t/ha)	3.40	3.41	3.56	-	4.4

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 March 2026)

図 米国、ブラジル、アルゼンチンの大豆輸出価格(FOB)の推移



資料:IGCのデータをもとに農林水産省で作成

表 米国の大豆の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年9月~2025年8月)			2024/25年度 (2024年9月~2025年2月)			2025/26年度 (2025年9月~2026年2月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
中国	2,232.5	44.6	中国	1,972.2	52.3	中国	697.0	26.4
メキシコ	498.5	10.0	メキシコ	279.5	7.4	メキシコ	301.0	11.4
エジプト	369.2	7.4	エジプト	203.8	5.4	エジプト	273.9	10.4
ドイツ	273.1	5.5	イタリア	195.7	5.2	イタリア	144.0	5.4
イタリア	210.0	4.2	ドイツ	156.0	4.1	インドネシア	139.1	5.3
その他	1,417.9	28.4	その他	964.8	25.6	その他	1,088.1	41.2
合計	5,001.3	100.0	合計	3,772.0	100.0	合計	2,643.2	100.0

資料:USDA「Federal Grain Inspection Services Yearly Export Grain Totals」をもとに農林水産省で作成

< ブラジル > 2025/26 年度の生産量は前年度から 5.0%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収が史上最高となることを受け前年度から 5.0%増の 180.0 百万トンと史上最高の見込み。ブラジル食料供給公社 (CONAB) の月例報告 (2026.3.13) によれば、2025/26 年度の実産量は、コメなどの他作物から収益性が高い大豆に作付けがシフトすること等による作付面積の増加を受け前年度から 3.7%増の 177.8 百万トンと史上最高の見込み。2月は中西部及び南東部の過剰な降雨により収穫作業が遅延した一方、南部のリオ・グランデ・ド・スール州では高温乾燥に見舞われ作柄が悪化した。3月初旬には北部及び北東部の降雨で収穫作業が遅延したが、生育が促進された。主要生産州のマット・グロッソ州 (中西部) では好天のタイミングで収穫され、収穫進捗率は 89.2%に達し、品質も確保されている。全国的な収穫進捗率は3月初旬時点で 50.6%となっており、報道情報によれば、収穫進捗率は、2020/21 年度以降最も遅いペースとなっている。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、搾油用需要の増加等を受け前年度から 5.5%増の 65.4 百万トンと史上最高の見込み。ブラジル植物油加工業界 (ABIOVE) によれば、2025 年のバイオディーゼル生産量のうち大豆油由来は約 73%を占めている。

ブラジル政府は、大豆油のインフレ懸念により 14%からの引上げが延期されていたバイオディーゼル混合率について、2025 年8月1日から 15%へ引き上げた。これにより化石燃料輸入量の減少、脱炭素化、農家の所得向上等が期待されている。報道情報によれば、3月に予定されているバイオディーゼル混合率 16%への引上げは、技術的な検証が完了していないため、延期される可能性がある。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、中国との強固な貿易関係等を受け前年度から 10.5%増の 114.0 百万トンと史上最高の見込み (<中国>表及び図参照)。ブラジル貿易統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10 月～2026 年2月の輸出量は、前年同期 (1,676.6 万トン) に比べ 39.0%増の 2,329.8 万トン。輸出先国別には、中国 1,900.2 万トン (81.6%)、タイ 113.3 万トン (4.9%)、スペイン 83.6 万トン (3.6%) の順となっている (表)。報道情報 (2026.3.14) によれば、異物混入や残留農薬の発見を受けた中国の要請により、ブラジルでの植物検疫が厳格化され、中国向け大豆輸出が鈍化しているとみられる。さらに、検疫強化に伴う滞船料の増加や中東情勢を背景とした運賃高騰により、中国向け販売も減少しているとみられる。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、生産量の増加等を受け前年度から 3.0%増、過去5年平均 (32.0 百万トン) から 18.4%増の 37.9 百万トンの見込み。期末在庫率は、前年度から 1.2 ポイント減の 21.1%となる見込み。

大豆—ブラジル

(概ね9～12月に作付けされ、1～4月に収穫される。)

年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (26年10月～26年9月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	154.5	171.5 (171.5)	180.0 (177.8)	(▲0.1)	5.0 (3.7)
消費量	58.3	62.0 (61.3)	65.4 (64.6)	- (▲0.001)	5.5 (5.4)
うち搾油用	54.4	58.0	61.0	-	5.2
輸出量	104.2	103.1 (108.2)	114.0 (114.4)	- (2.2)	10.5 (5.7)
輸入量	0.9	0.7 (1.0)	0.5 (0.5)	- (-)	▲31.5 (▲48.4)
期末在庫量	29.7	36.8 (10.2)	37.9 (9.5)	- (▲2.3)	3.0 (▲6.4)
期末在庫率 (%)	18.3%	22.3% (6.0%)	21.1% (5.3%)	- (▲1.4)	▲1.2 (▲0.7)

収獲面積(百万ha) 46.15 47.40 (47.35) 49.40 (48.43) - (-) 4.2 (2.3)
 単収(t/ha) 3.35 3.62 (3.62) 3.64 (3.67) - (▲0.003) 0.6 (1.4)
 資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,
 「World Agricultural Production」(10 March 2026)
 CONAB「Grãos」(13 March 2026) ※()書き、なお、CONABの収穫面積は作付面積である。

表 ブラジルの大豆の輸出先国と輸出量

国名	2024/25年度 (2024年10月～2025年9月)		2024/25年度 (2024年10月～2025年2月)		2025/26年度 (2025年10月～2026年2月)			
	輸出量 (万トン)	シェア (%)	輸出量 (万トン)	シェア (%)	輸出量 (万トン)	シェア (%)		
中国	7,968.8	77.3	1,286.1	76.7	1,900.2	81.6		
スペイン	396.3	3.8	タイ	126.2	7.5	タイ	113.3	4.9
タイ	365.5	3.5	イラク	56.6	3.4	スペイン	83.6	3.6
トルコ	184.8	1.8	スペイン	55.0	3.3	パキスタン	47.2	2.0
イラン	146.3	1.4	イラン	30.2	1.8	トルコ	36.3	1.6
その他	1,252.1	12.1	その他	122.5	7.3	その他	149.1	6.4
合計	10,313.8	100.0	合計	1,676.6	100.0	合計	2,329.8	100.0

資料:ブラジル貿易統計のデータをもとに農林水産省で作成

写真 マット・グロッソ州の大豆(3月3日撮影)



10月25日に作付けされた収穫間近の大豆。生産者は、単収を 3.9 トン/ヘクタールと見込んでいます。

撮影者:Rafael Rohenkohl

< カナダ > 2025/26 年度の生産量は前年度から 10.7%減少する見込み(AAFC)

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2026.3.18)によれば、2025/26 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、単収の減少を受け前年度から 10.7%減の 6.8 百万トンの見込み(図)。

カナダ統計局「Production of principal field crops, November 2025」(2025.12.4)によれば、州別の生産量は、マニトバ州では、収穫面積の増加を受け前年度から 12.3%増の 1.9 百万トンとなるものの、最大生産州のオンタリオ州では、前年度から 18.2%減の 3.6 百万トン、ケベック州では前年度から 15.6%減の 1.2 百万トンの見込み。各州とも単収が前年度を下回り、マニトバ州が 3.2%減、オンタリオ州が 11.8%減、ケベック州が 19.2%減の見込み。カナダ東部(オンタリオ州及びケベック州等)では、生育期間を通じて高温乾燥に見舞われ、大豆の作柄が大きく悪化した。

AAFC によれば、2026/27 年度の作付面積は、他作物の投入コスト上昇及び価格下落による収益性の低下によって大豆栽培にシフトし、2025/26 年度から 1.8%増、過去5年平均から7%増の 238 万ヘクタールの見込み。2026/27 年度の実産量は、前年度から 10.4%増の 7.5 百万トンの見込み(図)。

【需要状況】AAFC によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用需要等の減少を受け前年度から 14.8%減の 2.1 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2025/26 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少等を受け前年度から 3.2%減の 5.3 百万トンの見込み。前年度から減少見込みであるものの、カナダ穀物委員会(CGC)によれば、大豆の輸出ペースは前年をわずかに上回っており、依然として堅調である。

カナダ統計局によれば、2025/26 年度のうち 2025 年8月～2026 年1月の輸出量は、前年同期(398.8 万トン)に比べ 2.0%増の 406.9 万トン。輸出先国別には、中国 152.2 万トン(37.4%)、アルジェリア 52.7 万トン(13.0%)、オランダ 48.9 万トン(12.0%)の順となっている(表)。

AAFC によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、輸入量の引下げを受け 0.1 百万トン下方修正され、生産量の減少等を受け前年度から 25.9%減の 0.5 百万トンの見込み。期末在庫率は、前年度から 1.6 ポイント減の 6.0%となる見込み。

大豆—カナダ

(概ね5～6月に作付けされ、9～11月に収穫される。)

(単位:百万トン)

年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年8月～26年7月)		
			予測値、○はAAFC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	7.0	7.6 (7.6)	6.8 (6.8)	- (-)	▲10.7 (▲10.7)
消費量	2.3	2.4 (2.5)	2.1 (2.1)	- (-)	▲13.9 (▲14.8)
うち搾油用	1.7	1.7 (1.7)	1.4 (1.7)	- (-)	▲15.2 (▲1.3)
輸出量	4.9	5.4 (5.4)	5.1 (5.3)	- (-)	▲6.4 (▲3.2)
輸入量	0.3	0.2 (0.3)	0.4 (0.4)	- (▲0.1)	44.6 (49.8)
期末在庫量	0.6	0.5 (0.6)	0.5 (0.4)	- (▲0.1)	▲8.8 (▲25.9)
期末在庫率	7.8%	6.7% (7.6%)	6.7% (6.0%)	- (▲0.7)	▲0.01 (▲1.6)

(参考)

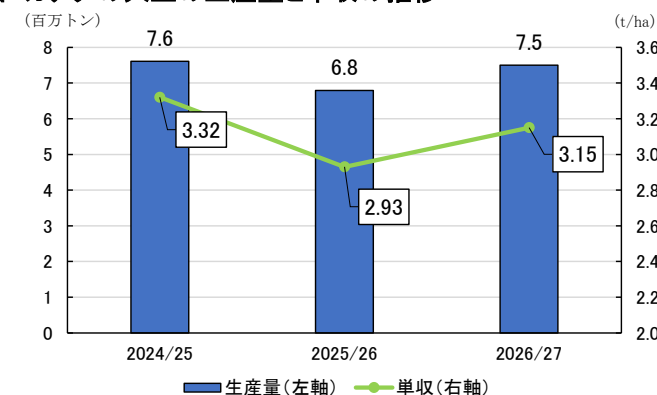
収穫面積(百万ha)	2.26	2.29 (2.29)	2.32 (2.32)	- (-)	1.3 (1.4)
単収(t/ha)	3.11	3.32 (3.32)	2.93 (2.93)	- (-)	▲11.7 (▲11.7)

資料:USDA「PS&D」(10 March 2026)

「World Agricultural Production」(10 March 2026)

AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(18 March 2026)※()書き

図 カナダの大豆の生産量と単収の推移



資料:AAFC「Outlook for Principal Field Crops」(2026.3.18)をもとに農林水産省にて作成

表 カナダの大豆の輸出先国と輸出量

2024/25年度 (2024年8月～2025年7月)			2024/25年度 (2024年8月～2025年1月)			2025/26年度 (2025年8月～2026年1月)		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
中国	104.2	19.0	中国	87.6	22.0	中国	152.2	37.4
イラン	83.9	15.3	イラン	83.9	21.0	アルジェリア	52.7	13.0
アルジェリア	52.1	9.5	アルジェリア	41.0	10.3	オランダ	48.9	12.0
米国	42.2	7.7	トルコ	20.2	5.1	イラン	43.1	10.6
日本	38.3	7.0	イタリア	19.2	4.8	米国	17.0	4.2
インドネシア	31.8	5.8	バングラデシュ	18.9	4.7	日本	15.7	3.9
その他	194.4	35.6	その他	128.0	32.1	その他	77.3	19.0
合計	546.9	100.0	合計	398.8	100.0	合計	406.9	100.0

資料:カナダ統計局のデータをもとに農林水産省で作成

大豆－中国

(概ね4～6月に作付けされ、9～10月に収穫される。)

(単位:百万トン)

年度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年10月～26年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	20.8	20.7	20.9 (20.9)	-	1.2
消費量	121.8	127.4	132.9 (135.1)	-	4.3
うち搾油用	99.0	103.5	108.0 (111.4)	-	4.3
輸出量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	-	42.9
輸入量	112.0	108.0	112.0 (113.0)	-	3.7
期末在庫量	43.3	44.5	44.4 (50.0)	-	▲0.2
期末在庫率	35.5%	34.9%	33.4% (37.0%)	-	▲1.5
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.47	10.33	10.30 (10.42)	-	▲0.3
単収(t/ha)	1.99	2.00	2.03 (2.01)	-	1.5

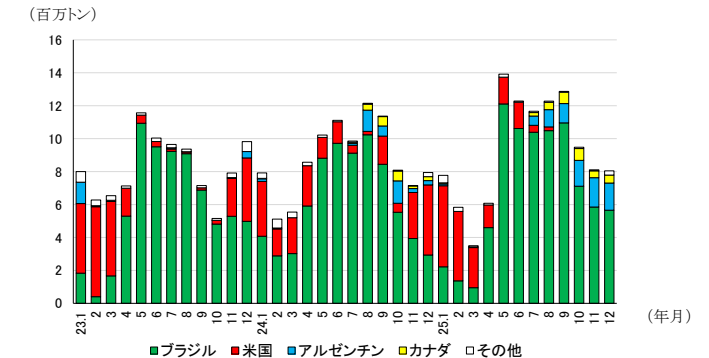
資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(10 March 2026)
IGC「Grain Market Report」(19 February 2026)

表 中国の大豆の輸入先国と輸入量

国名	2024/25年度 (2024年10月～2025年9月)		2024/25年度 (2024年10月～12月)		2025/26年度 (2025年10月～12月)	
	輸入量 (万吨)	シェア (%)	輸入量 (万吨)	シェア (%)	輸入量 (万吨)	シェア (%)
ブラジル	7,610.9	69.6	1,240.9	53.5	1,862.4	72.7
米国	2,438.9	22.3	758.8	32.7	499.5	19.5
アルゼンチン	476.6	4.4	186.9	8.1	161.5	6.3
ウルグアイ	244.3	2.2	99.8	4.3	21.9	0.9
カナダ	118.6	1.1	22.9	1.0	16.9	0.7
ロシア	45.0	0.4	8.7	0.4	1.2	0.0
その他	2.1	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0
合計	10,936.3	100.0	2,318.3	100.0	2,563.4	100.0

資料:中国海関統計のデータをもとに農林水産省で作成

図 中国の大豆の輸入量の推移(2023年1月～2025年12月)



資料:中国海関統計のデータをもとに農林水産省で作成

< 中国 > 2025/26 年度の生産量は前年度から 1.2%増加する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、単収の増加を受け前年度から 1.2%増の 20.9 百万トンと史上最高の見込み。

中国国家统计局「農村司司長魏鋒華解説糧食生産情況」(2025.12.12)によれば、2025 年の生産量は、前年から 1.3%増の 20.9 百万トンとなる見込み。これは、作付面積が 10.27 百万ヘクタールと前年から 0.6%減少したものの、単収が 2.04 トン/ヘクタールと前年より 1.9%増加することによる。

なお、主要生産地の東北部での 2026/27 年度の作付けは、4 月下旬から開始される。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、搾油用需要の増加等を受け前年度から 4.3%増の 132.9 百万トンと史上最高の見込み。

中国農業農村部「中国農業展望報告(2025-2034)」(2025.4)によれば、豚肉生産量の増加に伴い短期的には飼料用需要の増加が見込まれるものの 2034 年までの見通しでは、養豚施設の大規模化等により飼料用需要は今後安定的に推移する見込み。一方、飼料用大豆粕減量の取組が進み大豆粕需要は徐々に減少する見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、搾油用需要の増加等を受け前年度から 3.7%増の 112.0 百万トンと、2023/24 年度と並び史上最高の見込み。

中国海関統計によれば、2025/26 年度のうち 2025 年 10～12 月の輸入量は、前年同期(2,318.3 万吨)に比べ 10.6%増の 2,563.4 万吨。輸入先国別には、ブラジル 1,862.4 万吨(72.7%)、アルゼンチン 499.5 万吨(19.5%)、ウルグアイ 161.5 万吨(6.3%)の順(表、図)。中国国務院関税則委員会は、2025 年 10 月末の米中経済貿易協定の合意を踏まえ、税委会公告 2025 年第 4 号の追加関税 34%のうち 5 月 14 日から停止されてきた 24%の適用を 11 月 10 日から更に 1 年間停止(同第 10 号)し、同第 2 号の追加関税 15%の適用を停止すると発表(同第 9 号)した。これにより米産大豆に課す追加関税は 10%となった。

中国農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2026 年 1 月号」によれば、国家備蓄用の入札買入れが活発で、高い価格(プレミアム付き)で落札されたこと、高タンパク大豆の供給不足及び春節前の需要増により、1 月の国内価格は 4,660 元/トンと、前月(4,500 元/トン)から上昇した。

USDA によれば、2025/26 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、搾油用需要の増加等を受け前年度から 0.2%減となるものの、過去 5 年平均(34.8 百万トン)から 27.4%増の 44.4 百万トンと、史上 2 番目の見込み。期末在庫率は、前年度から 1.5 ポイント減の 33.4%となる見込み。

< アルゼンチン > 2025/26 年度の生産量は前年度から 6.1%減少する見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2025/26 年度の実産量は、単収の引下げを受け前月予測から 0.5 百万トン下方修正され、収穫面積及び単収の減少を受け前年度から 6.1%減の 48.0 百万トンの見込み。前年度は病害虫のヨコバイによる被害によりとうもろこしから大豆に作付けがシフトしたが、2025/26 年度は被害の改善により大豆からとうもろこしに作付けがシフトしたとみられる。

同「Oil Crops Outlook」(2026.3.12)によれば、早植え大豆は、重要な生育期間である 11～12 月は降雨に支えられており、乾燥が始まる前に莢伸長期に入っていたが、遅植え大豆は、1月に高温乾燥の影響を受けた。2月の降雨により作柄は安定したが、単収向上のためには適時適切な降雨が必要である。

ブエノスアイレス穀物取引所(2026.3.12)によれば、作付時は土壌水分量が十分で、2025 年の最終週まで降雨が生育を支えていたが、その後の高温乾燥等が作物に打撃を与えた。主要生産地のブエノスアイレス州北東部及びサンタフェ州中南部は、水不足及び熱ストレスの影響を最も受けている。早植え大豆は、子実肥大期が 55%、成熟期が 45%と、今後 10～15 日で収穫が始まる見込みであり、単収に与える影響はほぼ無いとみられる(写真)。一方、遅植え大豆は、多くが莢伸長期～子実肥大期にあり、今後の降雨次第では粒の肥大が進み、単収の改善が期待される。

【需要状況】USDA によれば、2025/26 年度の実消費量は、前月予測から 0.3 百万トン下方修正され、搾油用需要の減少を受け前年度から 4.3%減の 47.9 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2025/26 年度の実輸入量は、前月予測からの変更はなく、同国への大豆主要供給国であるパラグアイの実産量増加等を受け前年度から 18.7%増の 7.5 百万トンの見込み。2025/26 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、9月に輸出税が一時的に撤廃されたこと等を受け前年度から 4.8%増の 8.3 百万トンの見込み。輸出税撤廃時に、中国が大量に購入したとみられる。

アルゼンチン政府は、2025 年 12 月 12 日、大豆の輸出税を 26%から 24%に引き下げた。政府は、9月に一時的に輸出税を撤廃したものの、設定した輸出額の上限に達したため、元の税率である 26%に戻っていた。これは、生産者の税負担を軽減し、農業分野の競争力を高めることを目的としている(表)。

USDA によれば、2025/26 年度の実在庫量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少等を受け前年度から 2.8%減、過去5年平均(22.6 百万トン)から 1.3%増の 22.9 百万トンの見込み。実在庫率は前年度から 0.1 ポイント増の 40.8%となる見込み。

大豆—アルゼンチン

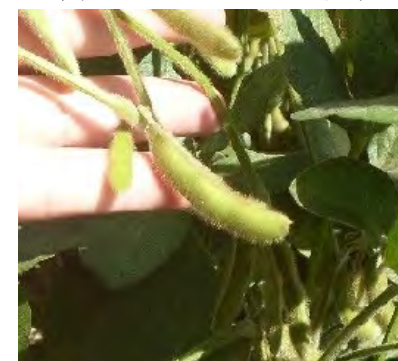
(大豆は、概ね 10～1月に作付けされ、3～7月に収穫される。)

(単位:百万トン)

年 度	2023/24	2024/25 (見込み)	2025/26 (25年10月～26年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	48.2	51.1	48.0 (47.0)	▲ 0.5	▲ 6.1
消費量	43.8	50.0	47.9 (48.5)	▲ 0.3	▲ 4.3
うち搾油用	36.6	43.2	41.0 (42.0)	-	▲ 5.2
輸 出 量	5.1	7.9	8.3 (5.0)	-	▲ 4.8
輸 入 量	7.8	6.3	7.5 (6.5)	-	18.7
期末在庫量	24.1	23.6	22.9 (3.8)	-	▲ 2.8
期末在庫率	49.1%	40.7%	40.8% (7.1%)	0.2	0.1
(参考)					
収穫面積(百万ha)	16.37	17.46	16.80 (16.75)	0.30	▲ 3.8
単収(t/ha)	2.95	2.93	2.86 (2.81)	▲ 0.08	▲ 2.4

資料:USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」,
「World Agricultural Production」(10 March 2026)
IGC「Grain Market Report」(19 February 2026)

写真 サンタフェ州の大豆圃場(2月 28 日撮影)



当該圃場の早植え大豆は、11月 25 日頃に作付けされ、収穫は4月上旬を予定している。生育ステージは子実肥大期である。単収は3トン/ヘクタールと見込まれる。

撮影者: José Daniel Peloni

表 アルゼンチンの輸出税率の変遷 (2022 年 12 月 30 日以降)

(単位:%)

政令	公布日	小麦	とうもろこし	大豆	大豆油 大豆粕
政令851/2021号	2022年12月30日	12	12	33	31
政令38/2025号	2025年1月27日	9.5	9.5	26	24.5
政令439/2025号	6月27日	9.5	12	33	31
政令526/2025号	7月31日	9.5	9.5	26	24.5
政令682/2025号	9月22日	0	0	0	0
政令526/2025号	9月24日(※)	9.5	9.5	26	24.5
政令877/2025号	12月12日	7.5	8.5	24	22.5

※9月に一時的に輸出税を撤廃したものの、設定した輸出額の上限に達したため、以前の輸出税が復活した。

資料:ロサリオ穀物証券取引所「Evolución de los derechos de exportación para productos agroindustriales seleccionados」をもとに農林水産省にて作成

(参考1)本レポートに使用されている各国の市場年度について (2025/26年度)

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	25年6月～26年5月	25年9月～26年8月	25年8月～26年7月	25年9月～26年8月
カナダ	25年8月～26年7月			25年8月～26年7月
豪州	25年10月～26年9月		26年3月～27年2月	
EU	25年7月～26年6月	25年10月～26年9月		
中国	25年7月～26年6月	25年10月～26年9月	25年7月～26年6月	25年10月～26年9月
ロシア	25年7月～26年6月	25年10月～26年9月		25年9月～26年8月
ウクライナ	25年7月～26年6月	25年10月～26年9月		
ブラジル		26年3月～27年2月	26年4月～27年3月	25年10月～26年9月
アルゼンチン	25年12月～26年11月	26年3月～27年2月		25年10月～26年9月
タイ			26年1月～12月	
インド	25年4月～26年3月		25年10月～26年9月	
ベトナム			26年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
 例えば、2025/26年度は、米国の小麦では2025年6月～2026年5月、ブラジルのとうもろこしでは2026年3月～2027年2月です。
 なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads> (「Reference Data」タブを参照)

(参考2)単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel (ブッシェル) (穀物により異なる)	0.027216	メトリックトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772	メトリックトン	大麦	
	0.025401	メトリックトン	とうもろこし	
	0.014515	メトリックトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359	メトリックトン	コメ	米国等

2 面積

1Acre(エーカー)	0.40469	ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16	ヘクタール	タイ
1 亩(ムー)	0.0667	ヘクタール	中国

3 その他

1ガロン	4.536	リットル	英国
1ガロン	3.785	リットル	米国
1LAKH(ラーク)	10万	位取り	インド
1斤	500g	重量	中国

華氏→摂氏 : °C = (° F - 32) ÷ 1.8			
-------------------------------	--	--	--

(参考3)各国のクロープカレンダー一覧(主要品目毎)

主要生産国のクロープカレンダー(小麦)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

国名	N年												N+1年												2024/2025 (単位: 百万トン)		生産量に占める輸出量の割合
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	生産量 (シェア)	輸出量 (シェア)	
中国													140 (17.5%)	1 (0.5%)	0.7%												
EU													122 (15.3%)	27 (12.9%)	22%												
インド													113 (14.2%)	0.2 (0.1%)	0.2%												
ロシア													82 (10.2%)	44 (21.1%)	53%												
アメリカ													54 (6.7%)	22 (10.8%)	42%												
カナダ													35 (4.4%)	27 (13.1%)	77%												
オーストラリア													34 (4.3%)	25 (12.1%)	73%												
パキスタン													31 (3.9%)	1 (0.2%)	2%												







資料 : AMIS 「Supply and demand balances manual」、USDA 「Crop Calendars」、 「PS&D」 (2025.5)

注 : 生産量のシェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。
冬小麦と春小麦の収穫量の割合は便宜的にデュラム小麦は全て春小麦としている。

その他 : 188 (23.6%) 輸出量 60 (29.2%)

主要生産国のクロープカレンダー(米)







※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

国名	N年												N+1年												2024/2025 (単位:百万トン)		生産量に占める輸出量の割合
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	生産量 (シェア)	輸出量 (シェア)	
インド 	<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year 雨季(カリフ期) 播種 → 収穫 乾季(ラビ期) 播種 ← 収穫 </div>												147 (27.3%)	25 (39.9%)	17%												
中国 	南部二期作 一期目 播種 → 収穫 北部 一期作 播種 → 収穫 南部二期作 二期目 播種 → 収穫												145 (27.0%)	1 (1.5%)	0.6%												
バングラデシュ 	播種(アマン種) → 収穫 播種(アラス種) → 収穫 播種(ホロ種) → 収穫												37 (6.8%)	0 (0.0%)	0.0%												
インドネシア 	二期作 一期目 播種 → 収穫 二期作 二期目 播種 → 収穫												35 (6.4%)	0 (0%)	0.0%												
ベトナム 	播種 冬春作 → 収穫 播種 夏秋作 → 収穫 播種 冬作 → 収穫												27 (5.0%)	8 (12.9%)	29%												
タイ 	播種 雨季作 → 収穫 播種 乾季作 → 収穫												21 (3.8%)	7 (11.4%)	34%												

資料: AMIS 「Supply and demand balances manual」、USDA 「Crop Calendar」、PS&D (2025.5) 注: 生産量のシェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。 その他: 127 (23.6%) 21 (34.4%)

主要生産国のクロープカレンダー(とうもろこし)

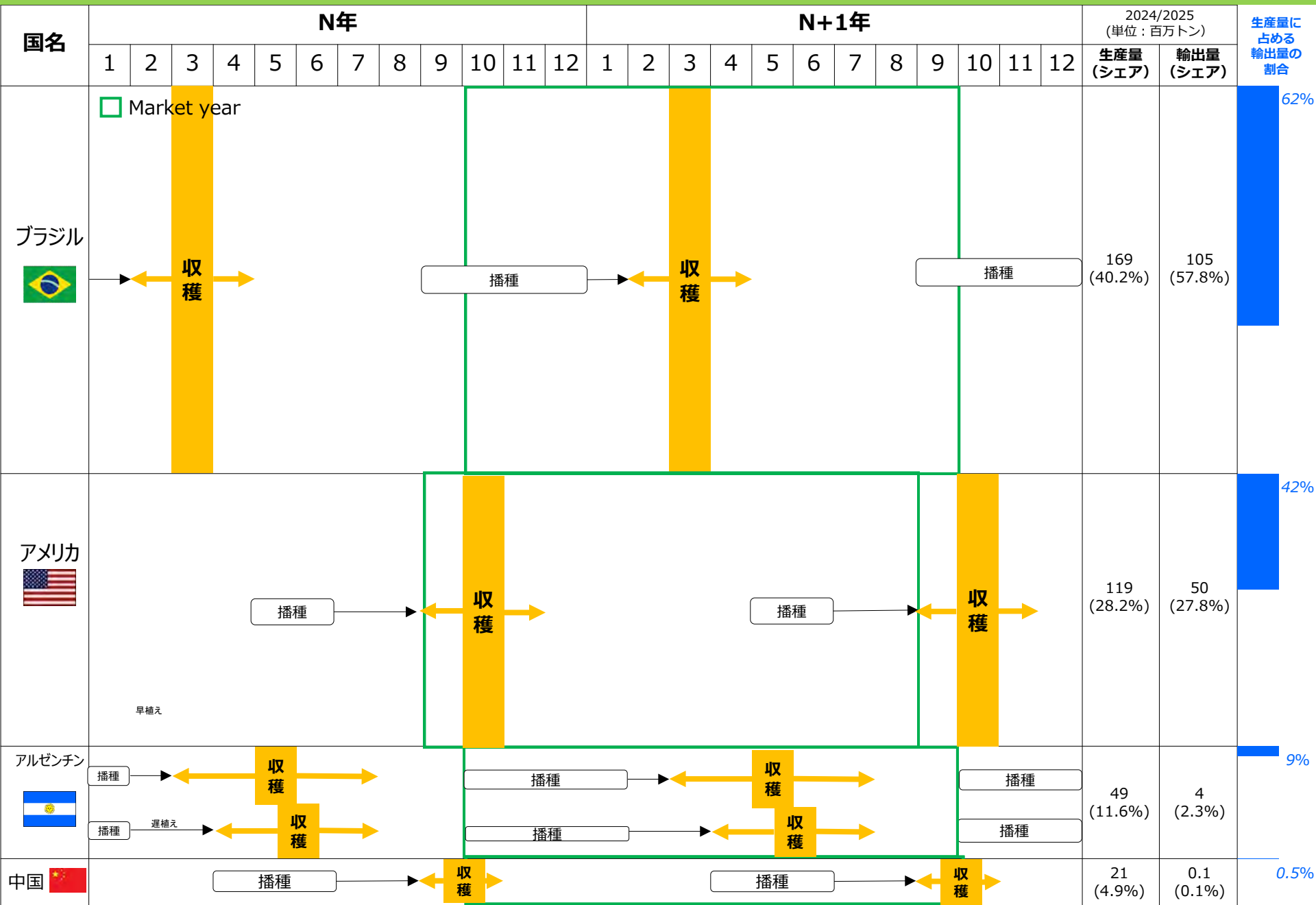
※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

国名	N年												N+1年												2024/2025 (単位：百万トン)		生産量に占める輸出量の割合
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	生産量 (シェア)	輸出量 (シェア)	
アメリカ 	<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year </div> 播種 → 収穫 → 播種 → 収穫												378 (30.9%)	66 (34.9%)	17%												
中国 	播種 (春作) → 収穫 → 播種 (夏作) → 収穫 → 播種 → 収穫												295 (24.1%)	0 (0.0%)	0.0%												
ブラジル 	夏とうもろこし 播種 → 収穫 → 播種 → 収穫 → 播種 → 収穫 冬とうもろこし 播種 → 収穫 → 播種 → 収穫												130 (10.6%)	43 (22.7%)	33%												
EU 	播種 → 収穫 → 播種 → 収穫												59 (4.9%)	2 (1.3%)	4%												
アルゼンチン 	播種 → 収穫 → 播種 → 収穫 → 播種 → 収穫												50 (4.1%)	36 (18.7%)	71%												
インド 	乾期(ラビ期) 播種 → 収穫 → 雨期(カリフ期) 播種 → 収穫 → 播種 → 収穫												40 (3.3%)	0.4 (0.2%)	0.9%												

資料：AMIS「Supply and demand balances manual」、USDA「PS&D」(2025.5) 注：生産量のシェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。 その他：269 (22.1%) 42 (22.2%)

主要生産国のクロープカレンダー(大豆)








※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



資料: AMIS 「Supply and demand balances manual」、USDA 「PS&D」 (2025.5) 注: 生産量のシェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。 その他: 63 (15.1%) 22 (12.0%)

主要生産国のクロープカレンダー(菜種)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

国名	N年												N+1年												2024/2025 (単位: 百万トン)		生産量に占める輸出量の割合
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	生産量(シェア)	輸出量(シェア)	
カナダ 	<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year </div>												<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year </div>												19 (22.1%)	9 (46.7%)	47%
EU 	<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year </div>												<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year </div>												17 (19.8%)	0.3 (1.6%)	2%
中国 	<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year </div>												<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year </div>												16 (18.6%)	0 (0.0%)	0.0%
インド 	<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year </div>												<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year </div>												12 (13.5%)	0 (0.0%)	0.0%
オーストラリア 	<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year </div>												<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year </div>												6 (7.0%)	5 (25.9%)	82%
ロシア 	<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year </div>												<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year </div>												5 (5.5%)	1 (4.5%)	18%
ウクライナ 	<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year </div>												<div style="border: 1px solid green; padding: 5px;"> Market year </div>												4 (4.5%)	3 (17.2%)	85%

資料: USDA 「Crop Calendar」、 「PS&D」 (2025.5)

注: 生産量のシェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。

その他: (9.1%)
(4.1%)

【利用上の注意】

食料安全保障月報は、国際穀物需給に関し、在外公館からの情報、農林水産省が独自に各国の現地コンサルタント等を通じて入手した情報、公的機関(各国政府機関、FAO、IGC等)の公表資料、Oil World 等民間の調査会社から購入した資料、その他、商社情報や新聞情報等から入手した情報を農林水産省の担当者において検証、整理、分析したものです。

○ 食料安全保障月報で使用している統計数値は、主に米国農務省が 2026 年3月中旬までに発表した情報を引用しています(最新年度 2025/26 年度です)。

さらに詳細なデータ等が必要な場合は、米国農務省のホームページを参照願います。

<https://www.usda.gov/about-usda/reports-and-data/agency-reports>

主な参考資料

「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

<http://www.usda.gov/oce/commodity/wasde/>

「Grain:World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/grain-world-markets-and-trade>

「Oilseeds:World Markets and Trade」

<https://www.fas.usda.gov/data/oilseeds-world-markets-and-trade>

「World Agricultural Production」

<https://www.fas.usda.gov/data/world-agricultural-production>

「PS&D」

<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/advQuery>

など

○ 本月報に記載のない情報は以下を参照願います。

(1) 農林水産省の情報

ア 我が国の食料需給表や食品価格、国内生産等に関する情報

・食料需給表:<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/fbs/>

・食品の価格動向:<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/kouri/index.html>

・米に関するマンスリーレポート:<https://www.maff.go.jp/j/seisan/keikaku/soukatu/mr.html>

イ 中・長期見通しに関する情報

・食料需給見通し(農林水産政策研究所):<https://www.maff.go.jp/primaff/seika/jyukyu.html>

(2) 農林水産関係機関の情報(ALICの情報サイト):<https://www.alic.go.jp/>

・砂糖、でんぷん:<https://www.alic.go.jp/sugar/index.html>

・野菜:<https://www.alic.go.jp/vegetable/index.html>

・畜産物:<https://www.alic.go.jp/livestock/index.html>

(3) その他海外の機関(英語及び各国語となります)

ア 国際機関

- ・国連食糧農業機関(FAO):<https://www.fao.org/home/en>
- ・国際穀物理事会(IGC):<https://www.igc.int/en/default.aspx>
- ・経済協力開発機構(OECD)(農業・水産業分野):<https://www.oecd.org/en/topics/agriculture-and-fisheries.html>
- ・農業市場情報システム(AMIS):<http://www.amis-outlook.org/>

イ 各国の農業関係機関(代表的なものです)

- ・米国農務省(USDA):<https://www.usda.gov/>
- ・ブラジル食料供給公社(CONAB):<https://www.gov.br/conab/pt-br>
- ・カナダ農務農産食品省(AAFC):<https://agriculture.canada.ca/en/sector/crops/reports-statistics>
- ・豪州農業資源経済科学局(ABARES):<http://www.agriculture.gov.au/abares>

- データは予測値であり、毎月各種データの更新を受けて改訂されますので留意してください。
- 資料原典で表示されるブッシェル及びエーカー等の単位は、それぞれトン及びヘクタールに換算して記載しています。
- 資料原典において現地通貨で表示される金額を円換算するにあたっては、日本銀行国際局・財務大臣公示の基準外国為替相場及び裁定外国為替相場等の換算レートを用いています。
- 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads>
(注:同サイトの「Reference Data」を参照)
- 期末在庫率の対前年度増減率の欄は、前年度とのポイント差になります。なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合があります。
- 本資料の引用等につきましては、出所(農林水産省発行「食料安全保障月報」)を併記願います。

なお、生産見通し等の予測は、各国際機関及び各国の農業機関によりそれぞれの分析手法に基づき行われるため、機関によってデータの相違がある場合があります。また、各国の農業機関の公表を受けて、国際機関の見通しが改訂される場合があります。

ロシアが占領しているウクライナのクリミアの生産量については、米国農務省はウクライナとして集計しています。

○ 本月報の電子版は下記アドレスでご覧になれます。

農林水産省 食料安全保障月報

https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/jki/j_rep/index.html

○ 本資料に関するご質問、ご意見等は、下記までお願いします。

連絡先 農林水産省大臣官房政策課食料安全保障室
TEL:03-6744-2368(直通)

「食料安全保障月報」に関するアンケート

いつも食料安全保障月報（以下、「月報」）を御愛読いただきありがとうございます。
今後のより良い月報の作成に生かすため、皆様の声を是非お聞かせください。

- 1 あなたの所属を教えてください。（選択式）
商社、食品・飼料メーカー、食品卸・小売業、調査会社、自治体、大学・研究機関、大
学生・高校生、その他
- 2 あなたの所属する会社・組織が所在する地域を教えてください。（選択式）
北海道、東北、関東（東京以外）、東京、中部、近畿、中国、四国、九州・沖縄、海外
その他
- 3 月報をどこで知りましたか。（選択式）
口コミ、以前から（海外食料需給レポート時代から）、検索エンジン、農水省 HP、
書籍、その他
- 4 月報を書籍で知った場合、その書名が分かれば教えてください。
- 5 月報で一番関心／参考にしている項目は何ですか。（複数選択可）
概要編（今月の主な動き（穀物等の国際価格の動向）、今月の注目情報、今月のコラム、
その他）
品目別需給編（小麦、とうもろこし、コメ、油糧種子（大豆））
特別分析トピック
- 6 今後重点的に取り上げてほしいテーマは何ですか。（自由記載）
テーマ例：世界的な異常気象（干ばつ、洪水など）の穀物生産への影響
地域別の穀物需給動向（米国、南米、豪州、東南アジア等）
ウクライナ情勢の生産・貿易への影響
中国の需要・輸入動向
世界的な人口増加による食料需要・貿易への影響
中長期（10年先）、超長期（30年先）的な食料需給見通し
- 7 今後月報に期待することはありますか。（自由記載）

ご回答は以下 URL または右の QR コードよりアクセス願います。

https://www.contactus.maff.go.jp/j/form/kanbo/anpo/anpo_geppou_ankeeto.html

